山梨県北巨摩郡白州町

上北田遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1993

白州町教育委員会
峡北土地改良事務所

山梨県北巨摩郡白州町

上北田遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1993

白州町教育委員会
峡北土地改良事務所

1
2
3
4
5
6
7
8
9

序

この報告書は、平成３年度県営圃場整備事業に伴い、発掘調査された上北田遺跡の調査結果をまとめたものであります。

白州町には、縄文時代から古代、中世までの各時代にわたり、人々の生活の跡を語る埋蔵文化財包蔵地が数多く分布し、各遺跡からは、それぞれの時代の土器類等が発見されています。特に、白須・鳥原・横手地区等の広い段丘面には、大規模な遺跡の存在が知られています。

全町を対象とした水田の圃場整備事業は、昭和58年度から開始され、その間には昭和59年の縄文時代中期の根古屋遺跡の発掘をはじめ、数か所の発掘調査が行われました。

上北田遺跡は、釜無川右岸の高位段丘面上、白州町横手字上北田地内に所在し、約9,500㎡の範囲にわたり発掘調査されました。

その結果、縄文時代前期の住居址22軒、平安時代の住居址３軒、掘立柱建物址２棟、土坑230基、溝状遺構等が検出されました。その検出された住居址から出土した土器、石器などは現在、中央公民館のホールに設置されたケースに展示されています。

最後に、この事業に協力を賜わりました峡北土地改良事務所・山梨県教育庁学術文化課等関係機関の皆様をはじめ、横手区長を中心として直接にご協力をいただきました皆様方に厚く御礼申し上げます。

平成５年３月

白州町教育委員会

教育長　大久保　勝　雄

例　　言

1．本書は、平成３年度県営圃場整備事業に伴って発掘調査した、山梨県北巨摩郡白州町字上北田・古御所に所在する上北田遺跡の調査報告書である。

2．発掘調査は、峡北土地改良事務所との負担協定による委託と文化庁・山梨県より補助金を受けて、白州町教育委員会が実施した。

3．遺構の実測は、株式会社パスコへ委託して行った。

4．遺物の拓本・実測は、川崎、込山（裕）が行い、トレース・写真撮影は杉本が行った。

5．本文の執筆は、Ⅰ・Ⅲ章を杉本が、Ⅱ・Ⅳ章を武藤が担当した。

6．本調査の出土品・諸記録は、白州町教育委員会が保管している。

7．発掘調査及び本書の作成にあたり次の諸氏に御教示いただいた。記して感謝いたします。
伊藤恒彦、今福利恵、小渕忠秋、小林公明、坂本美夫、下平博行、瀬田正明、長沢宏昌、和田　豊　（敬称略、五十音順）

8．本調査にあたり、峡北土地改良事務所・山梨県教育庁学術文化課及び地元の横手区の皆様に御理解と御指導をいただいた。心から謝意を表する次第です。

調　査　組　織

調査主体　白州町教育委員会（教育長　道村　初夫　～平成４年９月）
（　〃　　大久保勝雄　平成４年10月～）

事　務　局　有賀祥司（教育課長）、山本賢二（総務係長）、坂本正明（社会教育係長）
古屋明美、白砂文香（～平成４年３月）

調査担当者　武藤雄六、折井　敦、杉本　充

調査参加者　中山玉夫、中山てる志、桜井稲子、込山裕代、武藤　實、込山真砂子
小池登喜子、川崎東洋雄、大久保鶴子、大久保千恵子、山本静枝、中山恵子

凡　　例

1．本調査において20m四方のグリッドを、磁北にあわせて設定した。

2．遺構平面図は、１／80に統一した。スクリーントーンは、地床炉を表している。

3．遺物は、１／３を基本とし、土器の完形復元したものを１／４、小型石器などは２／３で図示してある。

4．内面に施文された土器は、内面の拓影を断面図の右に図示した。

目　　次

序
例　　言
目　　次
挿図目次
図版目次
Ⅰ章　調査状況……1
　1節　調査に至る経過……1
　2節　調査経過……1
Ⅱ章　遺跡の位置と概観……2
Ⅲ章　遺構と遺物……3
　1節　住居址……3
　2節　掘立柱建物址……10
　3節　溝状遺構……11
　4節　土　坑……11
Ⅳ章　まとめ……18
挿　図
付　編　炭化材・炭化種子同定報告　パリノ・サーベイ株式会社
図　版

挿　図　目　次

図1．遺跡位置図……19
図2．調査区位置図……20
図3．1区全測図……20
図4．2区全測図……21
図5．2号住居址……23
図6．4号住居址……23
図7．5号住居址……24
図8．6号住居址……24
図9．7号住居址……25
図10．8号住居址……25
図11．9号住居址……26
図12．10号住居址……26
図13．11号住居址……27
図14．12号住居址……27
図15．13号住居址……28
図16．15号住居址……28
図17．16号住居址……29
図18．17号住居址……29
図19．18号住居址……30
図20．19号住居址……30
図21．20号住居址……31
図22．21号住居址……31

図23．22号住居址……32
図24．23号住居址……32
図25．24・25号住居址……33
図26．１号住居址……34
図27．３号住居址……34
図28．14号住居址……34
図29．１号掘立柱建物址……35
図30．２号掘立柱建物址……35
図31．２号住居址出土遺物……36
図32．４号住居址出土遺物①……37
図33．４号住居址出土遺物②……38
図34．５・６・７号住居址出土遺物…39
図35．８号住居址出土遺物……40
図36．９・10号住居址出土遺物……41
図37．10・11・15号住居址出土遺物…42
図38．16号住居址出土遺物……43
図39．17号住居址出土遺物……44
図40．18号住居址出土遺物①……45
図41．18号住居址出土遺物②……46
図42．18号住居址出土遺物③……47
図43．18号住居址出土遺物④……48
図44．19号住居址出土遺物……49
図45．20号住居址出土遺物①……50
図46．20号住居址出土遺物②……51
図47．20号住居址出土遺物③……52
図48．20号住居址出土遺物④……53
図49．20号住居址出土遺物⑤……54
図50．20号住居址出土遺物⑥……55
図51．21号住居址出土遺物……56
図52．22号住居址出土遺物……57
図53．23号住居址出土遺物……58
図54．23・24号住居址出土遺物……59
図55．24・25号住居址出土遺物……60
図56．25・３・14号住居址出土遺物…61

図　版　目　次

図版１．炭化材
図版２．炭化種子
図版３．全景
図版４．近景
図版５．空撮
図版６．２・４～９号住居址
図版７．10～13・15・16号住居址
図版８．17～22号住居址
図版９．23～25号住居址、粘土貯蔵穴、１号住居址
図版10．３・14号住居址、１・２号掘立柱建物址
図版11．復元した土器①
図版12．復元した土器②
図版13．復元した土器③
図版14．復元した土器④
図版15．土器文様①
図版16．土器文様②
図版17．土器文様③
図版18．18号住居址出土石器
図版19．装飾品・土師質土器
図版20．炭化種子

Ⅰ章　調　査　状　況

１節　調査に至る経過

平成３年度着工予定の山梨県北巨摩郡白州町横手地区県営圃場整備事業に伴い、平成２年10月に実施した埋蔵文化財範囲確認調査により、周知の埋蔵文化財包蔵地である上北田遺跡の範囲が確認された。

範囲確認調査は、県営圃場整備事業予定区域40,000㎡を対象として、幅２ｍ・長さ10ｍの試掘坑を任意に設定し、重機により耕作土及び水田床土を排土した後、人力により地山面まで掘り下げ、遺構・遺物の有無を確認する方法で行った。

その結果、縄文時代早期末から前期初頭と推定される住居址２軒と、中世に属する土坑数基が検出され、これまでの分布調査で確認された範囲より南東に拡がる縄文時代早期末から前期初頭の集落と中世の土坑群の存在が推定されたため、峡北土地改良事務所の委託、国・県からの補助金を受けて、町教育委員会が主体となり本調査を実施することとなった。

２節　調査経過

発掘調査は、平成３年６月27日から開始し、同年10月４日に現地調査を終了した。その後、報告書作成までの整理作業が完了したのは、平成５年３月25日であった。

調査方法は、平成２年度に調査された本遺跡の南に隣接する新居道上遺跡と同様遺物包含層がないため、バックホーにより調査区全体を遺構検出面であるローム面まで掘り下げた。例外として４号住居址がローム面より15㎝程上位で検出されたため、４号住居址の周辺とその南側のＦ－４区は、人力により掘り下げ若干の遺物を採集した。

調査は、まず農道によって分断される南側を１区（図２）とし７月１日から８日まで堀り下げ測量を終了した。２区とした北側は、７月４日から９月９日まで掘り下げ、引きつづき地上測量とバルーンによる航空写真撮影を10月４日まで行い現地作業を終了した。現地説明会は行うことができなかったが、10月５日に県埋文センターと県考古学協会共催の遺跡発表会において本調査の発表を行った。（発表時には、本遺跡の時期を縄文時代前期初頭としたが、町内で調査されている根古屋遺跡11号住居址、板橋遺跡１～３号住居址を除き、新居道上遺跡１号住居址と本遺跡の22軒の住居址の時期は、縄文時代前期前半が適当であり訂正しておきたい。）

現地作業終了後、多量の炭化種子が出土した17・18号住居址の覆土を室内で２ヶ月乾燥させ17号住15kg、18号住30kgを水洗選別した。水洗選別は、流水で浮遊物を茶こしですくい、沈殿物を５ミリと２ミリのフルイを通し、乾燥後に選別した。その結果、手掘りで出土したものとほぼ同量の炭化種子が採集できた。採集された種子は、炭化材とともに遺存状態のよいものを選び、パリノ・サーベイ株式会社に同定を委託した。結果は付編として本書に掲載した。

Ⅱ章　遺跡の位置と概観

上北田遺跡は、山梨県北巨摩郡白州町横手字上北田2,150番地付近に所在する。（図１）

この地は赤石山地の北端、甲斐駒ヶ岳の前山群を構成する巨摩山地の一つ黒戸山の山麓で、東に向かって傾斜する扇状地の上にある。この扇状地は、釜無川に向かって東流する尾白川と大武川の支流滝道川との間、中山に遮られた地域で、標高650～750ｍを示す。

扇状地は、フォッサ・マグナの西縁、糸魚川・静岡構造線という大断層の断層面の上に、黒戸山花崗岩の分解砂礫が堆積し、その上に火山灰（テフラ、以後ローム層と呼ぶ）が積もって形成された。ローム層の堆積初期には、この扇状地は極めて不安定な状態を示し、八ケ岳山麓の所謂チョコロームとパミス・スコリアの三層が整合なのに対し、不整合というよりむしろ掻き混ぜた状態で堆積している。続いて堆積の中～末期では、安定した堆積状態を示している。ところが、時として糸静線に直交する小断層の発達する個所があり、そこでは、隣接する小河川や帯状の小丘陵ごとローム層と砂礫層が交互に見られることがある。

今年度発掘調査した上北田遺跡では、前年度調査の新居道上遺跡に続く１区で、１ｍ余厚程度の中部ローム層の下部で前述の三種混合層に達し砂礫層へと移行する。ところが、小河川を境にその南ではローム層が無く砂礫層で上部は砂層となる。また更に、東西に通ずる農道を隔てた２区でのローム層は、最下部を除き中・上部ロームの堆積が八ヶ岳山麓のそれと同一の層序を示し、南寄りで１区の三種混合層が押被さる。したがって、１区と２区との関係は逆断層となり、また、２区の西方にある小丘陵は衝上丘陵ということになる。

次に遺跡での表土は、黒戸山花崗岩の風化分解した砂と細粒花崗岩の小礫を含んだ黒色の腐植土からなり、少なくとも、今から10,000年前以降、断層活動や黒戸山の大規模な崩落などはなかったようである。現在、標高720ｍ以下および遺跡地の大部分は畑と、緩い傾斜面を切り盛りして開田している。（図２）

今年度の調査は、地形や道路と排土置場等を考慮して１区と２区に分割して行った。１区は、表土を除いた後、中部ローム下部面を平坦に切り盛りして開田された地区で、削られた部分での遺構はほとんど消失し、盛られた場所では円形～長方形の土坑が三種混合層に達して掘込まれていた。２区は、西方、衝上丘陵の直下（695ｍ）から150ｍ下方の標高684ｍ地点にわたって実施した。この間、畑は１筆だけで他はすべて水田であった。水田は、最上部の軟質ロームおよび長石片を含む上部ローム層に達して削られていた。畑は、長芋を栽培していたためトレンチャーによる溝掘りによって深さ１ｍ程も撹乱が及び調査に重大な支障をきたした。２区での遺構は、縄文時代前期前半と平安時代最末の竪穴住居址および、円形と長方形土坑ならびに掘立柱住居などが検出された。これらは、削り面では消失したり、痕跡をとどめる程度にまで削られていた。また、２区を南北にＶ字状の溝が走っていたが、遺跡の北を東流する小河川で消失していた。（図３・４）

Ⅲ章　遺構と遺物

１節　住居址

本調査では、竪穴住居址は25軒検出された。１・３・14号住居址（平安時代）の３軒を除いたのこり22軒すべて縄文時代前期前半に属すると思われる。22軒の住居址はすべて、主柱穴が直径、深さとも25cm程度で、床面が軟弱であった。出土した土器は、多くは無文でまれに口縁の近くに斜格子や、櫛状工具か撚糸で斜の沈線を施文された繊維を多量に含む土器に、少量の中越式土器や神ノ木式土器などが加わる。土器の分類は、すべての住居址において大多数を占める無文のものをⅠ群とし、隆帯・刺突・斜格子沈線のあるものをⅡ群（図版15－ａ～ｄ）、櫛状工具や撚糸による沈線のあるものをⅢ群(図版15－ｅ～ｈ・16－ａ～ｄ)、縄文・組紐文・ループ文・コンパス文・刺突文・列点文などを施されたものをⅣ群(図版16－ｇ，ｈ・17－ａ～ｆ)、微量みられた指頭圧痕が顕著で器厚が２～３ミリのものをⅤ群（図版17－ｈ）とした。その下に繊維を含むものを１類、含まないものを２類とした。Ⅰ群２類とⅡ群２類が中越式、Ⅳ群２類が神ノ木式に相当する。量的に大多数を占めるⅠ群１類の土器は、一括して出土し復元の容易であったもののみ図示した。石器は、阿久遺跡において固定式石皿とされている扁平大型の台石と使用痕のある剥片(刃こぼれが肉眼で確認できるもの、ほとんど黒曜石)を除き住居址出土のものはすべて図示した。

２号住居址（図５．31・図版６－ａ，11－１）

西から東に傾斜する調査区の西側、Ｅ－３区に位置する。隅丸長方形を呈し、5×4.3mを測る。58-1・-2・59号土坑に切られている。炉は、わずかに掘り込まれた地床炉である。主柱穴は、検出された２本の他にあと２本存在すると考えられたが検出されなかった。覆土は、４層に分けられた。１層は、ロームを微量含む暗褐色土。２層は、ロームを少量と炭化材を多量含む暗褐色土。３層は、ロームと多量の炭化材を含む暗褐色土。４層は、ロームと多量の炭化材と微量の焼土を含む暗褐色土である。

土器（図31－１～４）は、１を除き繊維が含まれている。１は、東側の主柱穴と東南隅との中間の床直で一括出土した。石器は、スクレイパー３点（５～７）、打製石斧４点（８～11)、叩石１点 (12)、使用痕のある剥片２点が出土している。石材は、５が黒曜石、６が硅質頁岩、７・９が砂岩、８・12が結晶片岩、10・11が安山岩である。

４号住居址（図６．32，33・図版６－ｂ，11－２）

調査区西側、Ｅ－４区に位置する。２号住居址から東へ14m離れている。隅丸長方形を呈し、6.3×5mを測る。掘り込みのない地床炉をもつ。覆土は、３層に分けられた。１層は、ロームを微量含む黒褐色土。２層は、ロームを少量含む暗褐色土。３層は、径５cm程のロームを斑状に含む暗褐色土である。

土器（図32－１～７）は、１を除き繊維を含んでいる。石器は、スクレイパー９点（32－８～15・33－３）、石匙２点（33－１，２）、石鏃１点（４）、叩石２点（５，６）、磨石２点（７，８）、石皿２点（10，11）、使用痕のある剥片４点がある。石材は、32－８～14，33－１～４が同質の青灰色のチャート、32－15が鉄平石、33－５が砂岩、６が結晶片岩、７～10が安山岩である。他に、水晶片３点がある。

５号住居址（図７．34－１～３・図版６－ｃ）

調査区中央西寄り、Ｅ－４区に位置する。長いも畑として利用されていた部分のため６，８号住居址とともにトレンチャーにより約30cmおきに幅30cmずつ破壊されていた。覆土は多量のロームを含む暗褐色土で、かなり撹乱を受けていた。掘り込みのない地床炉をもつ。

文様の認められる土器（図34－1）は、繊維を含む１点だけである。石器は、スクレイパー２点（34－２，３）がある。石材は、２がチャート、３が黒曜石である。

６号住居址（図８，34－４～７・図版６－ｄ）

調査区中央、Ｄ－６区に位置する。隅丸長方形を呈し、4.6×4mを測る。トレンチャーによる破壊をうけている。炉は確認できなかった。覆土はロームを多量含む暗褐色土で、撹乱を受けている。

文様の認められる土器（図34－４）は、繊維を含む１点だけである。石器は、スクレイパー３点（34－５～７）、使用痕のある剥片６点がある。石材は、５が黒曜石、６が砂岩、７が鉄平石である。

７号住居址（図９．34－８・図版６－ｅ）

調査区中央、Ｅ－６区に位置する。東側約半分が削平されている。隅丸方形を呈すると思われ3.5×（2.3）ｍを測る。掘り込みのない地床炉をもつ。覆土は、ロームと黒褐色土を斑状に含む褐色土である。

土器は、繊維を含んだ小片が数点出土しただけである。石器（図34－８）は、扁平な安山岩の表面を楕円形に凸凹をつけた石皿の未製品が出土している。

８号住居址（図10，35・図版６－ｆ）

調査区中央南寄り、Ｅ－６区に位置する。不整円形を呈し、径5.1ｍを測る。トレンチャーによる破壊を受けている。掘り込みのない地床炉をもつ。炉の東に、安山岩の固定式石皿（11kg）が置かれていた。

土器（図35－１～６）は、いずれも繊維を含んでいる。6は、かなり摩耗しているが関山式と確認できる唯一の土器片である。石器は、スクレイパー３点（35－７，８，12）、打製石斧２点（９，10）、石核１点（11）、使用痕のある剥片３点がある。石材は、７，８，11，12がチャート、９が細粒花崗岩、10が砂岩である。

９号住居址（図11，36－１～10・図版６－ｇ，ｈ）

調査区中央北寄り、Ｄ－５区に位置する。南側の壁が水路により破壊されていたが、壁柱穴から一辺４ｍ程の隅丸方形を呈するものと推定できる。掘り込みのない地床炉をもつ。115, 116, 221号土坑によって切られている。本址の覆土は、３層に分けられた。１層は、多量の黒褐色土を斑状に含む暗褐色土。２層は、黒褐色土と少量のロームを含む暗褐色土。３層は、ロームブロックを多量含む暗褐色土である。

土器（図36－１～８）は、６のみ繊維が含まれている。１は、炉のやや西で一括して出土した（図版６－ｈ）。括れ部に円形の剥落が数ヶ所認められる。８は、丸棒状工具により右上から左下に斜めに刺突を施され、口唇部にも同じ工具で右から左に斜めに刺突されている。石器は、石匙１点（36－９）、スクレイパー１点（10）、使用痕のある剥片３点がある。石材は、９，10ともホルンフェルスである。

10号住居址（図12，36－11～17，37－１，２・図版７－ａ）

調査区北側、Ｃ－５区に位置する。隅丸長方形を呈し、4.5×4mを測る。覆土は、多量の黒褐色土を斑状に含む暗褐色土で、かなり撹乱を受けていた。掘り込みのない地床炉をもつ。

土器は、極少量しか出土しなかった。施文されたものは、２点（図36－11，12）だけであった。石器は、スクレイパー３点（36－13～15）、石匙１点（16）、石鏃１点（17）、磨石２点（37－１，２）、使用痕のある剥片１点がある。石材は、36－13がホルンフェルス、14，17が黒曜石、15が硅質頁岩、16がチャート、37－１，２が安山岩である。

11号住居址（図13，37－３～９・図版７－ｂ）

調査区北側、Ｃ－６区に位置する。隅丸長方形を呈し、3.8×3mを測る。213号土坑に切られている。覆土は、２層に分けられた。１層は、黒褐色土を斑状に含む暗褐色土で、耕作による撹乱を受けている。２層は、ロームを多量に含む暗褐色土である。掘り込みのない地床炉をもつ。

土器（図37－３～７）は、すべて繊維を含んでいる。石器は、黒曜石製のスクレイパー１点（37－８）、安山岩製の磨石１点（９）がある。

12号住居址（図14・図版７－ｃ）

調査区北端、Ｂ－６区に位置する。隅丸長方形を呈し、3.3×3mを測る。129，135，211，212号土坑に切られている。主柱穴と炉は、検出されなかった。本址は、ほとんど削平されていたが、壁柱穴と、繊維を含む無文の土器片と黒曜石の剥片から、縄文時代前期前半に属するものと推定された。

13号住居址（図15・図版７－ｄ）

調査区中央東側、Ｅ－６，７区に位置する。水田造成の際に削平された区域で検出されたた

め、床面と主柱穴のみ確認された。床面は隅丸長方形を呈し、4.6×3.9mを測る。掘り込みのない地床炉をもつ。遺物は、西南側の柱穴の検出時に繊維を含む土器片が２点出土しただけである。

15号住居址（図16，37－10～16・図版７－ｅ）

調査区東側、Ｄ－７区に位置する。北辺にやや丸みがあるが隅丸長方形を呈し、4.6×4.3mを測る。180，181，214号土坑に切られている。掘り込みのない地床炉をもつ。覆土は、４層に分けられた。１層は、ロームを少量含む暗褐色土。２層は、ロームを含む褐色土。３層は、ロームを多量含む褐色土。４層は、褐色土を含むロームである。

土器（図37－10～14）は、14を除き繊維を含んでいる。石器は、チャート製のスクレイパー１点（37－15）、細粒花崗岩製の磨石１点（16）がある。

16号住居址（図17，38・図版７－ｆ～ｈ，11－４～６）

調査区の北東端、Ｂ，Ｃ－８区に位置する。東側が一部削平されているが、不整形を呈し、5×4.3mを測る。掘り込みのない地床炉をもつ。覆土は暗褐色土で、壁際にはロームの三角堆積が認められた。

土器（図38－１～６）は、２と６を除き繊維は含まれていない。３は、１のなかから出土した（図版７－ｈ）。石器は、スクレイパー４点（38－７，８，11，12）、石匙１点（13）、打製石斧１点（9）、磨石１点（10）、使用痕のある剥片８点がある。石材は、７，８，13がチャート、９が砂岩、10が安山岩、11，12が黒曜石である。他に、水晶片９点がある。

17号住居址（図18，39・図版８－ａ，ｂ）

調査区東端、Ｅ－９区に位置する。集中して検出された９軒のうちの１軒である。隅丸長方形を呈し、4.2×3.6mを測る。掘り込みのない地床炉をもつ。東壁の近くに、台形を呈する細粒花崗岩の固定式石皿（31kg）が置かれていた。覆土は、６層に分けられた。１層は、炭化材とロームを少量含む黒褐色土。２層は、暗褐色土とロームを含む黒褐色土。３層は、多量の炭化材とローム、炭化種子を含む黒褐色土。４層は、ロームを多量含む暗褐色土。５層は、暗褐色土を少量含むローム。６層は、暗褐色土とローム、炭化種子を含む黒褐色土である。セクション（図18）中の黒塗り部分は炭化材である。炭化種子は、楕円形のコナラ属の子葉230ｇ、細片が約120ｇ出土した。

土器（図39－１～10）は、１，２を除き繊維を含まない。石器は、スクレイパー３点（13，14，19）、石鏃１点（20）、打製石斧４点（11，12，15，16）、叩石２点（17，18）、使用痕のある剥片７点がある。石材は、11，13，17が砂岩、12，15が結晶片岩、14，19がチャート、16がホルンフェルス、18が花崗岩、20が黒曜石である。

18号住居址（図19，40～43・図版８－ｃ，９－ｇ，12－１～３，18，20）

調査区東端、Ｅ－９区に位置する。集中して検出された９軒のうちの１軒である。隅丸長方形を呈し、3.8×3mを測る。北西コーナーに、深さ10cm程のテラスが設けられている。検出時のプランがひとまわり大きく方形を呈していたこともあり（17号住居址においても同様であった)、さらに何かしらの施設が上位に設けられていた可能性がある。掘り込みのない地床炉をもつ。南壁近くに、台形を呈する安山岩の固定式石皿（14kg）が置かれていた。覆土は、４層に分けられた。１層は、ロームを微量含む暗褐色土。２層は、ロームを少量含む暗褐色土。３層は、ロームを多量含む暗褐色土。４層は、ロームを含む暗褐色土。１，２，４層には、炭化種子と多量の炭化材が含まれていた。出土した炭化種子（図版20）は、球形のコナラ属の子葉約400ｇ、楕円形のコナラ属の子葉約350ｇ、細片約530ｇ、クリ10個程度、花芽のようなものなどがあった（付編参照)。

土器（図40－１～５，41－１～13）は、40－１～３，41－３，５を除き繊維は含まれない。ほかに、無文で繊維を含む径2.5cmの土製円盤と思われるものが１点あった。石器（図版18）は、スクレイパー４点（42－11～14)、石匙４点（１～４)、石鏃３点（５～７)、ドリル３点（８～10)、磨製石斧２点（15，16)、打製石斧７点（42－17～19，43－１～４)、磨石３点（43－５～７)、叩石２点（８，９)、使用痕のある剥片12点がある。石材は、42－１～３・10～14がチャート、４～９が黒曜石、15，16が蛇紋岩、17，19が鉄平石、18が泥岩、43－１，５～７が安山岩、２が細粒花崗岩、３，４が結晶片岩、８，９が砂岩である。

19号住居址（図20，44・図版８－ｄ，12－４）

調査区東端、Ｅ－８，９区に位置する。集中して検出された９軒のうちの１軒である。東辺が丸みを帯びているがほぼ隅丸長方形を呈し、5.1×4.3mを測る。掘り込みのない地床炉をもつ。覆土は、３層に分けられる。１層は、黒褐色土と少量のロームを含む暗褐色土。２層は、ロームを含む暗褐色土。３層は、ロームを多量含む暗褐色土である。

土器（図44－１～８）は、１～３を除き繊維を含まない。石器は、スクレイパー４点（９～12)、ドリル１点（13)、使用痕のある剥片20点がある。石材は、９が砂岩、10が結晶片岩、11～13が黒曜石である。

20号住居址（図21，45～50・図版８－ｅ，ｆ，12，13－１～３，19－３）

調査区東端、Ｅ－９区に位置する。集中して検出された９軒のうちの１軒である。隅丸長方形を呈し、6.9×5.3mを測る。北側に、18号住居址と同様の深さ10cm程のテラスが設けられている。201号土坑に切られている。棟持柱の柱穴と思われる２本のピットが、ほぼ長軸線上に隣接している。検出された周溝から１回以上の拡張が考えられる。炉は掘り込みのない地床炉で、中央から西に細長く炭化材を含んだ焼土が堆積していた。覆土は、５層に分けられる。１層は、ロームを微量含む暗褐色土。２層は、ロームを少量含む褐色土。３層は、ロームを含む褐色土。４層は、ロームを多量に含む褐色土。５層は、褐色土を含むロームである。

本址から１～３ｍ西に検出された５本のピットのうち４本から、灰色を呈する粘土が出土している（図版９－ｅ，ｆ）。また７ｍ西に離れた一本のピットからも粘土と繊維を含む土器の小片が出土している。

土器（図45－１～３，46－１～３，47－１～18，48－１～24）は、45－１，３，46－１～３，47－１，８を除き繊維は含まない。石器はスクレイパー29点（48－25～32，49－１～16，50－７～11）、打製石斧３点（49－17～19）、磨石３点（49－20～22）、石匙６点（50－１～６）、石鏃６点（50－12～17）、ドリル３点（50－18～20）、使用痕のある剥片69点がある。50－６は、抉りより下が全面磨かれていた。石材は、48－25，29，49－４，８，11，12，50－２，３がチャート、48－26，31，49－14～16，18，19が結晶片岩、48－27，49－６，７，50－５～20が黒曜石、48－28，30，32，49－10，17，50－１がホルンフェルス、49－１，５，13が砂岩、49－２，３，９，50－４が硅質頁岩、49－20～22が安山岩である。そのほか滑石製装飾品（50－21）、水晶片５点（１点は６角柱状）と黒曜石の細片が1,080ｇ出土している。

21号住居址（図22，51・図版８－ｇ）

調査区東端、Ｅ－９区に位置する。集中して検出された９軒のうちの１軒である。西コーナーが削平されているが、隅丸方形を呈し、4.2×4mを測る。覆土は、４層に分けられる。１層は、ロームと炭化材を微量含む暗褐色土。２層は、少量のロームと微量の炭化材を含む暗褐色土。３層は、ロームと微量の炭化材を含む暗褐色土。４層は、ロームを多量に含む褐色土である。地床炉は検出されなかった。

土器（図51－１～７）は、５～７を除き繊維を含んでいる。石器は、スクレイパー２点（51－８，14）、石鏃１点（15）、打製石斧２点（９，10）、磨石３点（11～13）、使用痕のある剥片13点がある。石材は、８，14が黒曜石、９がホルンフェルス、10が結晶片岩、11～13が安山岩、15がチャートである。そのほか水晶片１点が出土している。

22号住居址（図23，52・図版８－ｈ）

調査区東端、Ｄ－９区に位置する。集中して検出された９軒のうちの１軒である。不整円形を呈し、6.2×5.7mを測る。202，203号土坑に切られる。掘り込みのない地床炉をもつ。覆土は、５層に分けられる。１層は、ロームを含む黒褐色土。２層は、ロームと炭化材を微量含む暗褐色土。３層は、少量のロームと微量の炭化材を含む暗褐色土。４層は、ロームを含む暗褐色土。５層は、褐色土を含むロームである。

土器（図52－１～14）は、９を除き繊維を含まない。４は、撚糸の地文に平行沈線を施されている。明褐色を呈し、焼成が大変良好である。２号住居址出土の図31－３は、地文が不明瞭だが、４と非常に似ている。石器は、スクレイパー６点（52－20～25）、石匙２点（18，19）、石鏃１点（26）、ドリル２点（27，28）、磨石２点（15，16）、石皿１点（17）、使用痕のある剥片９点がある。石材は、15，17が安山岩、16が花崗岩、18が硅質頁岩、19，20，23～27が黒曜石、21が泥岩、22がチャート、28がホルンフェルスである。その他、水晶片１点がある。

23号住居址（図24，53，54－１～３・図版９－ａ，14－４，５，19－１）

調査区東端、Ｄ－９区に位置する。集中して検出された９軒のうちの１軒である。円形を呈し、直径５ｍを測る。198，204，208号土坑に切られる。土坑に切られた部分を除き、周溝が在る。掘り込みのない地床炉をもつ。覆土は、３層に分けられる。１層は、ロームを少量含む暗褐色土。２層は、ロームを含む暗褐色土。３層は、褐色土を含むロームである。

土器（図53－１～12）は、５，９，10を除き繊維を含む。石器は、スクレイパー２点（54－１，２）、打製石斧２点（53－13，14）、磨石２点（53－15，16）、使用痕のある剥片17点と水晶片２点がある。石材は、53－13が結晶片岩、14が砂岩、15，16が安山岩、54－１，２が黒曜石である。そのほか、208号土坑から南に２本目の側柱穴から、黒色を呈する硬玉製品１点（図54－３・図版19－１）が出土している。

24号住居址（図25，54－４～16，55－１～10・図版９－ｂ，ｃ）

調査区東端、Ｄ，Ｅ－９区に位置する。集中して検出された９軒のうちの１軒である。北側の一部が25号住居址と重複する。プラン検出時には、本址が25号住居址を切っているように見られたが、覆土に違いもなく重複部分の撹乱（４層）もあり新旧関係は不明である。205，222号土坑に切られている。不整円形を呈し、5.4×（5）ｍを測る。掘り込みのない地床炉をもつ。炉の南に接して細粒花崗岩の丸石（図54－16・図版９－ｃ）が置かれていた。覆土は、４層に分けられる。１層は、ロームと炭化材を少量含む暗褐色土。２層は、ロームを多量含む暗褐色土。３層は、暗褐色土と黒褐色土を斑状に含むローム。４層は、しまりがなくロームを含む１層より暗い暗褐色土（撹乱）。

土器（図54－４～９）は、８，９を除き繊維を含まない。石器は、スクレイパー５点（55－３～７）、石匙２点（１，２）、石鏃２点（８，９）、ドリル１点（10）、磨石１点（54－15）、叩石５点（10～14）、使用痕のある剥片22点がある。石材は、54－10～14が砂岩、15が安山岩、55－１，２，４～６、８～10が黒曜石、３がチャート、７が硅質頁岩である。

25号住居址（図25，55－11～17，56－１～６・図版９－ｄ，19－２）

調査区東端、Ｄ－９区に位置する。集中して検出された９軒のうちの１軒である。24号住居址と重複する。24号住居址より本址の方が掘り込みは深いが、新旧関係は不明である。楕円形を呈し、4.4×3.7ｍを測る。掘り込みのない地床炉をもつ。

土器（図55－11～15）は、11，12を除き繊維を含む。石器は、打製石斧１点（55－16）、表裏に大きな凹みをもつもの１点（17）、磨石２点（56－１，２）、スクレイパー１点（３）、石鏃１点（４）、ドリル１点（５）、使用痕のある剥片８点がある。石材は、55－16が砂岩、55－17，56－１，２が安山岩、３がホルンフェルス、４，５が黒曜石である。ほかに、水晶片１点と、オリーブ色を呈する玉製抉状耳飾り（図56－６・図版19－２）が出土している。

以上、縄文時代前期前半に属する住居址

１号住居址（図26・図版９－ｈ）

調査区西端、Ｆ－２区に位置する。25，45号土坑に切られている。台形を呈し、4×3.6mを測る。覆土は、黒褐色土とロームを斑状に含む暗褐色土である。カマドは東南隅にあり、石と粘土を使用して構築されている。カマドの西に接して炭化材を含む焼土が詰まった灰穴がある。遺物は、灰穴から出土した甕の小片１点だけである。本址は、カマドの位置などから平安時代末期に属すると思われる。

３号住居址（図27，56－７～12・図版10－ａ，ｂ）

調査区西側、Ｅ－３区に位置する。隅丸長方形を呈し、6.4×5.2mを測る。210号土坑に切られている。カマドは東南隅にあり、石と粘土を使用して構築されている。カマドの西に接して灰穴がある。カマド部分と南西コーナーを除き周溝があるが、南西部分は床面を掘りすぎたため周溝が巡っていた可能性がある。

本址の床面は、南西コーナーを除き固くしまっていて、Ｐ－１～４のプランとその中心にある焼土も踏み固められていた。Ｐ－１～４を結ぶと台形を呈することと地床炉から本址は、縄文時代前期前半の住居址と全く重なって構築されていると考えられる。

遺物は、あまり出土していない。図56－７はチャート製スクレイパー、８は鉄製品、９，10は安山岩製磨石、11は灰釉陶器、12は土師質土器である。

本址は、カマドの位置などから平安時代末期に属すると思われる。

14号住居址（図28，56－13～17・図版９－ｃ～ｅ，19－４～６）

調査区東側、Ｃ－７区に位置する。北側の半分以上が、水路と水田造成のため破壊されている。遺存部分で、3.1×（1.4）ｍを測る。東西に走る水路は２本あり、ややずれて重複していた。先行する水路からは、近世のものと思われる陶器が出土している。カマドは東南隅にあり、石と粘土を使用して構築されている。本址の覆土には、炭化材と多量の焼土が含まれていた。

出土した遺物（図56－13～17）は、すべて土師質土器である。13は、カマドの煙道の蓋として利用されていた（図版９－ｄ）。14と15は、合子で出土した（図版９－ｅ）。

本址は、カマドの位置などから平安時代末期に属すると思われる。

２節　掘立柱建物址

１号掘立柱建物址（図29・図版10－ｇ）

調査区中央北寄り、Ｄ－６区に位置する。南北に長い建物で、梁行２間、桁行３間である。柱穴の中心を基準にすると、南北7.6m、東西3.9mの長方形を呈する。最も西の列の南から２本目の柱穴から、鉄平石を５角形に打ち欠いた礎石が検出された。

２号掘立柱建物址（図30・図版10－ｈ）

調査区北側、Ｂ－６，７区に位置する。南北に長い建物で、梁行１間、桁行２間である。柱

穴の中心を基準にすると、南北4.8m、東西3mの長方形を呈する。本址の東側に、11.3mの間に20～40cm間隔で34本（径10cm，深さ15cm程）のピット列があり、またその東に接して畝跡があった。ピット列は、本址か畝跡に伴う柵の可能性も考えられる。

3節　溝状遺構

１条検出された。調査区の西端から北端までほぼ直線で、80mにわたり確認された。３か所で断面を観察したほかは、検出プランの記録だけの調査しか出来なかった（図４）。幅2m、深さ80cm程で断面はＶ字型を呈し、覆土は底部に白色砂が2～3cm堆積しているほかは黒色土１層だけである。重複関係は、長方形の土坑２基（215，217号土坑）に切られているだけである。

4節　土坑（土坑一覧表Ｐ12～17参照）

230基検出された（図４）。その内訳は、覆土とそのしまりから縄文時代に属すると思われる８基（177～180，205，207，208，221号土坑）を除き、円形土坑191基、長方形土坑24基、楕円形土坑６基、方形土坑１基である。

前年度調査された隣接する新居道上遺跡と上北田３遺跡からは合計296基の土坑が調査され、円形土坑203基、長方形土坑68基が報告されている。この一帯だけで486基ある「円形土坑」と「長方形土坑」は、ほとんどが明瞭な工具痕（幅５～６cm）が残り、埋め戻されてはいるが遺物は含まれていない。現況の水田が近世に開かれたと考えられることと、平安時代末期の住居址が破壊されていることから、この土坑群は中世に掘られたものと考えられる。

参考文献

折井　敦「上北田３遺跡・新居道上遺跡」白州町教育委員会　1991
折井　敦「板橋遺跡」白州町教育委員会　1989
平野　修「根古屋遺跡」白州町教育委員会　1985
樋口昇一　他「長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書－諏訪市－その４」
長野県教育委員会　1976
笹沢　浩　他「長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書－原　村－その５」
長野県教育委員会　1982
小池　孝　他「中越遺跡」宮田村教育委員会1990
松永満夫　他「お供平遺跡Ⅱ」信州新町教育委員会　1989
神村　透「田中洞（縄文前期の遺構と土器）」王滝村教育委員会　1988
堤　隆・贄田　明「塩野西遺跡群　城之腰遺跡」御代田町教育委員会　1992

土　坑　一　覧　表

番　号	平面形	規　模　(cm)			覆　　土	備　　考
		検出面	深さ	底　面		
1	円　形	103×102	10	90×92	黒褐色土　ロームを若干含む	
2	円　形	80×82	13	71×75	暗褐色土　ロームを含む	
3	長方形	142×93	59	122×85	黒褐色土　ロームを若干含む	
4	円　形	128×125	60	115×111	黒褐色土　ロームを若干含む	
5	長方形	151×93	115	140×88	暗褐色土　ロームを含む	
6	長方形	166×106	63	150×90	黒褐色土　ロームを若干含む	
7	長方形	174×101	93	162×93	暗褐色土　ロームを含む	
8	長方形	146×90	63	141×73	暗褐色土　ロームを含む	
9	長方形	200×105	116	193×94	暗褐色土　ロームを含む	
10	円　形	154×145	36	135×112	暗褐色土　ロームを含む	11.12土と重複
11	長方形	130×85	42	125×77	暗褐色土　ロームを含む	10土と重複
12	長方形	133×85	86	118×78	暗褐色土　ロームを含む	10土と重複
13-1	長方形	(170)×(140)	84	163×133	黒褐色土　ロームを若干含む	
13-2	長方形	165×(30)	50	160×(25)	黒褐色土　ロームを若干含む	
14	長方形	222×81	111	212×68	暗褐色土　ロームを含む	
15	楕円形	107×73	9	98×55	黒褐色土　ロームを若干含む	5土は重複
16	円　形	121×119	56	109×104	黒褐色土　ロームを含む	
17	円　形	140×128	70	120×105	上暗褐色土　ロームを若干含む 下黒褐色土　ロームを含む	
18	円　形	128×128	77	107×107	黒褐色土　ロームを含む	
19	円　形	100×97	48	86×80	黒褐色土　ロームを含む	
20	円　形	100×98	48	86×85	黒褐色土　ロームを含む	
21	長方形	107×75	77	100×59	黒褐色土　ロームを含む	
22	円　形	107×107	79	91×93	黒褐色土　ロームを含む	
23	円　形	150×142	88	111×101	黒褐色土　ロームを若干含む	
24	円　形	111×101	65	96×87	黒褐色土　ロームを含む	
25-1	円　形	116×96	50	111×80	黒褐色土　ロームを含む	
25-2	円　形	110×105	21	104×98	黒褐色土　ロームを若干含む	
26	円　形	100×110	85	85×90	黒褐色土　ロームを若干含む	
27	円　形	120×116	75	107×106	黒褐色土　ロームを含む	
28	円　形	123×119	64	108×106	黒褐色土　ロームを含む	
29	円　形	110×106	72	94×90	黒褐色土　ロームを含む	
30	円　形	87×78	16	77×62	暗褐色土　ロームを含む	
31	円　形	115×107	22	102×92	暗褐色土　ロームを含む	
32	円　形	125×118	93	120×109	黒褐色土　ロームを若干含む	
33	円　形	120×115	92	111×98	暗褐色土　ロームを含む	
34	円　形	114×106	72	111×103	黒褐色土　ロームを若干含む	
35	楕円形	145×124	70	132×113	黒褐色土　ロームを若干含む	
36	円　形	122×119	95	111×108	暗褐色土　ロームを若干含む	

番　号	平面形	規　　模　(cm)			覆　　土	備　　考
		検出面	深さ	底　面		
37	円　形	105×99	51	92×90	黒褐色土　ロームを含む	
38	円　形	112×106	87	106×95	黒褐色土　ロームを含む	
39	円　形	92×80	19	72×70	黒褐色土　ロームを若干含む	
40	円　形	111×105	90	111×122	黒褐色土　ロームを若干含む	
41	円　形	100×95	80	60×61	暗褐色土　ロームを多く含む	
42	円　形	108×107	57	101×87	暗褐色土　ロームを含む	
43-1	円　形	(125)×118	92	(131)×132	黒褐色土　ロームを多く含む	
43-2	円　形	(88)×81	51	(83)×74	黒褐色土　ロームを若干含む	
44	円　形	144×135	99	138×115	黒褐色土　ロームを若干含む	
45	円　形	110×108	61	100×99	黒褐色土　ロームを多く含む	
46	円　形	92×90	59	84×80	暗褐色土　ロームを若干含む	
47	円　形	(95)×78	50	(73)×70	暗褐色土　ロームを多く含む	
48	円　形	(120)×117	40	(110)×100	暗褐色土　ロームを若干含む	
49	円　形	108×105	58	93×62	上暗褐色土　ロームを多く含む 下黒褐色土　ロームを若干含む	
50	円　形	106×96	65	95×87	暗褐色土　ロームを多く含む	
51	円　形	135×109	69	126×98	暗褐色土　ロームを多く含む	
52	円　形	102×100	40	112×108	暗褐色土　ロームを含む	
53	円　形	127×115	71	124×115	暗褐色土　ロームを含む	
54	円　形	115×113	79	120×130	暗褐色土　ロームを含む	
55	円　形	107×101	72	121×120	暗褐色土　ロームを多く含む	
56	円　形	108×105	66	97×95	暗褐色土　ロームを多く含む	
57-1	円　形	(106)×98	18	(95)×88	黒褐色土　ロームを含む	
57-2	円　形	(115)×111	59	(110)×88	黒褐色土　ロームを含む	
58-1	円　形	(86)×72	50	(90)×91	黒褐色土　ロームを多く含む	
58-2	円　形	(121)×113	53	(110)×108	黒褐色土　ロームを含む	58-1土を切る
58-3	円　形	(123)×126	58	(130)×142	黒褐色土　ロームを含む	58-2土を切る
59	円　形	121×116	74	125×121	黒褐色土　ロームを若干含む	
60	円　形	120×119	77	125×127	暗褐色土　ロームを含む	
61	円　形	130×118	74	117×105	暗褐色土　ロームを含む	
62	円　形	138×132	76	135×125	黒褐色土　ロームを若干含む	
63	円　形	77×73	14	70×62	黒褐色土　ロームを含む	
64-1	円　形	116×115	94	110×100	黒褐色土　ロームを多く含む	
64-2	長方形	(207)×115	105	196×122	黒褐色土　ロームを多く含む	
65	円　形	117×113	105	106×111	黒褐色土　ロームを多く含む	
66	円　形	(121)×113	103	(115)×102	暗褐色土　ロームを含む	
67	円　形	(93)×90	40	(85)×82	黒褐色土　ロームを若干含む	66土に切られる
68	円　形	81×78	26	72×67	暗褐色土　ロームを含む	
69	円　形	130×127	81	117×125	暗褐色土　ロームを含む	
70	円　形	114×112	53	101×100	黒褐色土　ロームを含む	焼土を含む
71	円　形	125×115	98	101×102	暗褐色土　ロームを多く含む	

番　号	平面形	規　　模　(cm)			覆　　土	備　　考
		検出面	深さ	底　面		
72	円　形	135×128	79	60×64	黒褐色土　ロームを若干含む	
73	楕円形	106×91	19	61×40	暗褐色土　ロームを多く含む	
74	円　形	105×97	30	75×66	暗褐色土　ロームを多く含む	
75	円　形	113×105	68	90×98	暗褐色土　ロームを若干含む	
76	円　形	103×97	49	97×90	暗褐色土　ロームを若干含む	
77	円　形	113×101	59	98×90	暗褐色土　ロームを含む	
78	円　形	120×116	55	120×121	暗褐色土　ロームを含む	
79	円　形	100×90	45	83×70	暗褐色土　ロームを含む	
80	円　形	109×100	59	118×96	暗褐色土　ロームを含む	
81	円　形	99×97	50	93×95	暗褐色土　ロームを含む	
82	円　形	103×87	22	86×63	暗褐色土　ロームを含む	
83	円　形	112×104	25	84×60	暗褐色土　ロームを含む	
84	円　形	93×86	35	71×60	暗褐色土　ロームを含む	
85	円　形	83×66	31	53×45	黒褐色土　ロームを含む	
86	円　形	65×60	25	51×37	黒褐色土　ロームを含む	
87	円　形	131×128	56	115×113	暗褐色土　ロームを若干含む	
88	円　形	112×110	66	103×99	暗褐色土　ロームを多く含む	鉄製品(ローソク立てか?)
89	長方形	222×120	74	234×130	暗褐色土　ロームを多く含む	
90	長方形	241×120	72	230×116	暗褐色土　ロームを多く含む	
91	円　形	100×94	14	90×85	暗褐色土　ロームを含む	
92	円　形	142×142	54	160×152	暗褐色土　ロームを含む	
93-1	長方形	240×(125)	81	243×(120)	暗褐色土　ロームを若干含む	
93-2	円　形	(110)×(110)	113	(107)×(107)	暗褐色土　ロームを若干含む	
94	円　形	112×105	76	102×94	暗褐色土　ロームを若干含む	小型磨製石斧
95	長方形	235×120	68	227×113	暗褐色土　ロームを含む	
96	円　形	108×97	84	106×99	暗褐色土　ロームを含む	
97	円　形	132×111	45	112×103	黒褐色土　ロームを含む	
98	円　形	68×61	12	55×43	黒褐色土　ロームを若干含む	
99	円　形	60×47	18	51×34	暗褐色土　ロームを含む	
100	円　形	117×114	56	108×91	暗褐色土　ロームを含む	
101	円　形	120×110	18	108×100	黒褐色土　ロームを含む	
102	円　形	108×108	43	107×102	黒褐色土　ロームを含む	
103	長方形	236×120	66	228×111	黒褐色土　ロームを若干含む	
104	円　形	115×110	46	114×109	暗褐色土　ロームを含む	
105	円　形	137×120	64	144×122	黒褐色土　ロームを多く含む	
106	円　形	86×84	28	76×70	黒褐色土　ロームを含む	
107	円　形	125×121	78	116×115	黒褐色土　ロームを含む	
108	円　形	130×95	18	117×93	黒褐色土　ロームを含む	
109	円　形	83×75	25	71×65	黒褐色土　ロームを含む	
110	円　形	116×115	63	(123)×123	暗褐色土　ロームを含む	

番　号	平面形	規　　模　(cm)			覆　　土	備　　考
		検出面	深さ	底　面		
111	長方形	145×(115)	80	116×(115)	上暗褐色土　ロームを含む 下黒褐色土　ロームを含む	
112	円　形	(105)×104	79	(71)×54	暗褐色土　ロームを含む	
113	円　形	113×(65)	66	115×(65)	黒褐色土　ロームを含む	
114	円　形	147×116	56	128×103	黒褐色土　ロームを含む	
115	円　形	120×120	70	110×110	黒褐色土　ロームを含む	9号住を切る
116	円　形	140×130	60	120×120	暗褐色土　ロームを多く含む	9号住を切る
117	円　形	123×113	74	114×104	暗褐色土　ロームを多く含む	
118	円　形	124×119	46	117×114	黒褐色土　ロームを含む	
119	円　形	120×103	61	123×108	暗褐色土　ロームを含む	
120	楕円形	193×85	22	182×75	黒褐色土　ロームを含む	
121	円　形	80×73	23	73×71	暗褐色土	
122	楕円形	167×112	42	160×111	暗褐色土　ロームを若干含む	
123	円　形	83×75	16	84×75	黒褐色土　ロームを含む	
124	円　形	112×105	80	105×95	暗褐色土　ロームを含む	
125	円　形	117×114	58	103×99	黒褐色土　ロームを若干含む	
126	円　形	109×109	47	97×92	暗褐色土　ロームを含む	
127	円　形	132×126	60	115×103	黒褐色土　ロームを含む	
128	円　形	115×105	40	109×98	暗褐色土　ロームを多く含む	
129	円　形	120×118	70	128×127	暗褐色土　ロームを多く含む	
130	円　形	102×96	29	92×88	黒褐色土　ロームを多く含む	
131	円　形	107×92	8	99×83	黒褐色土　ロームを多く含む	
132	円　形	71×70	6	66×65	黒褐色土　ロームを多く含む	
133	円　形	112×105	39	108×100	黒褐色土　ロームを含む	
134	円　形	107×95	32	103×92	黒褐色土　ロームを多く含む	
135	円　形	120×116	37	130×128	黒褐色土　ロームを多く含む	
136	円　形	122×120	53	123×122	黒褐色土　ロームを多く含む	
137	円　形	(130)×128	50	(120)×120	黒褐色土　ロームを多く含む	
138	円　形	120×(111)	42	114×(108)	暗褐色土　ロームを多く含む	
139	円　形	138×121	44	113×110	黒褐色土　ロームを多く含む	
140	円　形	105×100	8	93×93	黒褐色土　ロームを多く含む	
141	円　形	117×108	40	108×94	黒褐色土　ロームを含む	
142	円　形	123×120	88	128×126	暗褐色土　ロームを多く含む	
143	円　形	91×(80)	68	90×(86)	暗褐色土　ロームを多く含む	
144	円　形	115×(90)	64	121×(96)	暗褐色土　ロームを多く含む	
145	円　形	120×117	49	131×130	暗褐色土　ロームを多く含む	
146	円　形	136×128	56	144×135	黒褐色土　ロームを多く含む	
147	円　形	100×96	52	95×90	黒褐色土　ロームを多く含む	
148	円　形	140×137	79	75×75	黒褐色土　ロームを多く含む	
149	楕円形	130×99	32	110×71	暗褐色土　ロームを含む	
150	円　形	115×115	67	104×104	暗褐色土　ロームを多く含む	

番　号	平面形	規　模（cm）			覆　　土	備　　考
		検出面	深さ	底　面		
151	円　形	131×(90)	61	127×(95)	暗褐色土　ロームを多く含む	
152	円　形	116×105	61	110×101	黒褐色土　ロームを含む	
153	方　形	98×88	12	92×84	黒褐色土　ロームを含む	
154	円　形	117×115	53	108×106	黒褐色土　ロームを含む	
155	円　形	124×117	66	132×124	黒褐色土　ロームを含む	
156	円　形	92×92	7	86×85	暗褐色土　ロームを多く含む	
157	円　形	98×97	32	89×89	黒褐色土　ロームを含む	
158	円　形	97×95	34	98×97	黒褐色土　ロームを多く含む	
159	円　形	118×118	55	107×110	黒褐色土　ロームを含む	
160	円　形	117×115	65	125×129	黒褐色土　ロームを多く含む	
161	円　形	95×92	50	87×82	暗褐色土　ロームを多く含む	
162	円　形	120×114	41	103×100	黒褐色土　ロームを含む	
163	円　形	113×105	60	103×96	黒褐色土　ロームを多く含む	
164	円　形	(85)×85	22	(70)×70	黒褐色土　ロームを多く含む	
165	円　形	(120)×120	54	(130)×137	暗褐色土　ロームを多く含む	164土を切る
166	円　形	90×89	20	80×77	黒褐色土　ロームを若干含む	
167	円　形	124×120	36	117×111	黒褐色土　ロームを含む	
168	円　形	92×90	44	80×80	黒褐色土　ロームを含む	
169	円　形	85×80	30	93×88	黒褐色土　ロームを含む	
170	円　形	129×125	53	100×64	黒褐色土　ロームを多く含む	
171	円　形	97×92	63	87×85	黒褐色土　ロームを含む	
172	円　形	102×100	22	88×84	黒褐色土　ロームを若干含む	
173	円　形	(100)×90	59	(87)×80	黒褐色土　ロームを多く含む	
174	長方形	(142)×100	19	(130)×90	黒褐色土　ロームを含む	
175	円　形	101×100	61	102×93	黒褐色土　ロームを多く含む	
176	円　形	156×150	49	143×138	黒褐色土　ロームを多く含む	
177	円　形	59×58	18	30×36	黒褐色土	
178	円　形	121×120	73	40×34	黒褐色土	
179	円　形	121×115	47	50×50	黒褐色土	
180	楕円形	120×100	—	80×60	暗褐色土　ロームを若干含む	15号住を切る
181	円　形	120×120	—	110×100	黒褐色土　ロームを若干含む	15号住を切る
182	円　形	124×120	59	111×109	黒褐色土　ロームを多く含む	
183	円　形	103×103	56	90×89	黒褐色土　ロームを若干含む	
184	円　形	114×111	98	100×97	暗褐色土　ロームを含む	
185	円　形	129×130	62	139×140	黒褐色土　ロームを多く含む	
186	円　形	124×120	63	118×115	暗褐色土　ロームを多く含む	
187	円　形	112×110	103	124×112	黒褐色土　ロームを多く含む	
188	円　形	123×120	73	124×123	黒褐色土　ロームを多く含む	
189	円　形	140×120	61	150×130	黒褐色土　ロームを多く含む	
190	円　形	120×(50)	—	130×(60)	黒褐色土　ロームを含む	

番　号	平面形	規　　模　(cm)			覆　　土	備　　考
		検出面	深さ	底　面		
191	円　形	110×100	—	80×80	黒褐色土　ロームを含む	
192	円　形	129×112	66	90×77	暗褐色土　ロームを若干含む	
193	円　形	113×111	15	103×100	黒褐色土　ロームを多く含む	
194	円　形	102×100	45	90×90	黒褐色土　ロームを多く含む	
195	円　形	79×72	14	71×65	黒褐色土　ロームを若干含む	
196	円　形	97×(55)	62	88×(50)	暗褐色土　ロームを多く含む	
197	円　形	127×124	97	135×137	黒褐色土　ロームを含む	
198	円　形	130×125	—	120×110	暗褐色土　ロームを多く含む	23号住を切る
199	円　形	144×110	70	133×100	暗褐色土　ロームを多く含む	
200	円　形	125×120	58	116×109	黒褐色土　ロームを含む	
201	円　形	140×140	100	120×120	黒褐色土　ロームを含む	20号住を切る
202	円　形	130×120	110	110×110	黒褐色土　ロームを含む	22号住を切る
203	円　形	120×110	90	100×100	黒褐色土　ロームを含む	22号住を切る
204	円　形	130×120	—	120×110	黒褐色土　ロームを含む	23号住を切る
205	円　形	96×(70)	41	109×(73)	黒褐色土　ロームを若干含む	
206	円　形	78×60	19	55×38	黒褐色土　ロームを多く含む	
207	円　形	141×100	32	121×60	暗褐色土　ロームを含む	
208	円　形	108×105	57	80×78	暗褐色土　ロームを含む	23号住を切る
209	円　形	98×90	43	70×63	暗褐色土　ロームを含む	
210	円　形	132×130	30	124×120	黒褐色土　ロームを含む	3号住を切る
211	円　形	140×130	36	128×120	黒褐色土　ロームを含む	12号住を切る
212	円　形	140×120	80	120×120	黒褐色土　ロームを含む	12号住を切る
213	円　形	98×90	—	85×80	黒褐色土　ロームを含む	11号住を切る
214	円　形	130×120	50	110×100	黒褐色土　ロームを含む	15号住を切る
215	長方形	240×125	90	242×130	黒褐色土　ロームを多く含む	
216	長方形	238×135	90	240×135	黒褐色土　ロームを多く含む	
217	長方形	238×130	90	240×130	黒褐色土　ロームを多く含む	
218	長方形	240×130	90	242×130	黒褐色土　ロームを多く含む	
219	長方形	210×138	90	220×140	黒褐色土　ロームを多く含む	
220	円　形	110×100	55	65×60	暗褐色土　ロームを多く含む	
221	楕円形	150×70	70	60×50	黒褐色土	9号住を切る
222	円　形	120×(80)	14	100×(70)	暗褐色土	24号住を切る

Ⅳ章　ま　と　め

上北田遺跡の調査によって発見した成果のうち遺構は、縄文時代前期前半の住居址22軒＋２軒、墓坑数基と平安時代最末期の住居址３軒および中世の掘立柱建物址２軒・円形～長方形の土坑222基・柱列痕・畝痕・粘土貯蔵穴５・汐様の溝状遺構１本などであった。

遺物は、縄文時代前期前半の原形に復元できた土器16個と多量の破片・石器類の他炭化材、クリ・ミズナラ・カヤ・クヌギ・バラなどの炭化堅果など膨大な量に上った。これらの資料について若干の考察を加えておきたいと思う。

まず、遺構で注目したいのは住居の配置、即ち、個々の住居よりも集落構成にあると思う。22軒＋２軒、計24軒とは、、独立した22軒と、３号住居址にすっぽり重複した27号住居址と20号住居址の拡張前の26号住居址とを加えたものである。これらの住居址は、位置的に三つの集団に分けることが可能である。第１集団は、２・27・４・５・８の５軒、第２集団は、７・６・９・10・11・15・13に12を加えた８軒、第３集団は、17～26の10軒とかなり離れて孤立している16号住居址である。

次に時間差であるが、第１・２集団では、各々の住居址の間隔と配置がほぼ適正で、土器による時間差も現状ではほとんど感ぜられない。しかし、では、この２集団13軒が同時に存在したかとなると一寸疑問が残る。感じとしては、第２集団の方がやや新しい気がする。第３集団は極めて狭い範囲に10軒が集中していたが、重複していたのは20と26および24と25の２組だけであった。これらを重複と土器による新旧関係を考慮して整理すると、次のような三時期に分割できた。１期＝19・26・21の３軒、２期＝17・22・24の３軒、３期＝18・20・23・25の４軒ということになった。したがって、これらの関係を時間差を含めて整理すると、第１集団がこの地に住みついた開拓者で、暫時下方へ第２集団～第３集団へと移行したと解釈するのが現時点での適当な方法であろう。

続いて遺物に移ろう。遺物のうち土器は、長野県内の中越・阿久遺跡などの資料と大同小異でその組合せはほとんど変わらない。ただ、それぞれの特徴を持つ土器の量の差ぐらいである。石器は、多くの紙面を割いて図示した如く、この時期の特徴を具備した有るべき器種がすべて揃っている上に、土器と同じく混じり気なく純度は100％に近く極めて高い。

また、火災によって消失した17・18号住居址からは、炭化材のほか、多量の堅果類が検出できた。これらは、蒸焼きの状態で床面の焼けた凹みや床面上20cm位までの間でみつかった。これらの他、期待していた穎果類の検出はなかった。

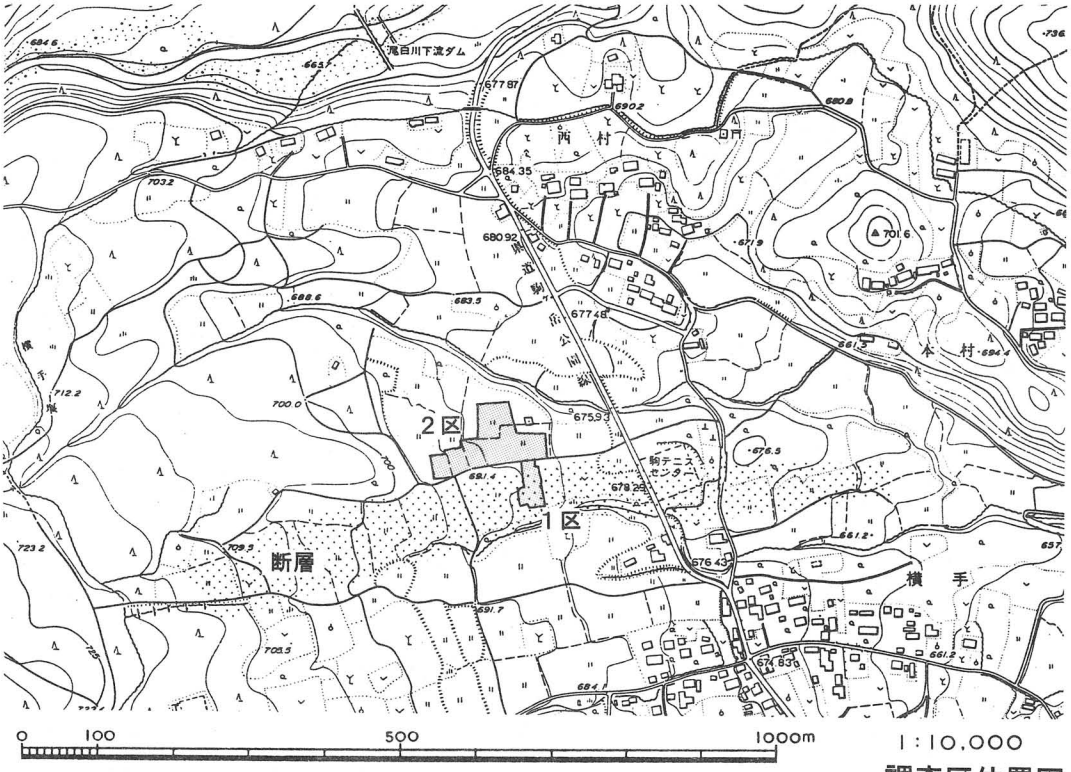
以上のほか、14号住居址の平安時代か鎌倉時代かの帰属の問題、汐様の溝状遺構・円形，長方形土坑の使用目的の解明などなど、上北田遺跡の抱える課題はあまりにも大きすぎて、時間的にも予算面でも本報告書で、その全貌を解明するには荷が重すぎた。今後、時と機会をとらえて順次に解明していかなければならない。

図１

遺跡位置図１／50,000

１、上北田遺跡　２、新居道上遺跡　３、上北田３遺跡　４、根古屋遺跡
５、屋敷平遺跡　６、板橋遺跡　７、坂下遺跡　８、所帯ＩＩ遺跡

図２



調査区位置図

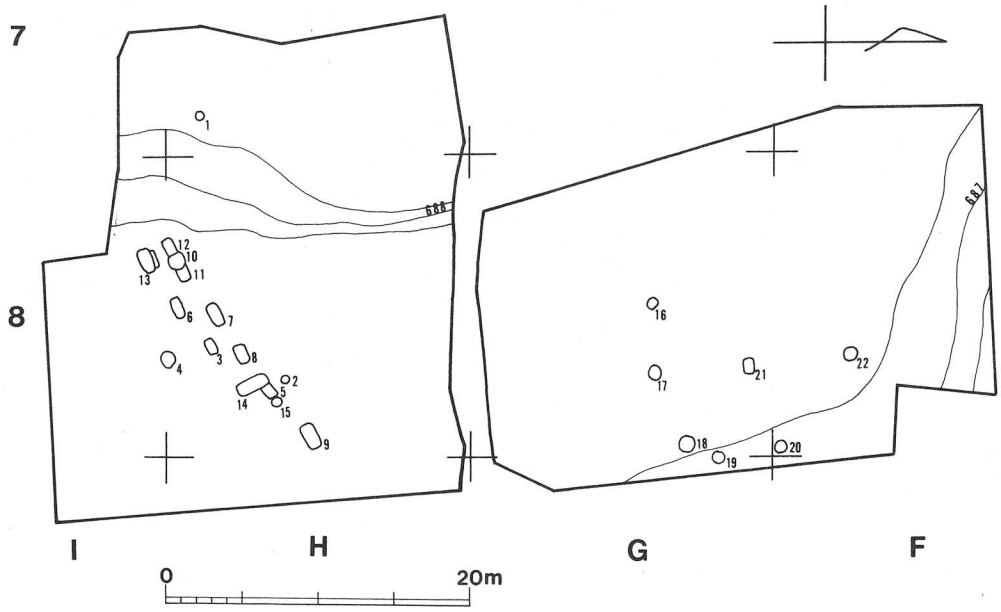


図３　１区全測図　１／５００

図４　２区全測図１／500（※番号のみは土坑）

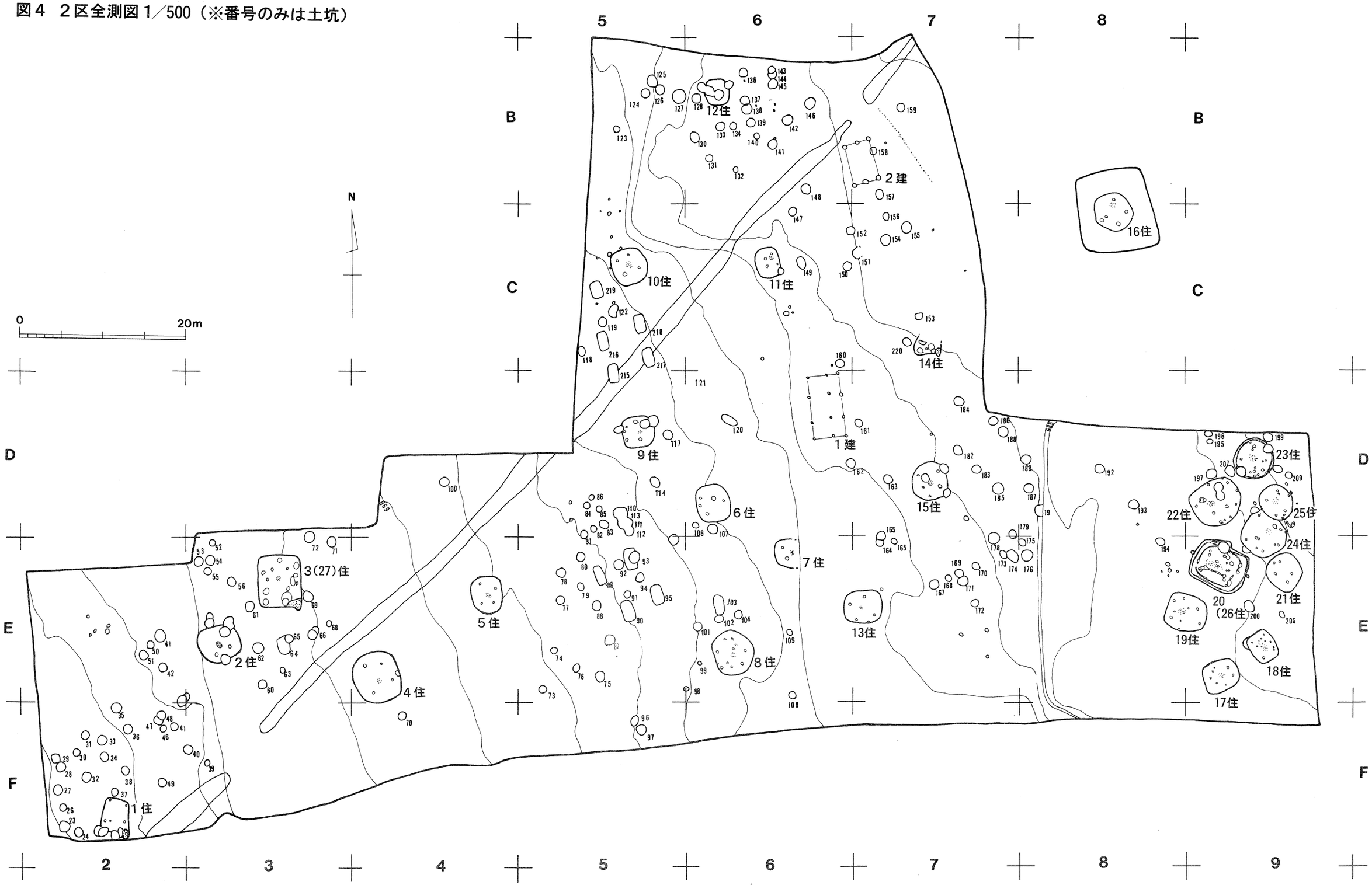
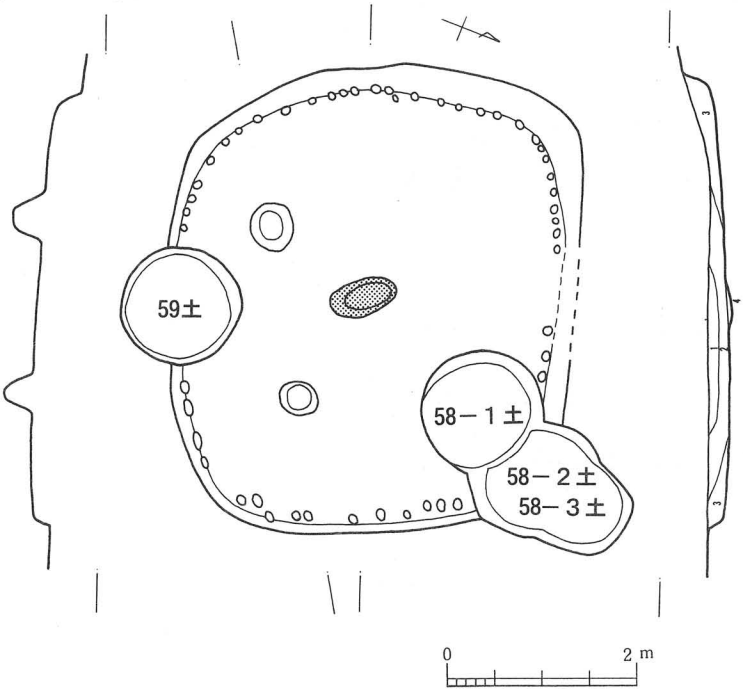


図５　２号住居址（水糸高＝ 691.7）



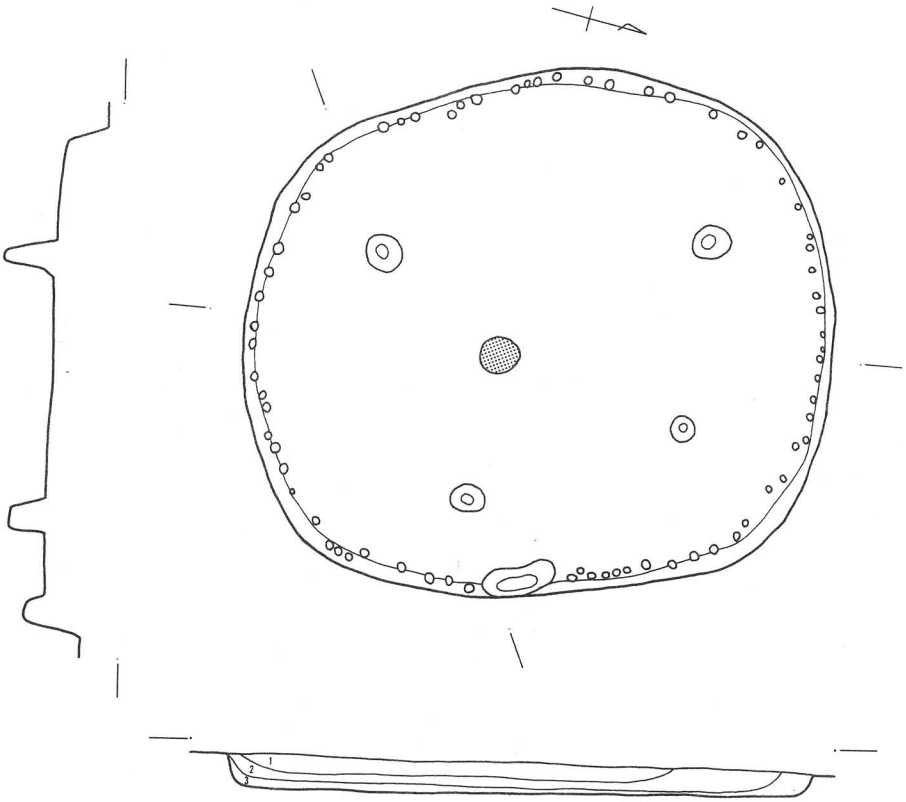
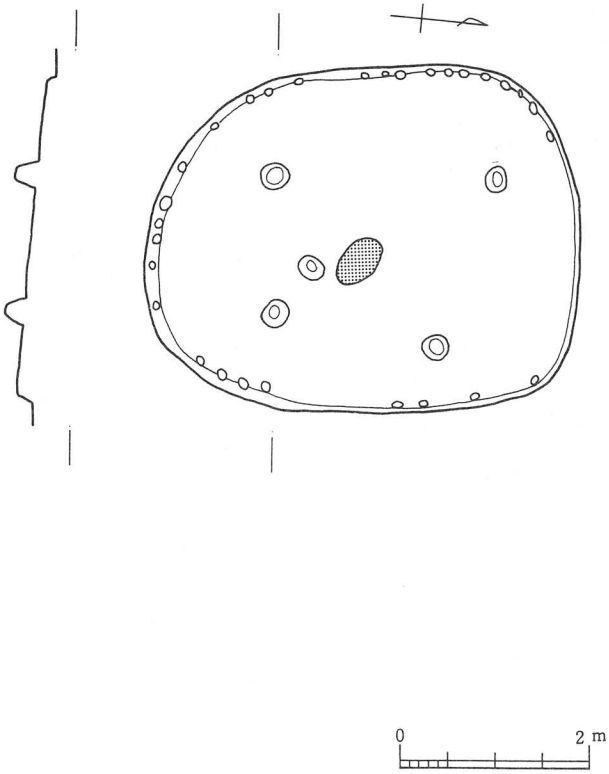


図６　４号住居址（水糸高＝ 690.7）

図７　５号住居址（水糸高＝ 689.7）



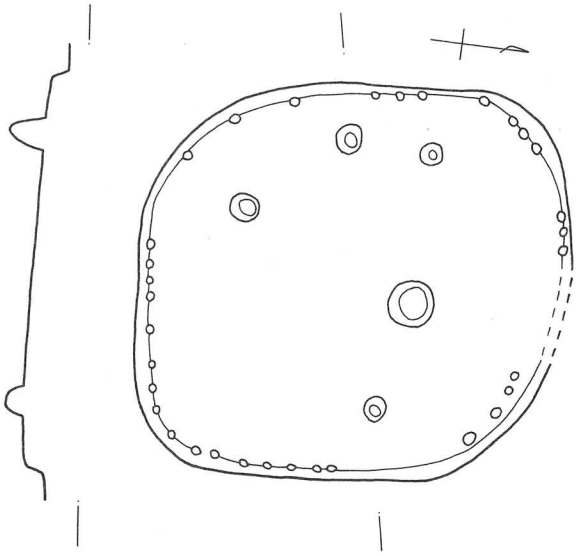
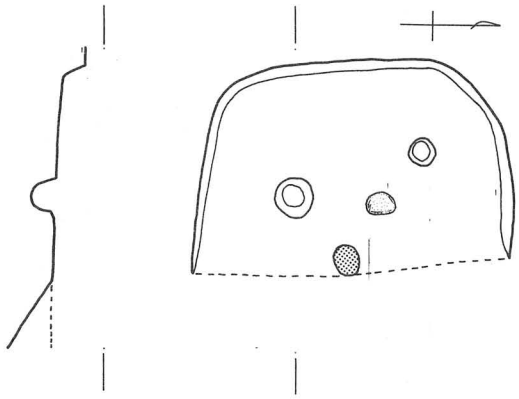


図８　６号住居址（水糸高＝ 690.0）

図９　７号住居址（水糸高＝ 687.8）



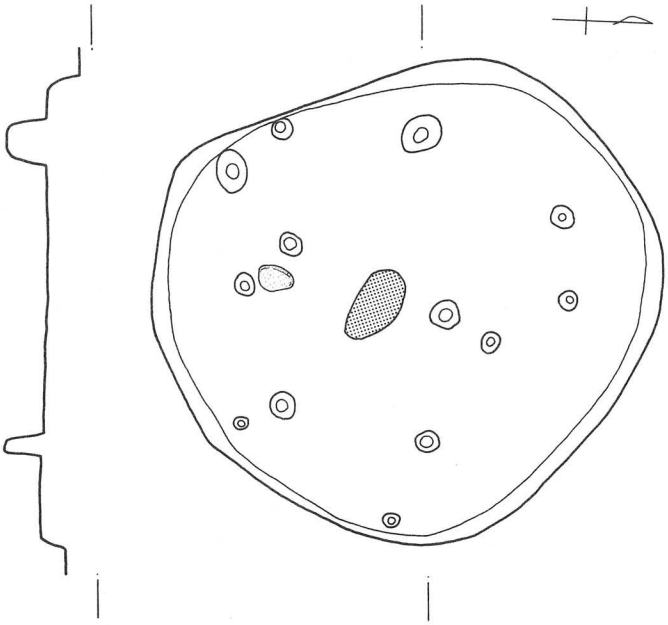
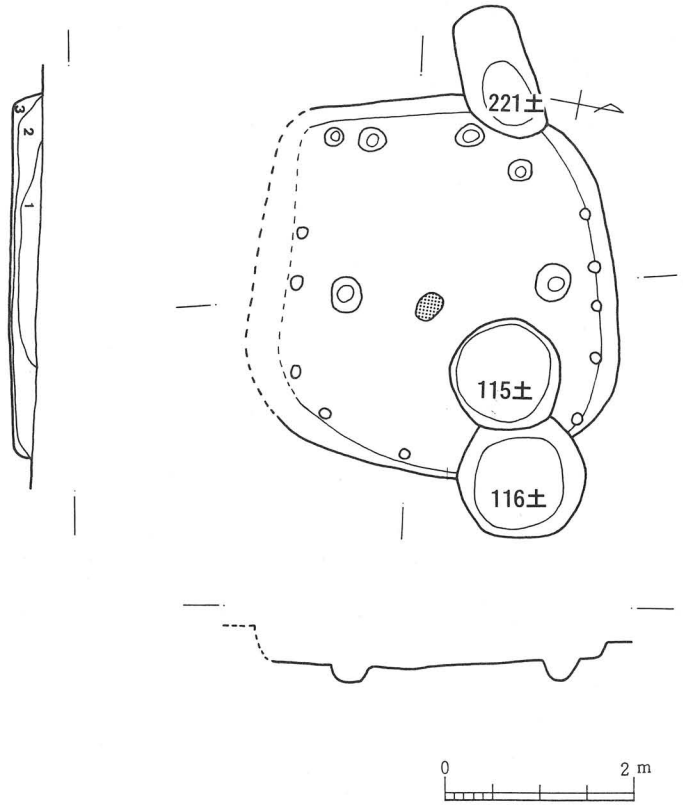


図10　８号住居址（水糸高＝ 688.2）

図11　９号住居址（水糸高＝ 688.6）



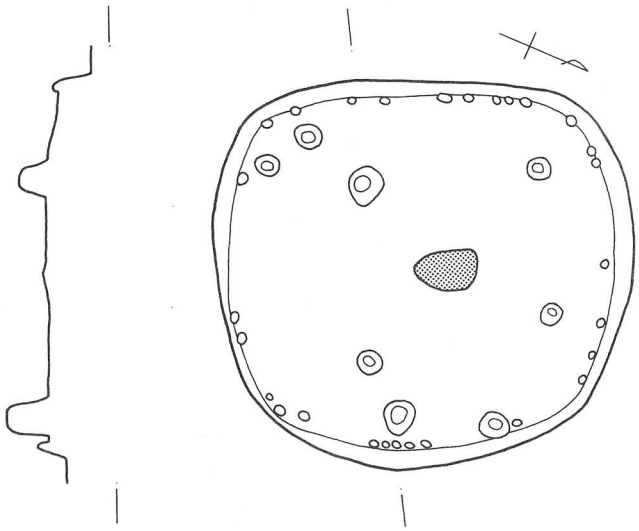
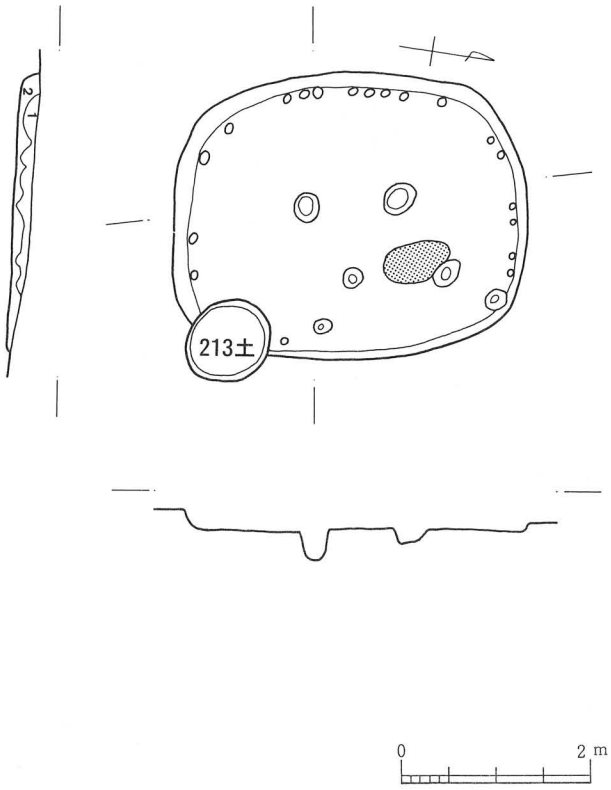


図12　10号住居址（水糸高＝ 688.3）

図13　11号住居址（水糸高＝ 687.2）



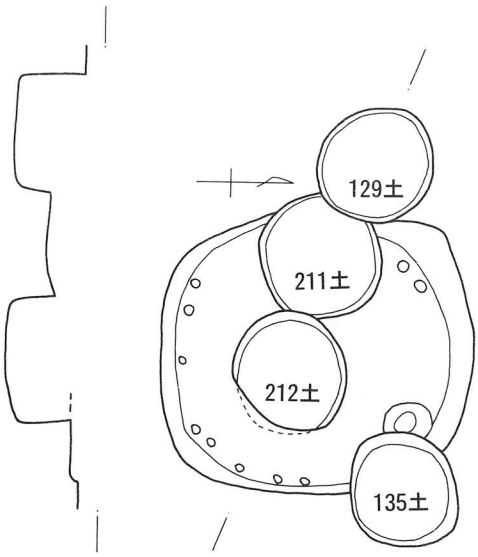


図14　12号住居址（水糸高＝ 686.8）

図15　13号住居址（水糸高＝ 687.1）

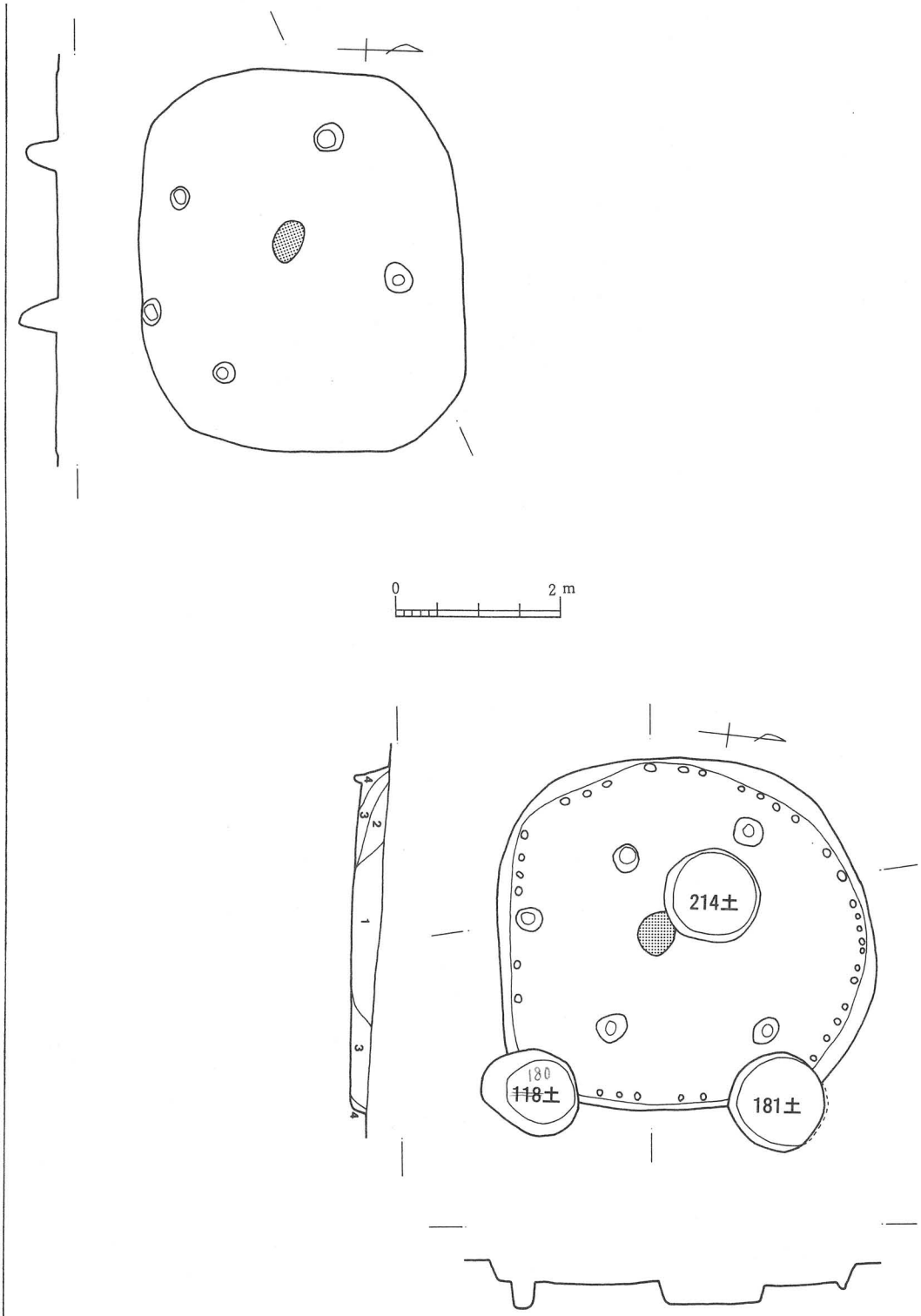
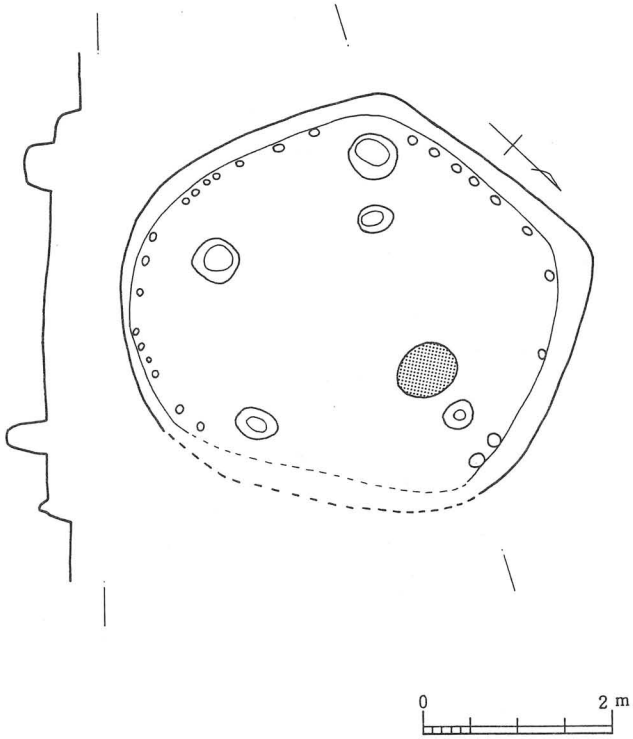


図16　15号住居址（水糸高＝ 686.9）

図17　16号住居址（水糸高＝ 685.3）



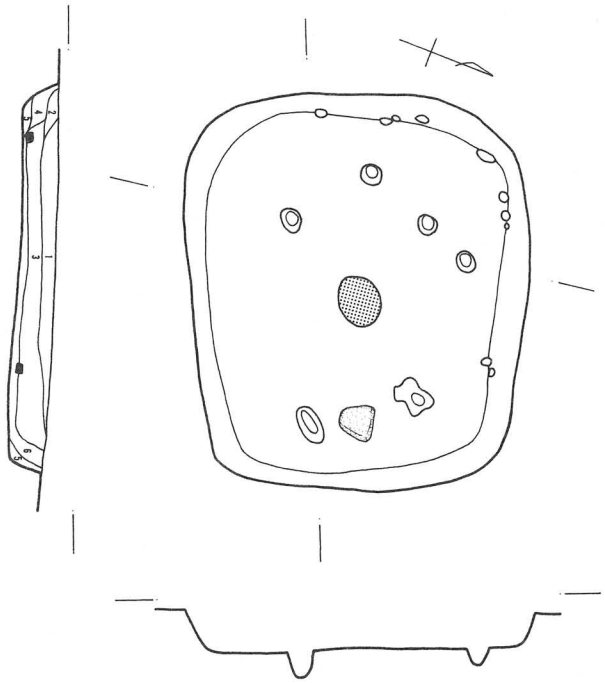
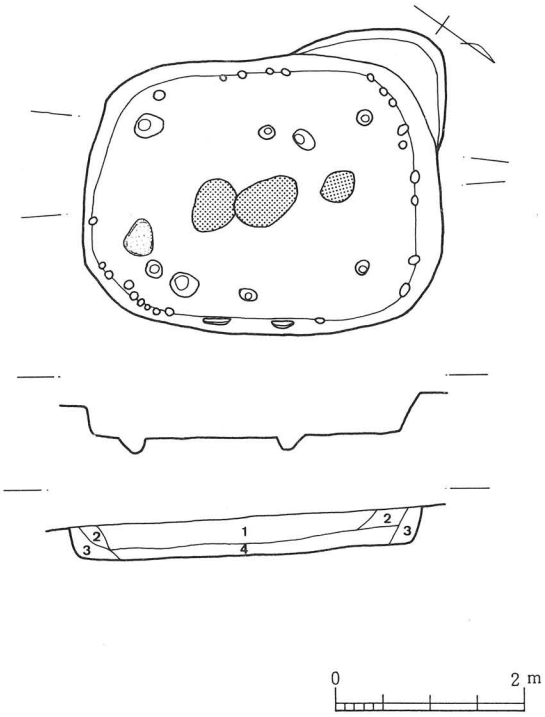


図18　17号住居址（水糸高＝ 684.8）

図19　18号住居址（水糸高＝ 684.5）



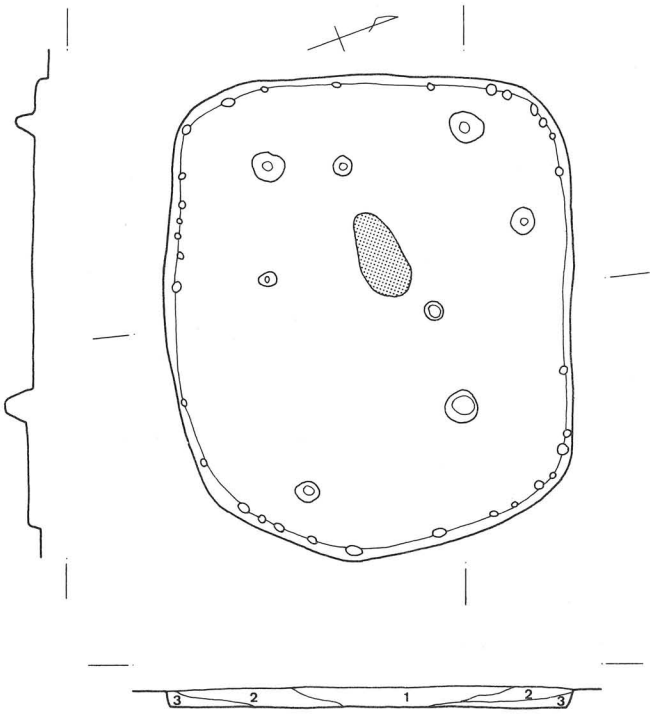
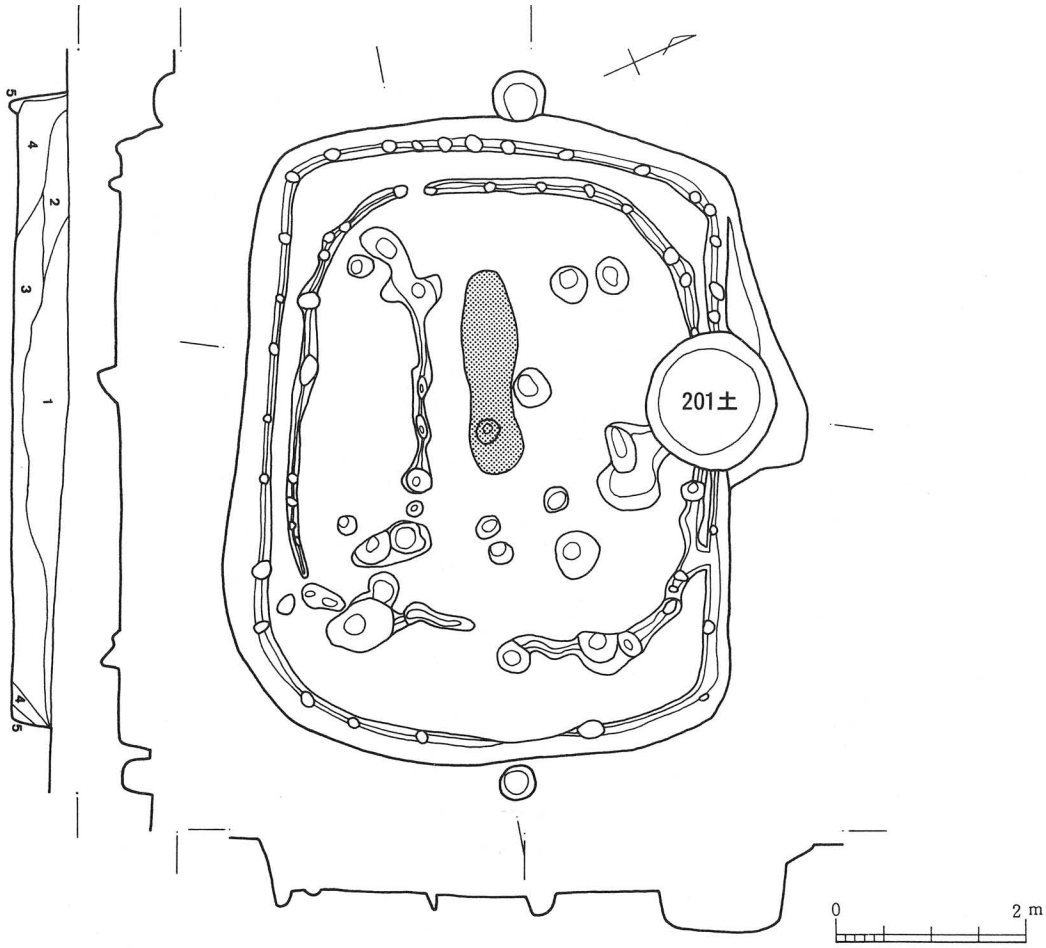


図20　19号住居址（水糸高＝ 685.0）

図21　20号住居址（水糸高＝ 684.8）



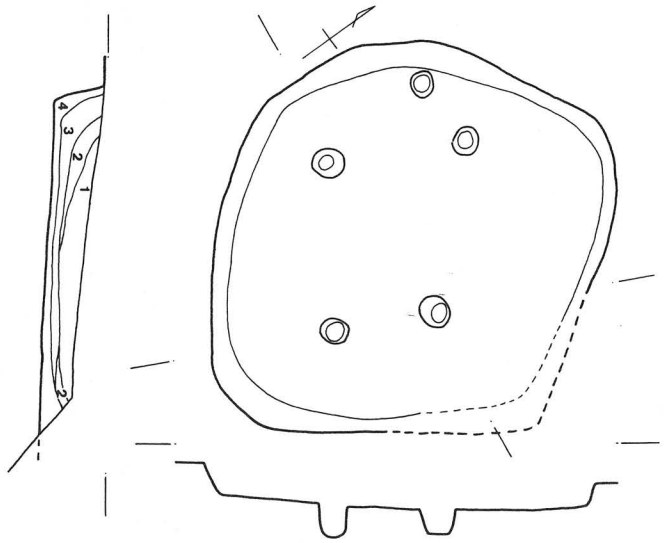
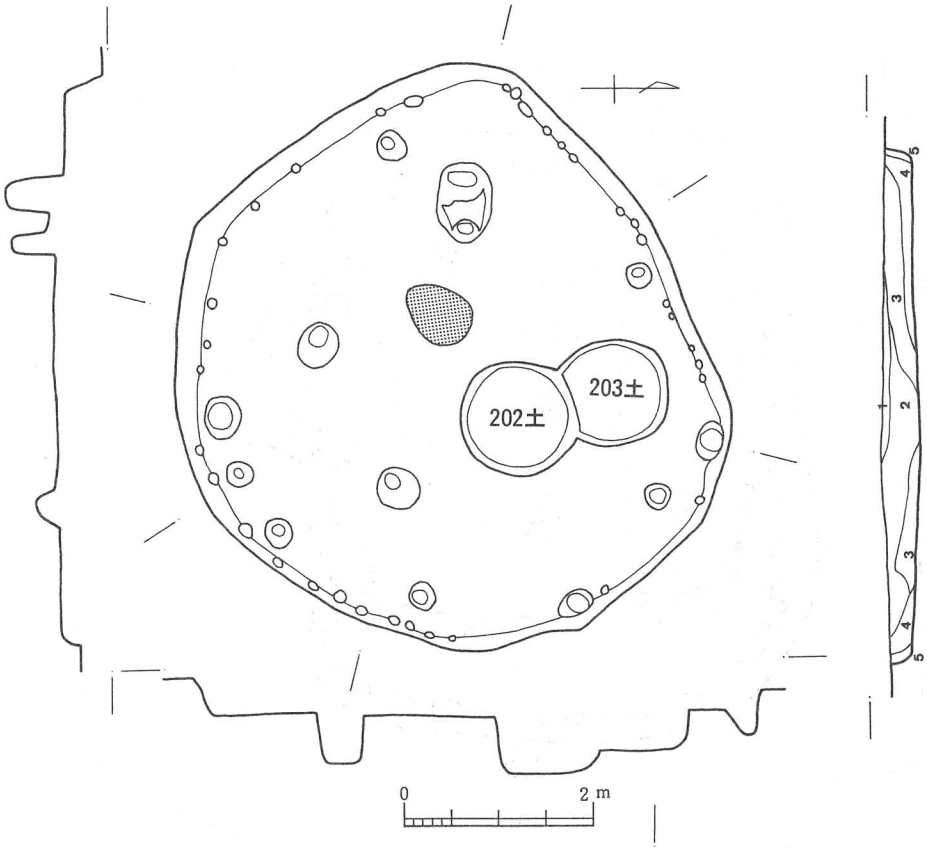


図22　21号住居址（水糸高＝ 684.5）

図23　22号住居址（水糸高＝ 684.8）



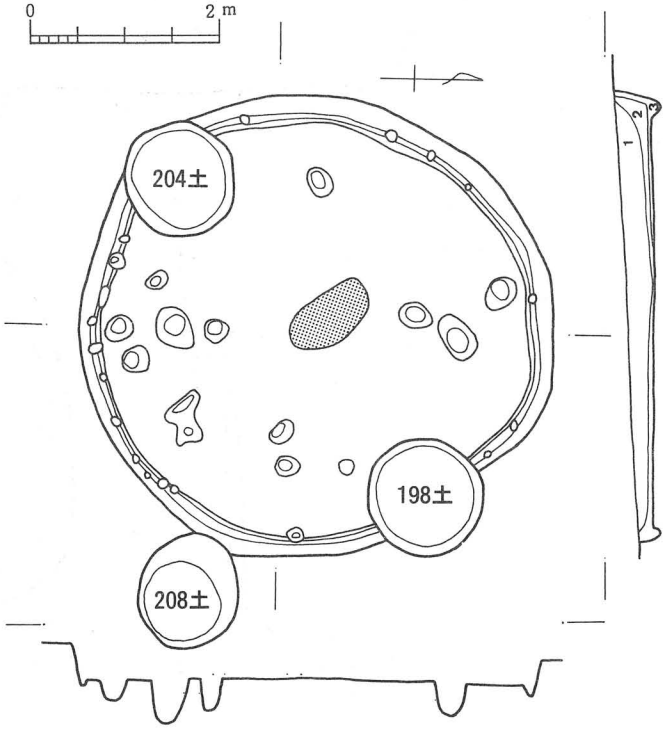


図24　23号住居址（水糸高＝ 684.3）

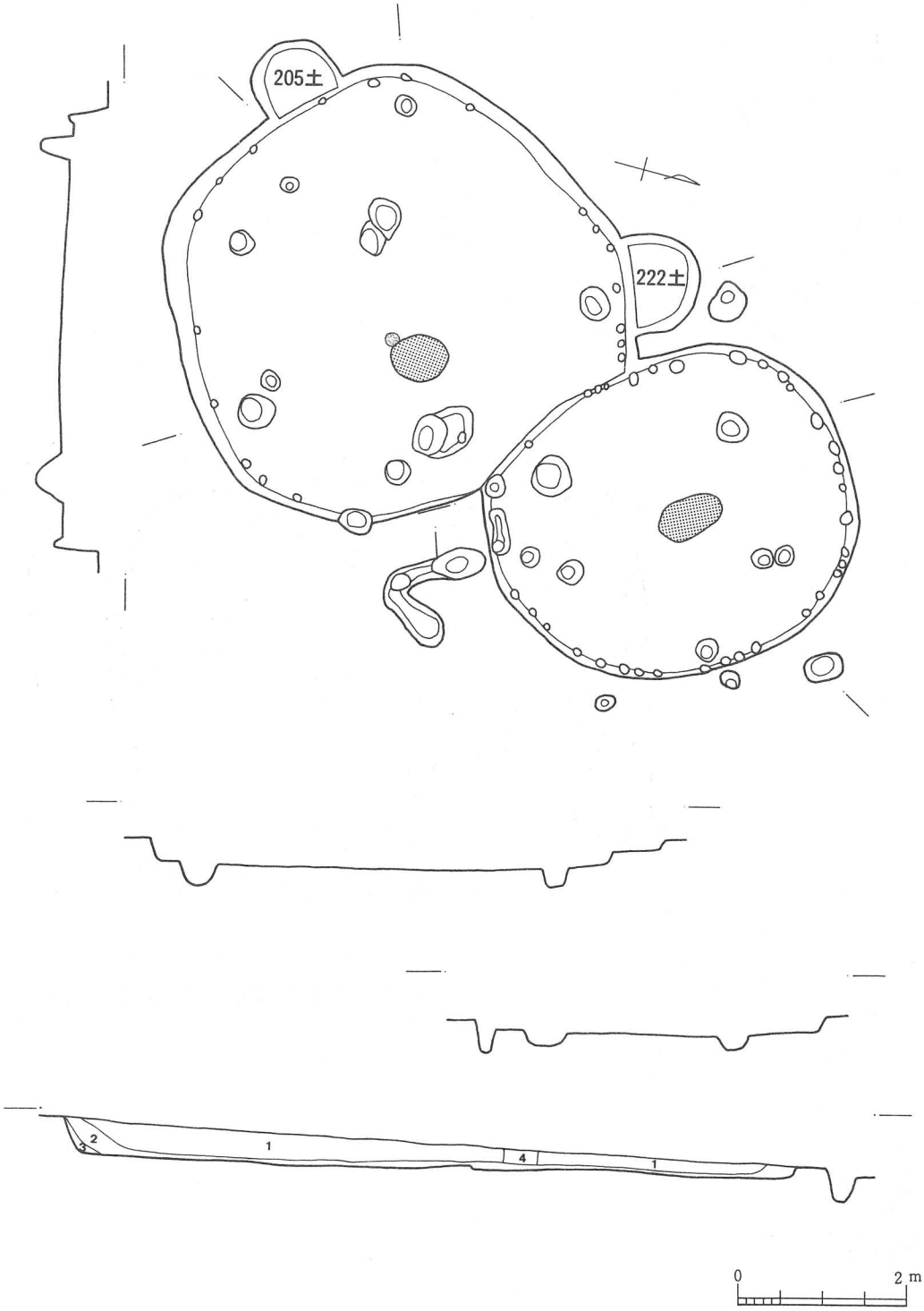
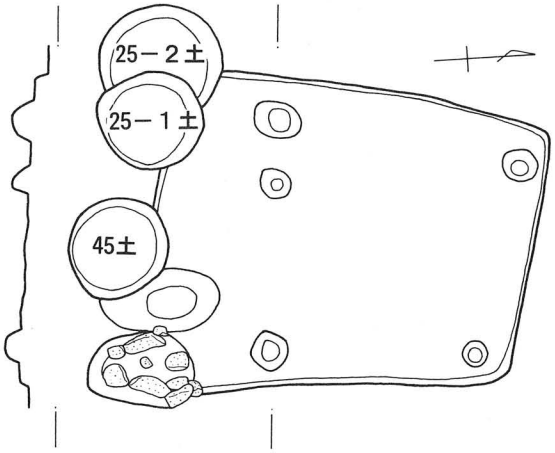


図25　24号(左)25号(右)住居址（水糸高＝ 684.7）

図26　1号住居址（水糸高＝ 692.7）



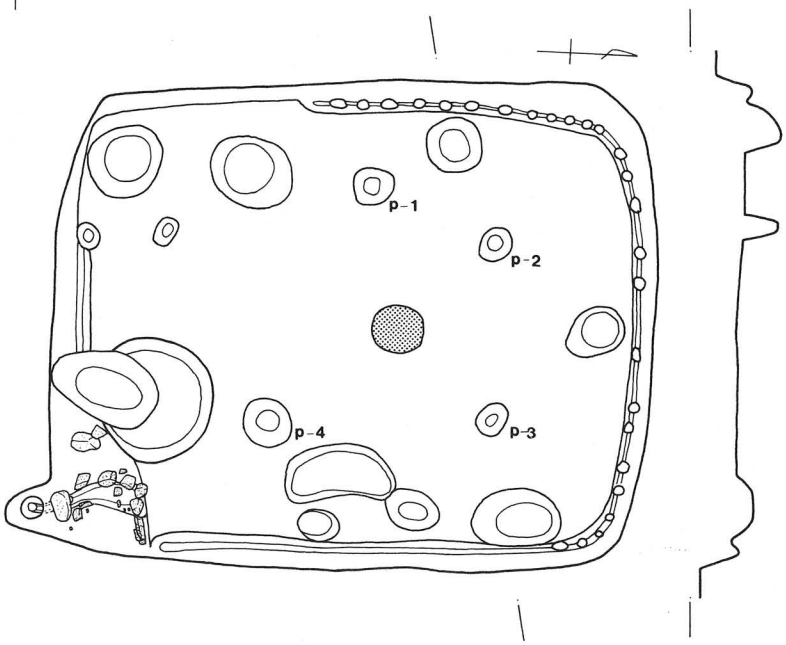
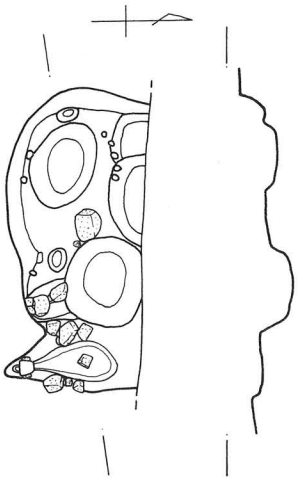


図27　3号住居址（水糸高＝ 691.1）



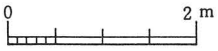
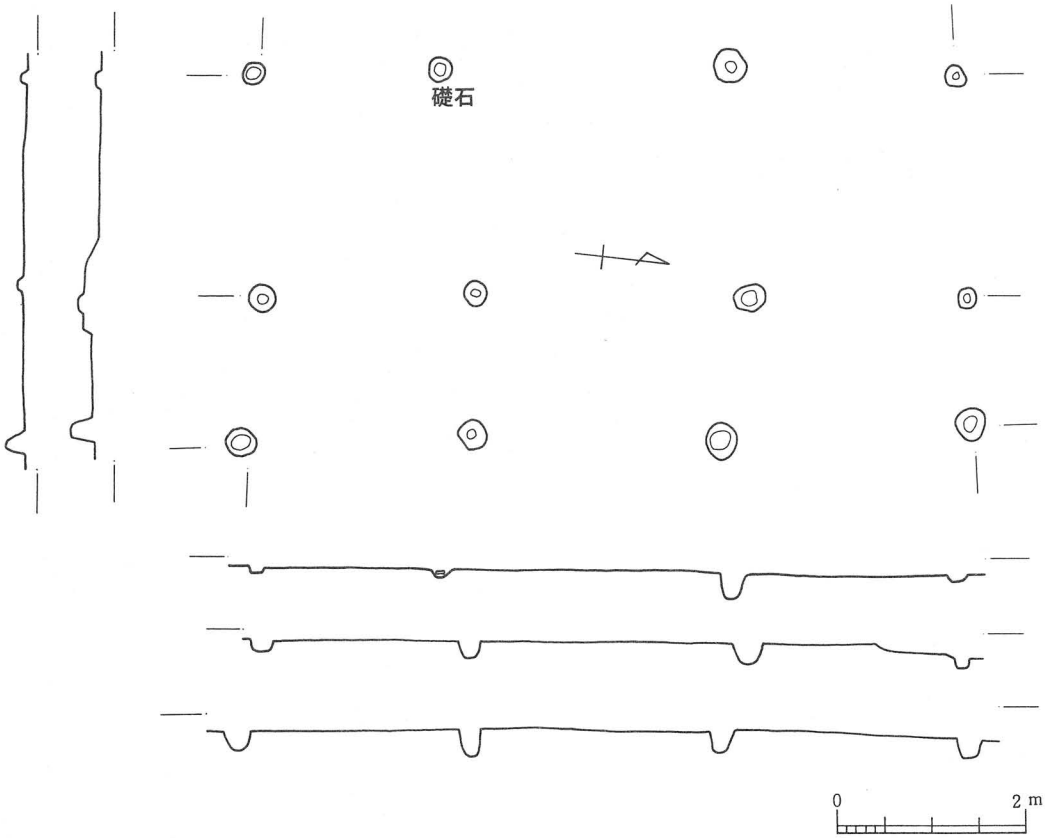


図28　14号住居址（水糸高＝ 686.5）

図29　１号掘立柱建物址（水糸高＝ 687.0）



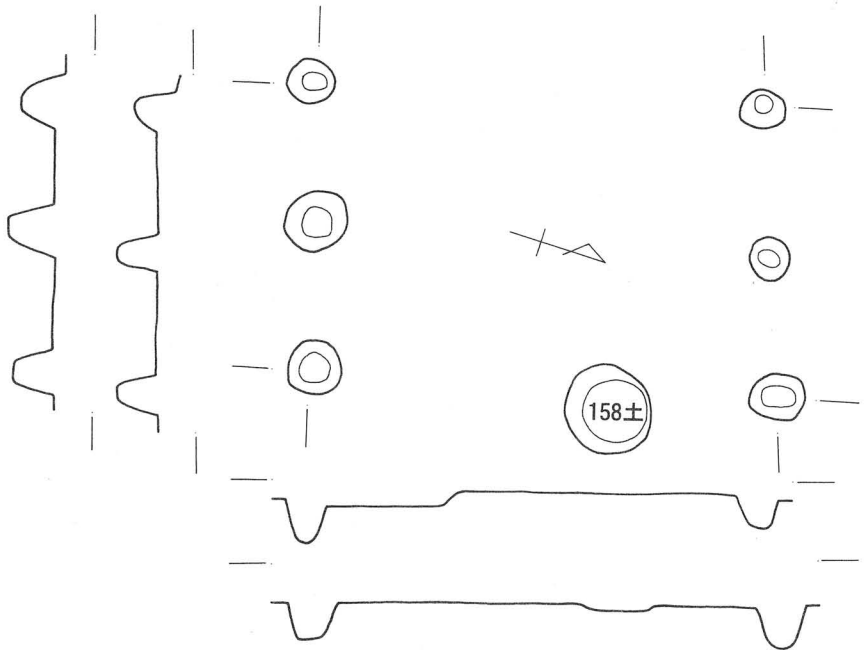


図30　２号掘立柱建物址（水糸高＝ 686.2）

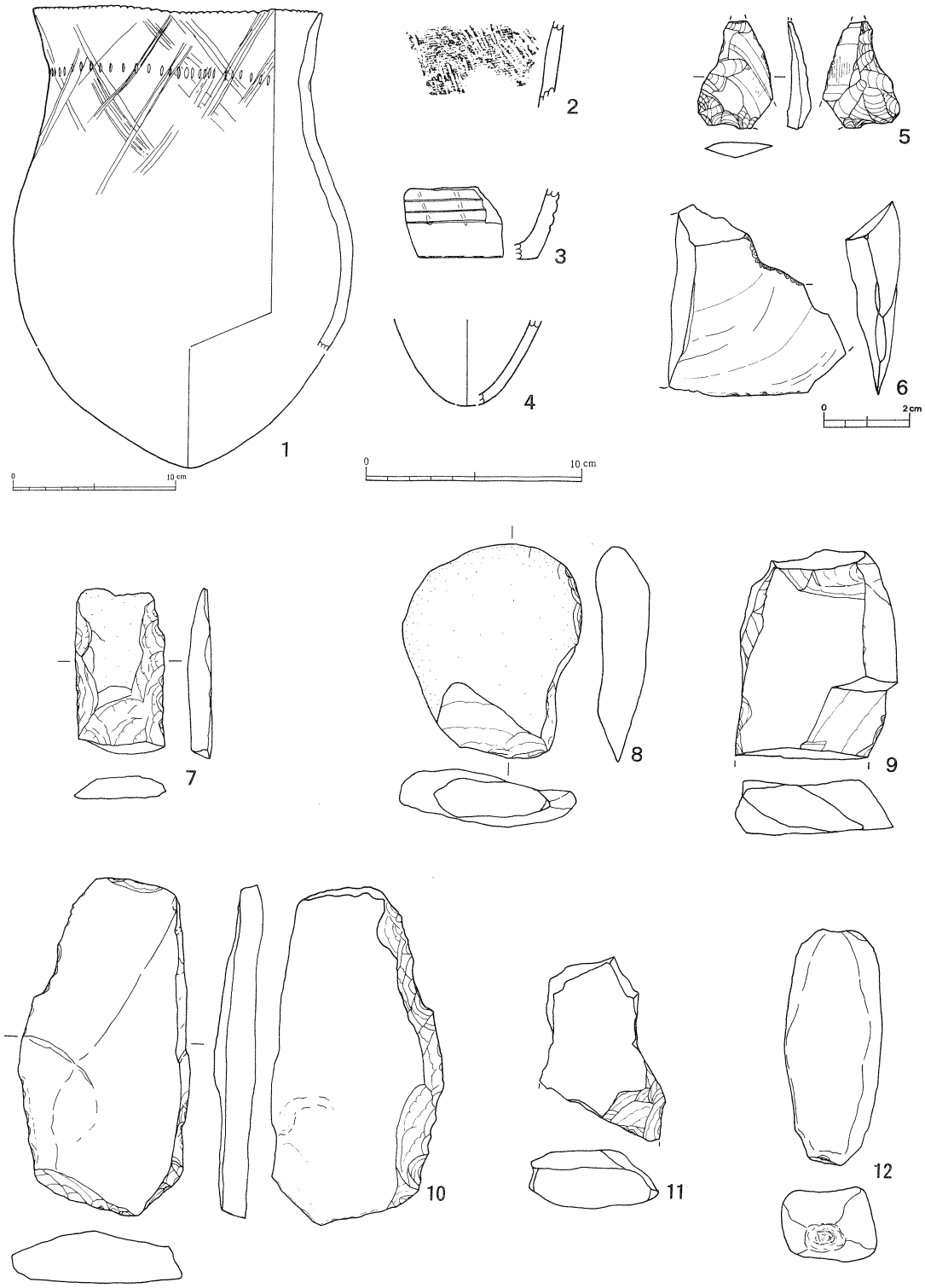


図31　２号住居址出土遺物１／３（１は１／４　５、６は２／３）

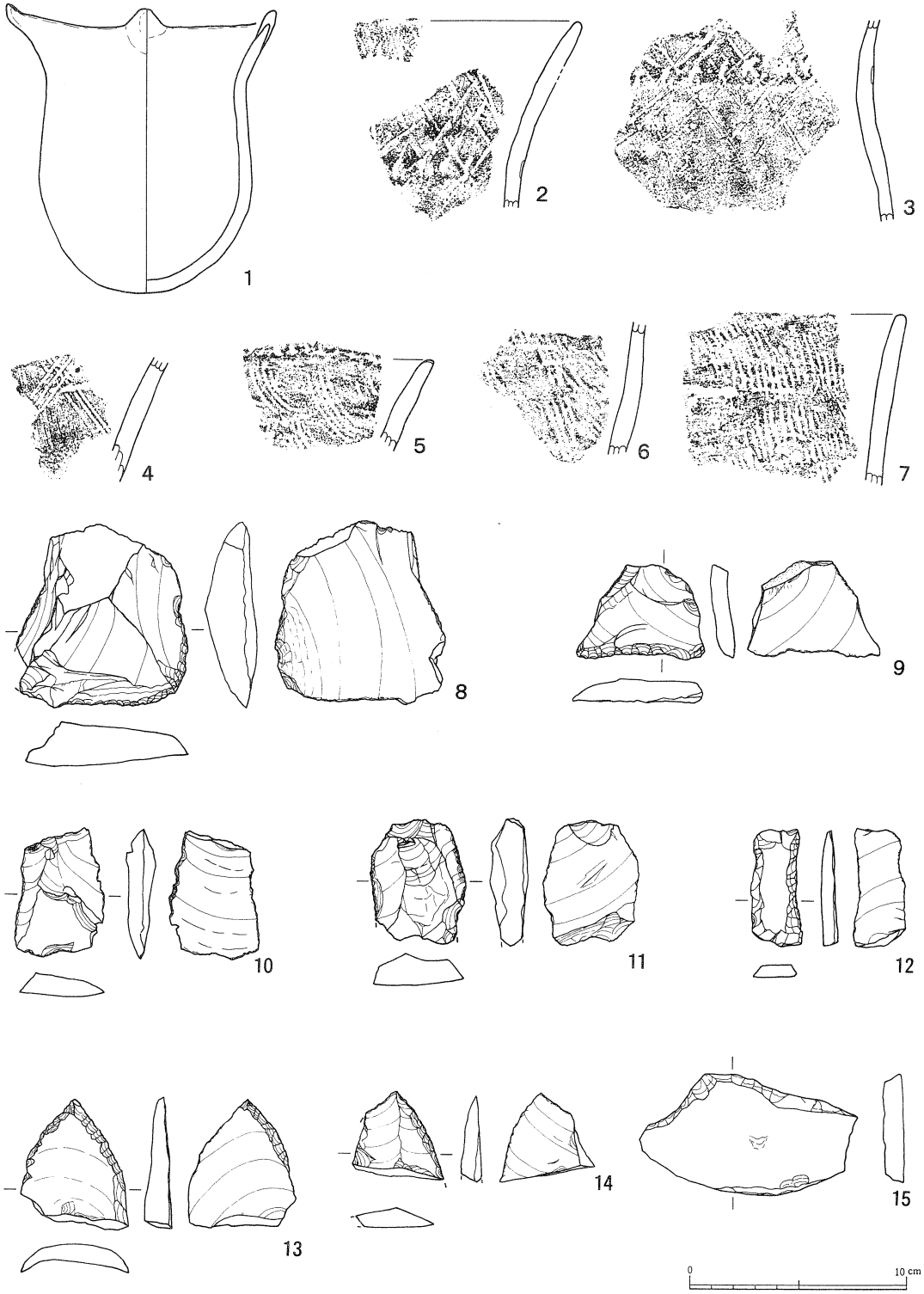


図32　4号住居址出土遺物①1／3

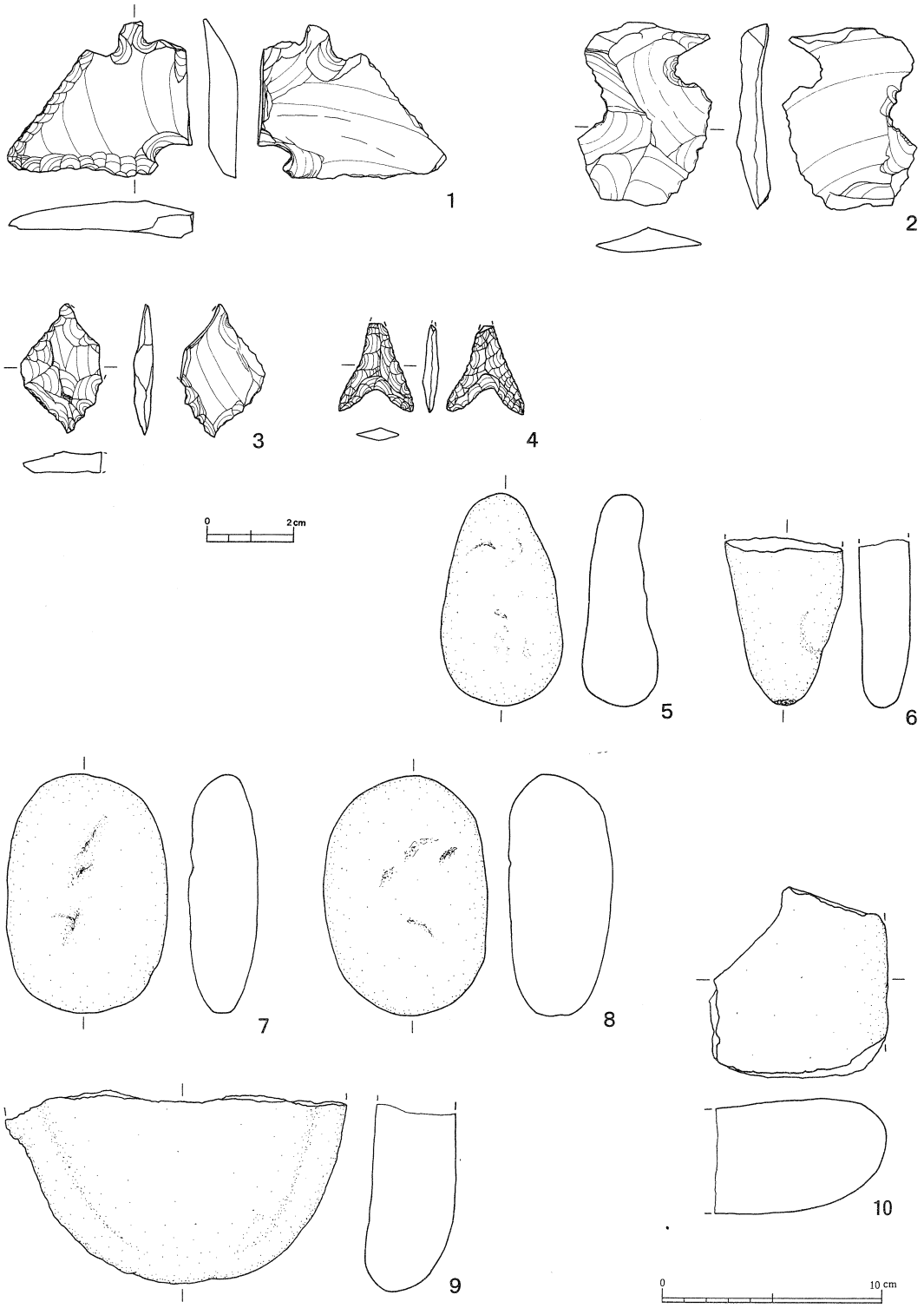


図33 4号住居址出土遺物②1／3（1～4は2／3）

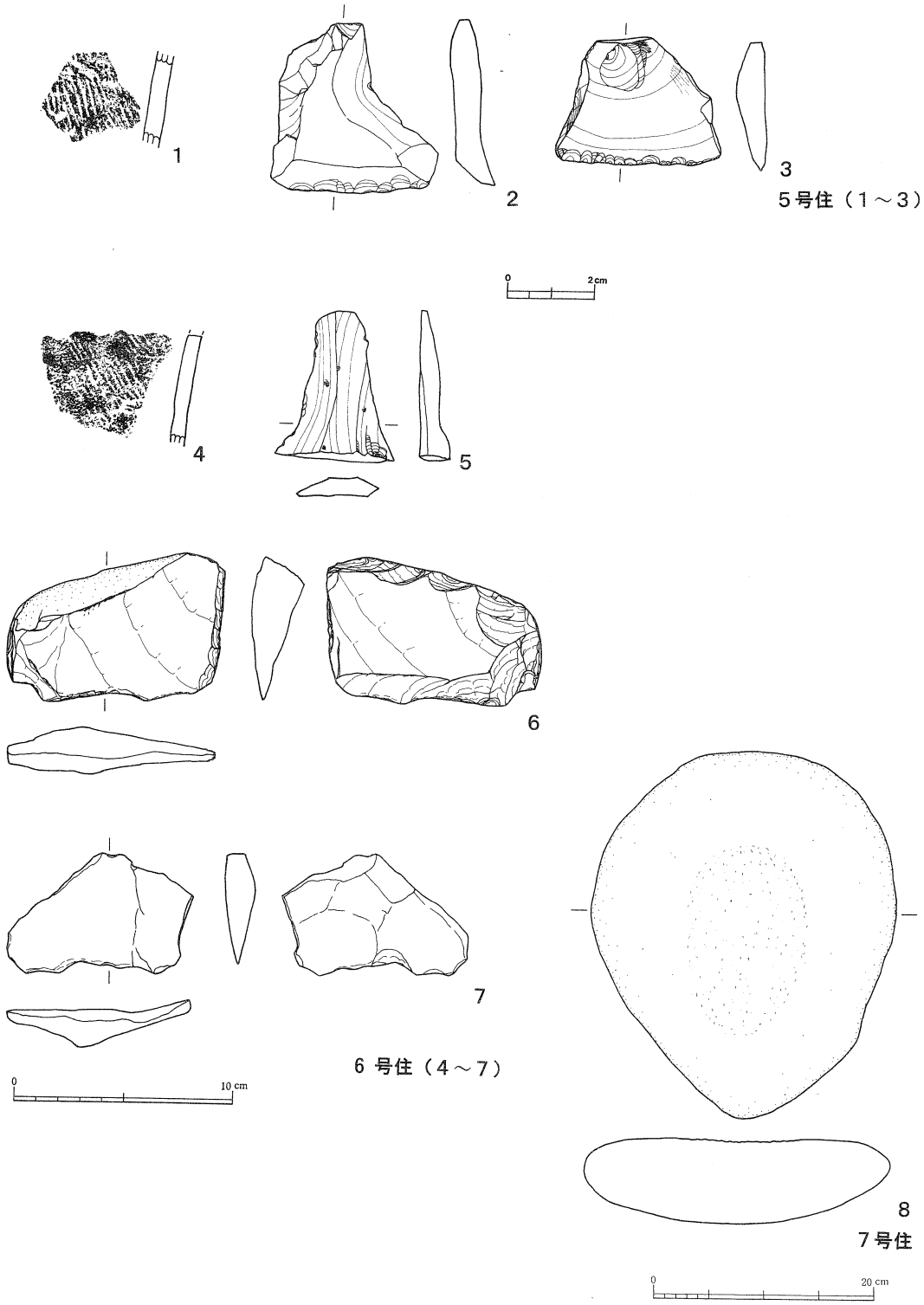


図34 5、6、7号住居址出土遺物1／3（2、3、5は2／3 8は1／6）

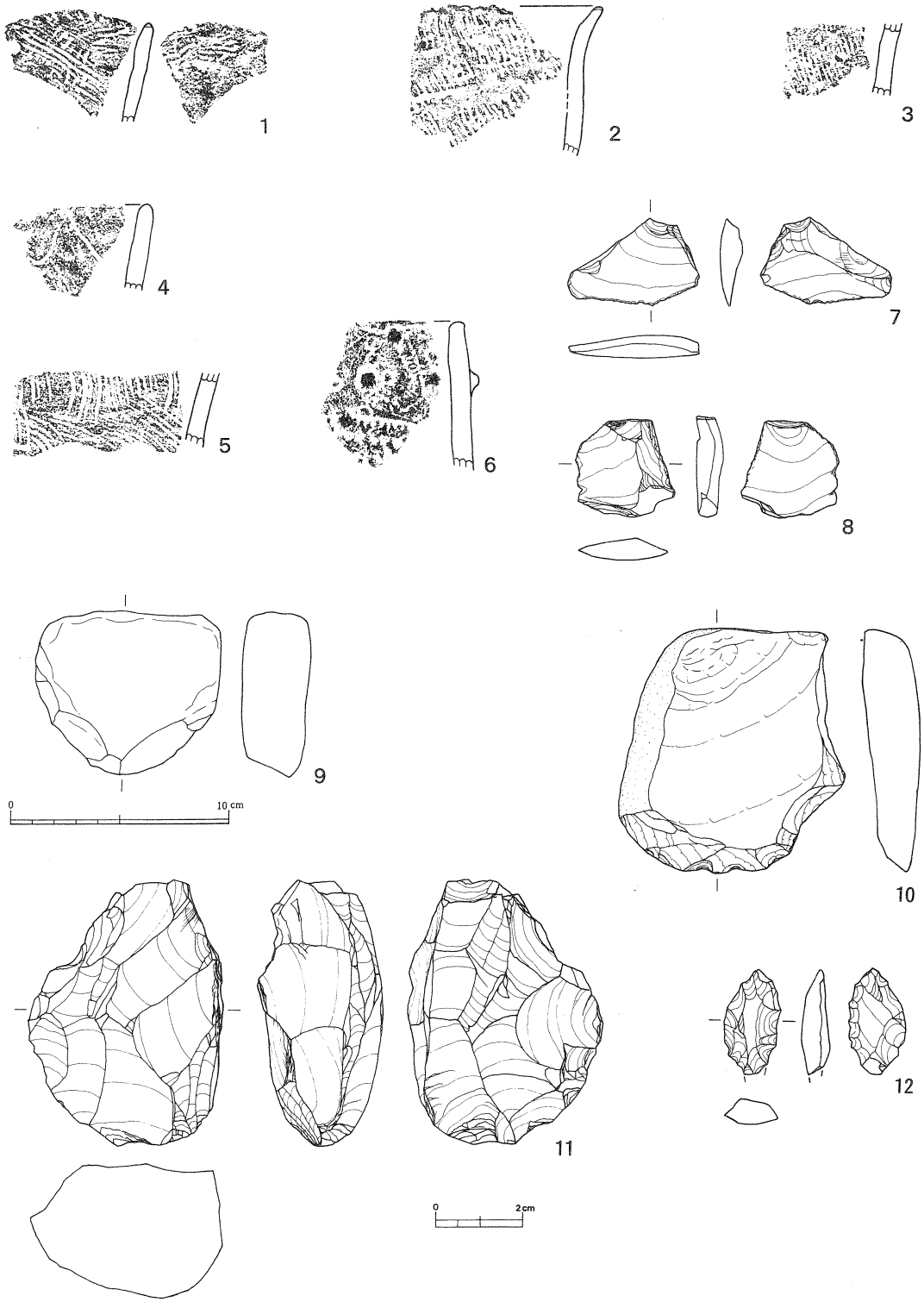


図35 ８号住居址出土遺物１／３（11、12は２／３）

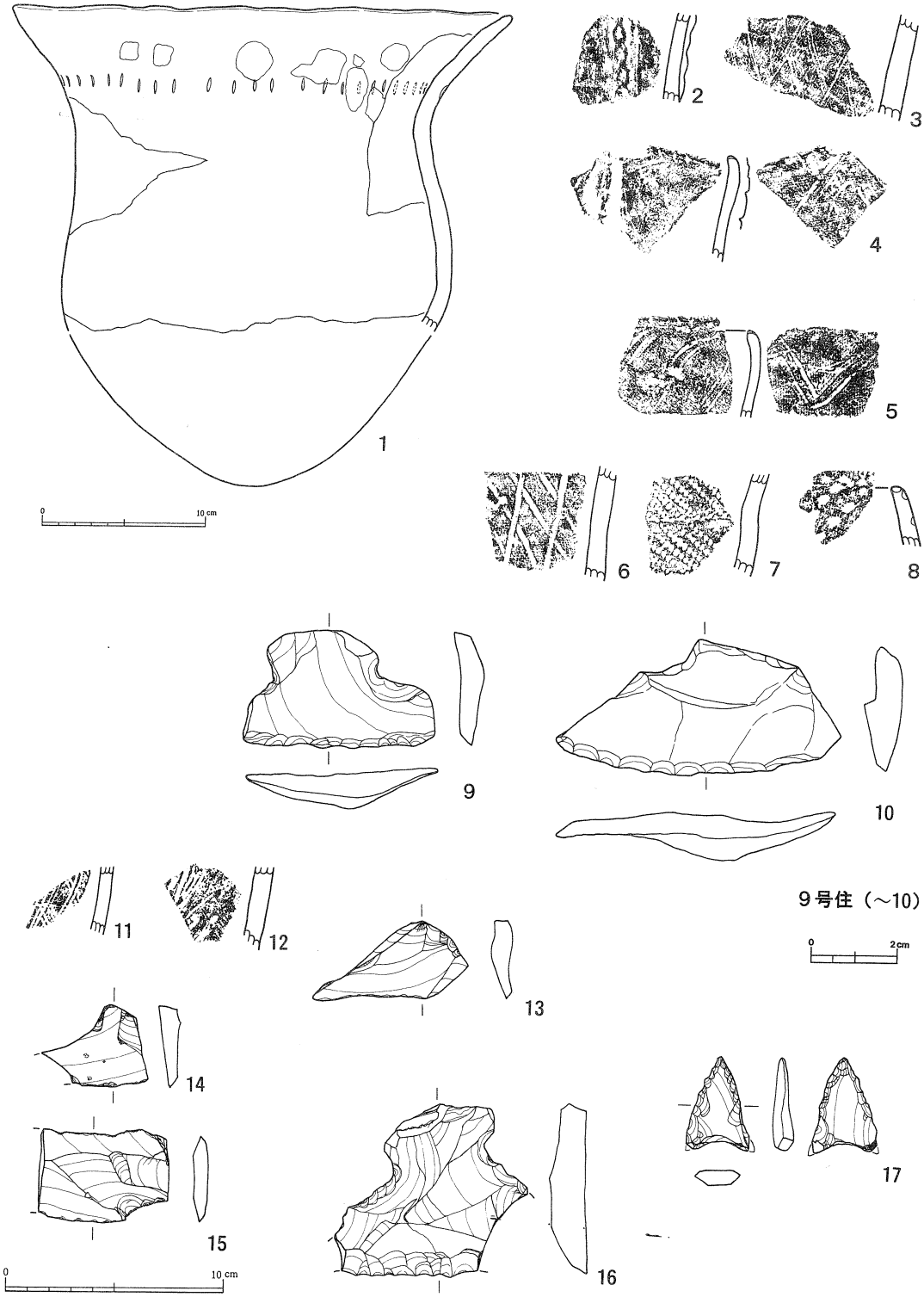


図36　9、10号住居址出土遺物1／3（1は1／4 9、10、16、17は2／3）

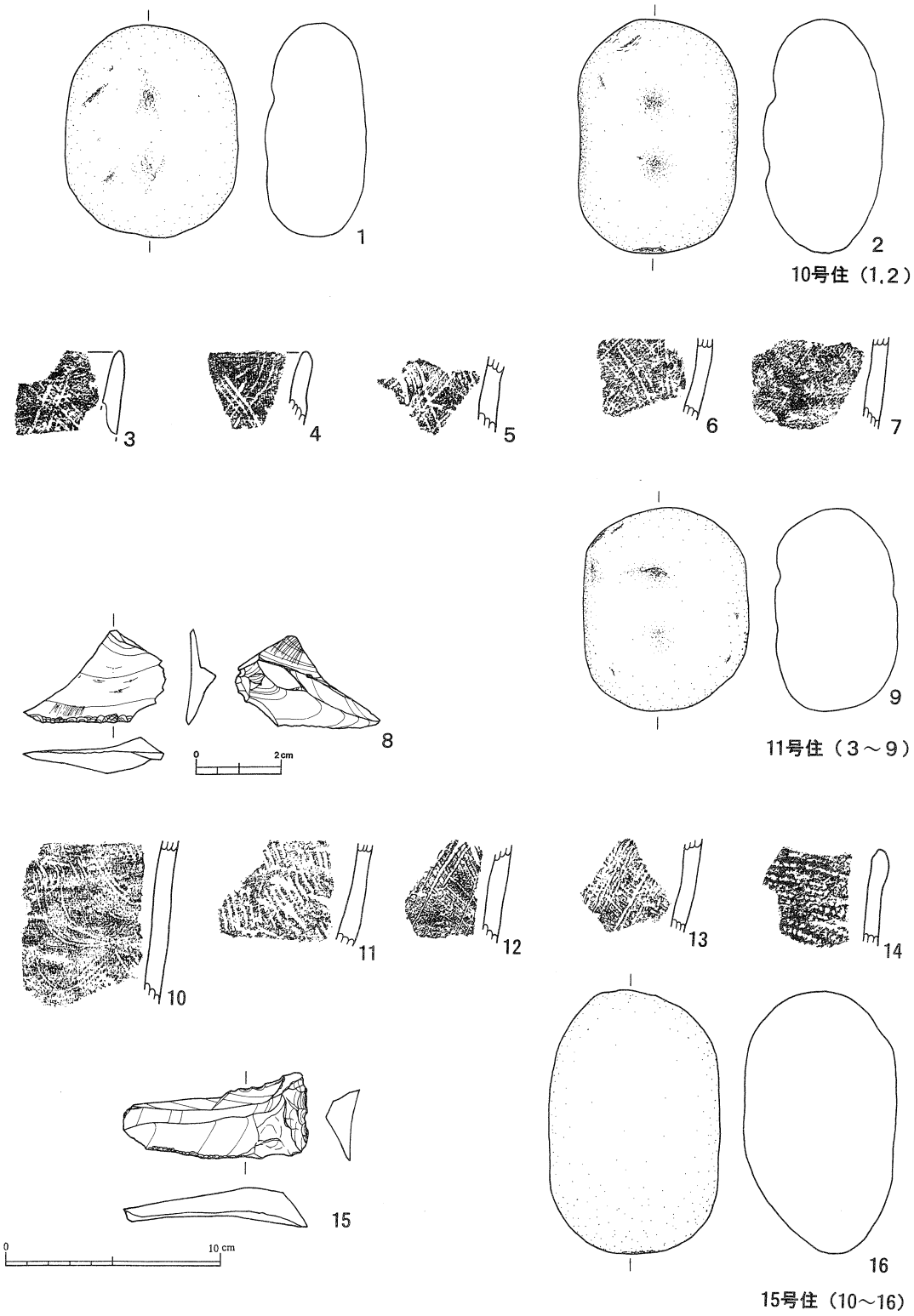


図37 10、11、15号住居址出土遺物1／3（8は2／3）

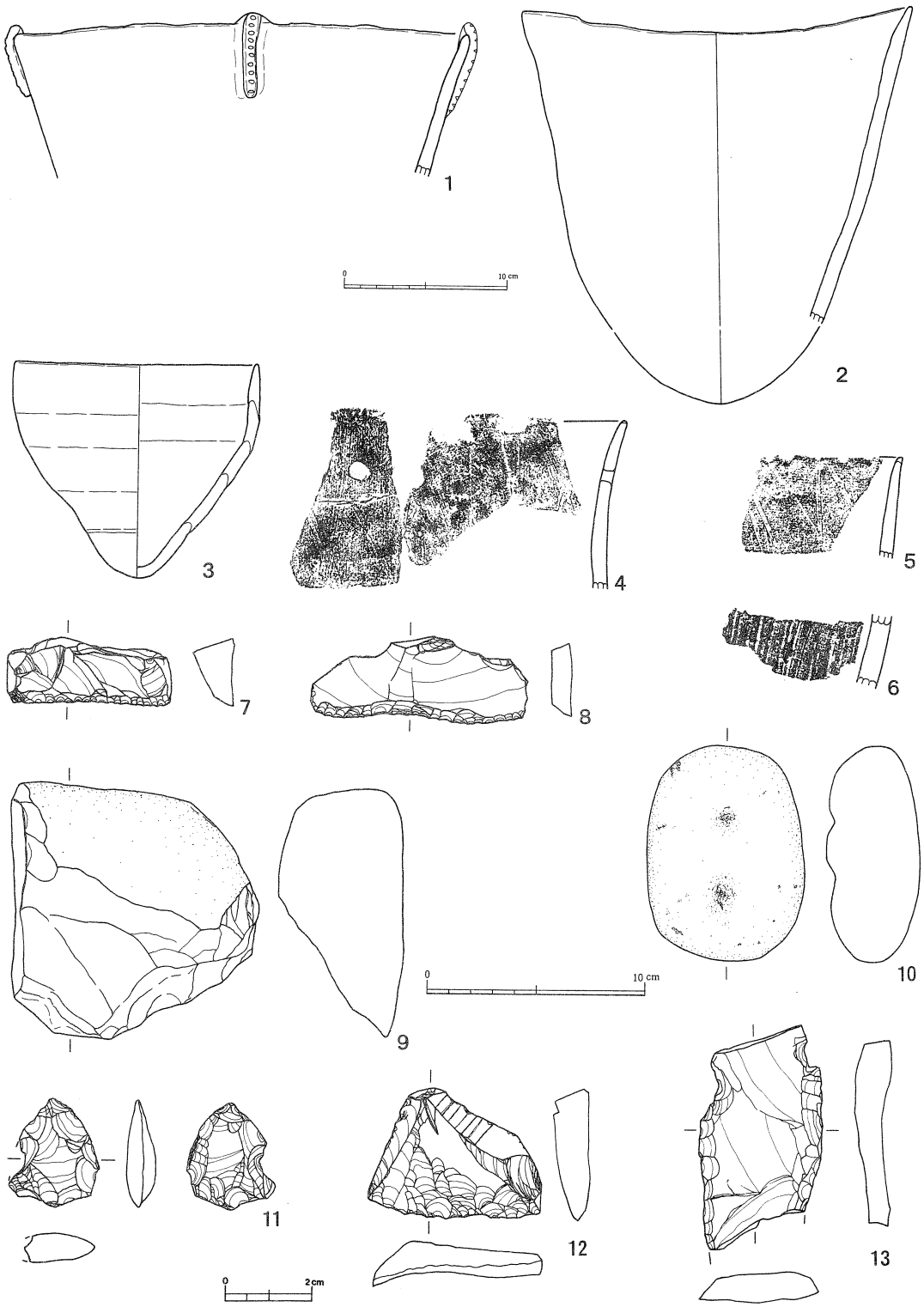


図38 16号住居址出土遺物1／3（1、2は1／4 11～13は2／3）

図39 17号住居址出土遺物1／3（19、20は2／3）

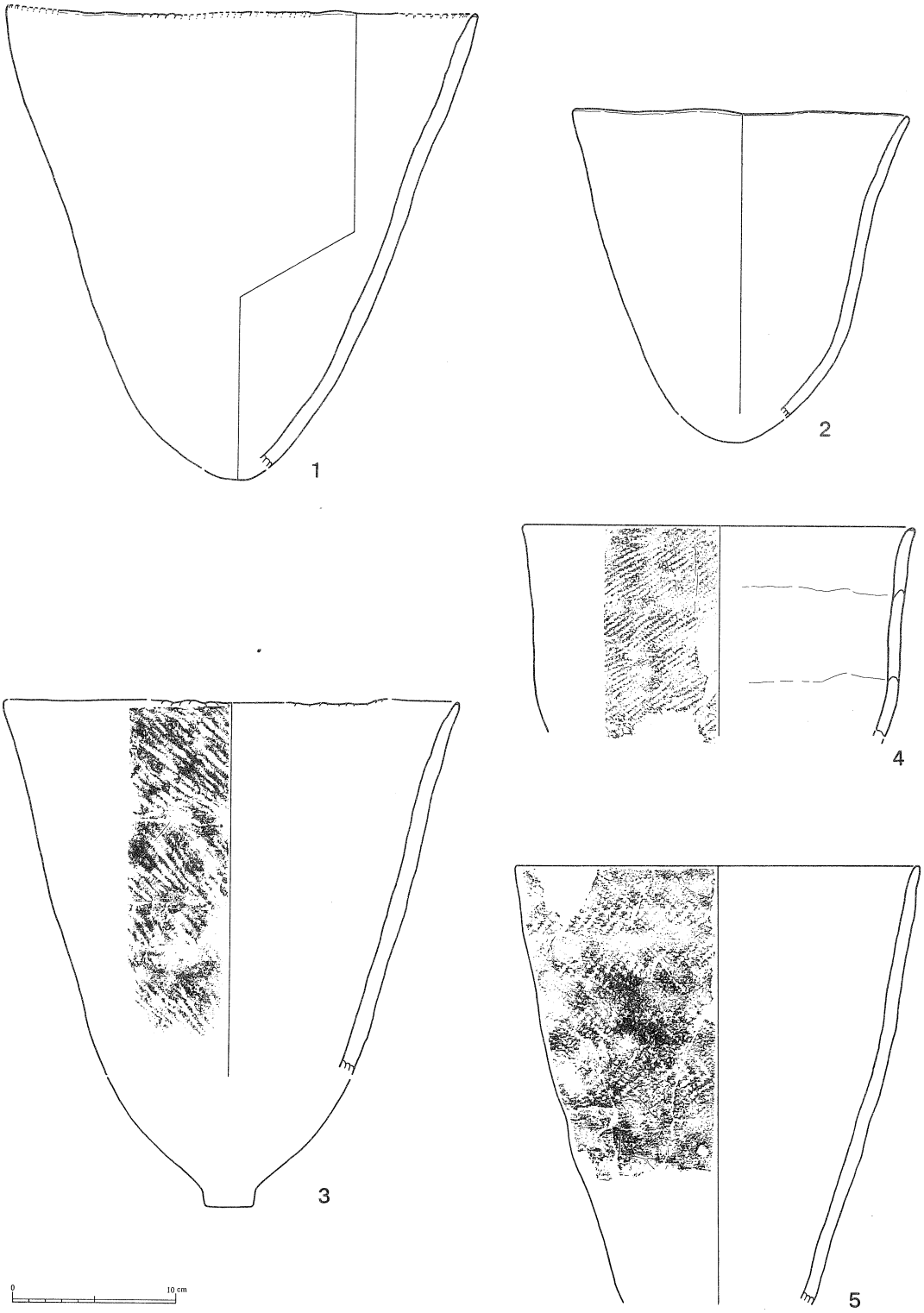


図40 18号住居址出土遺物①1／4

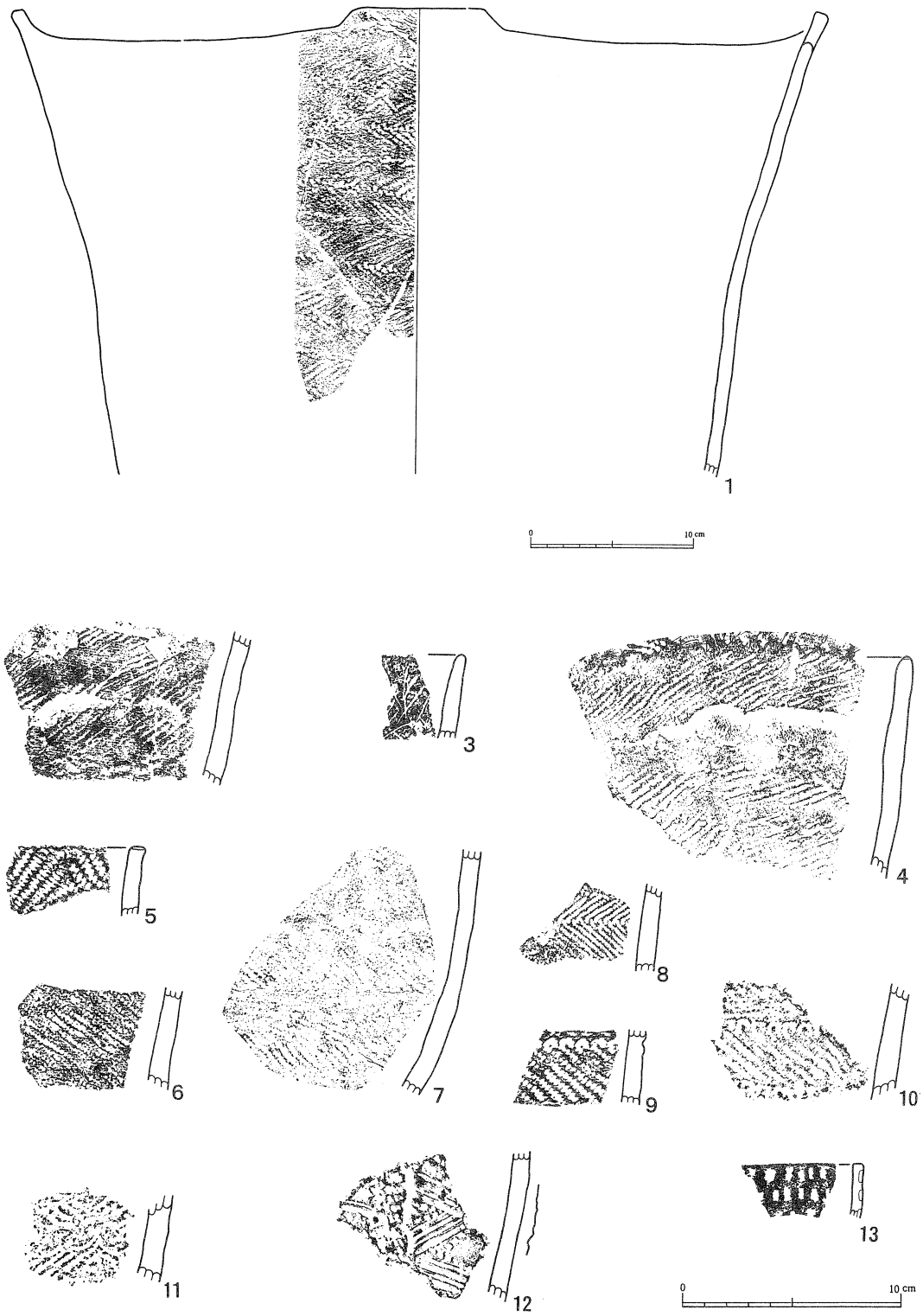


図41 18号住居址出土遺物②1／3（1は1／4）

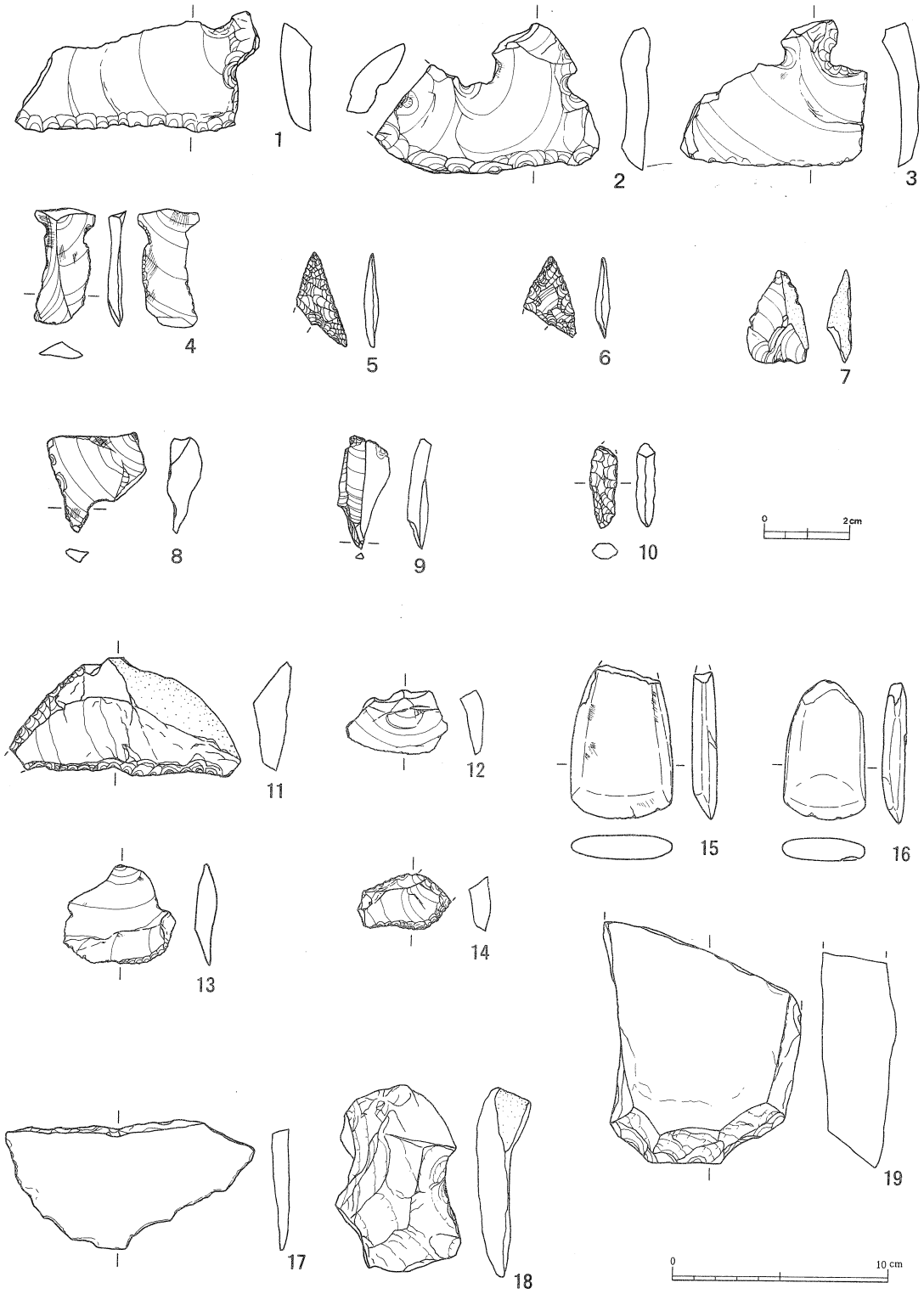


図42 18号住居址出土遺物③1／3（1～10は2／3）

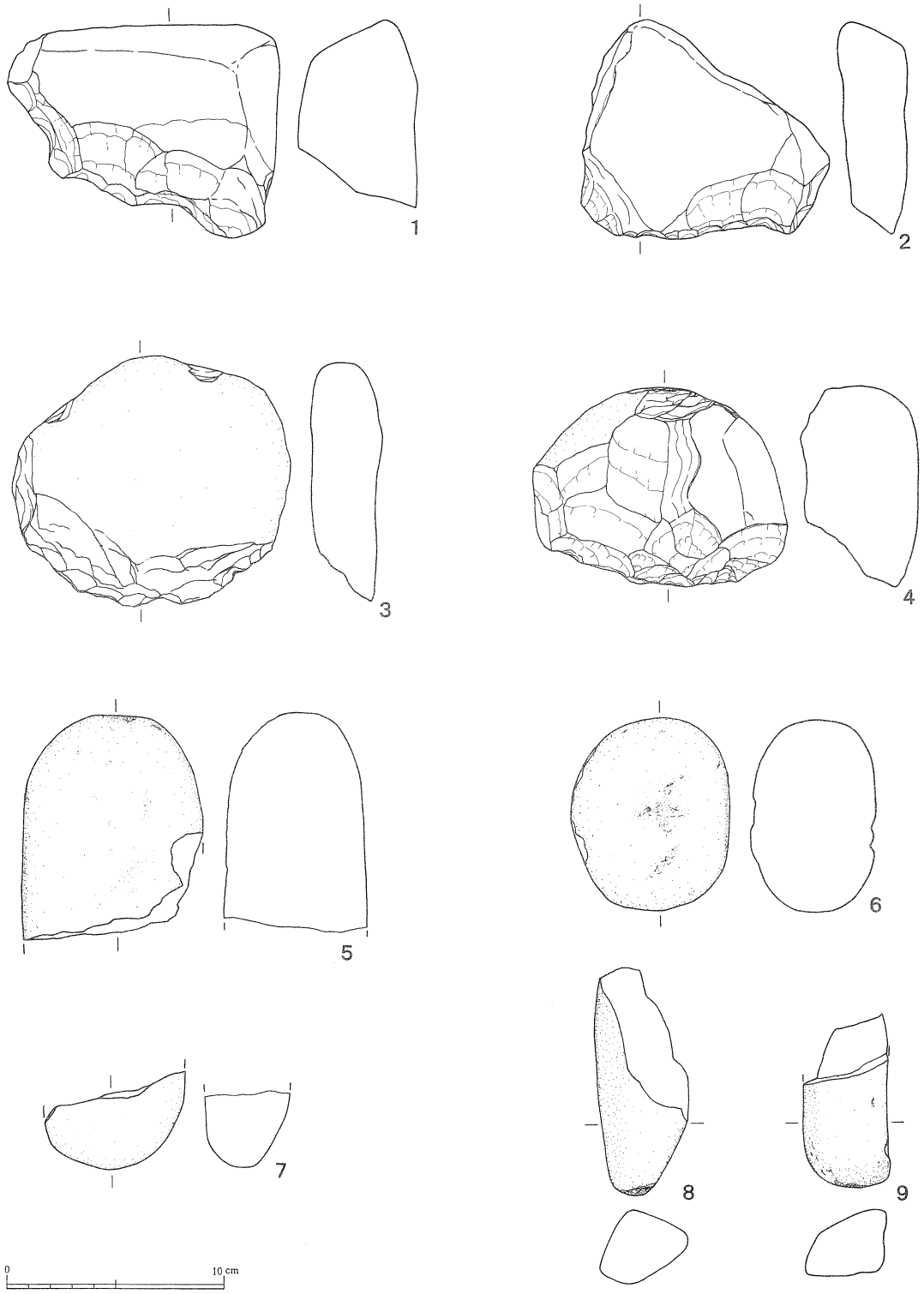


図43 18号住居址出土遺物④1／3

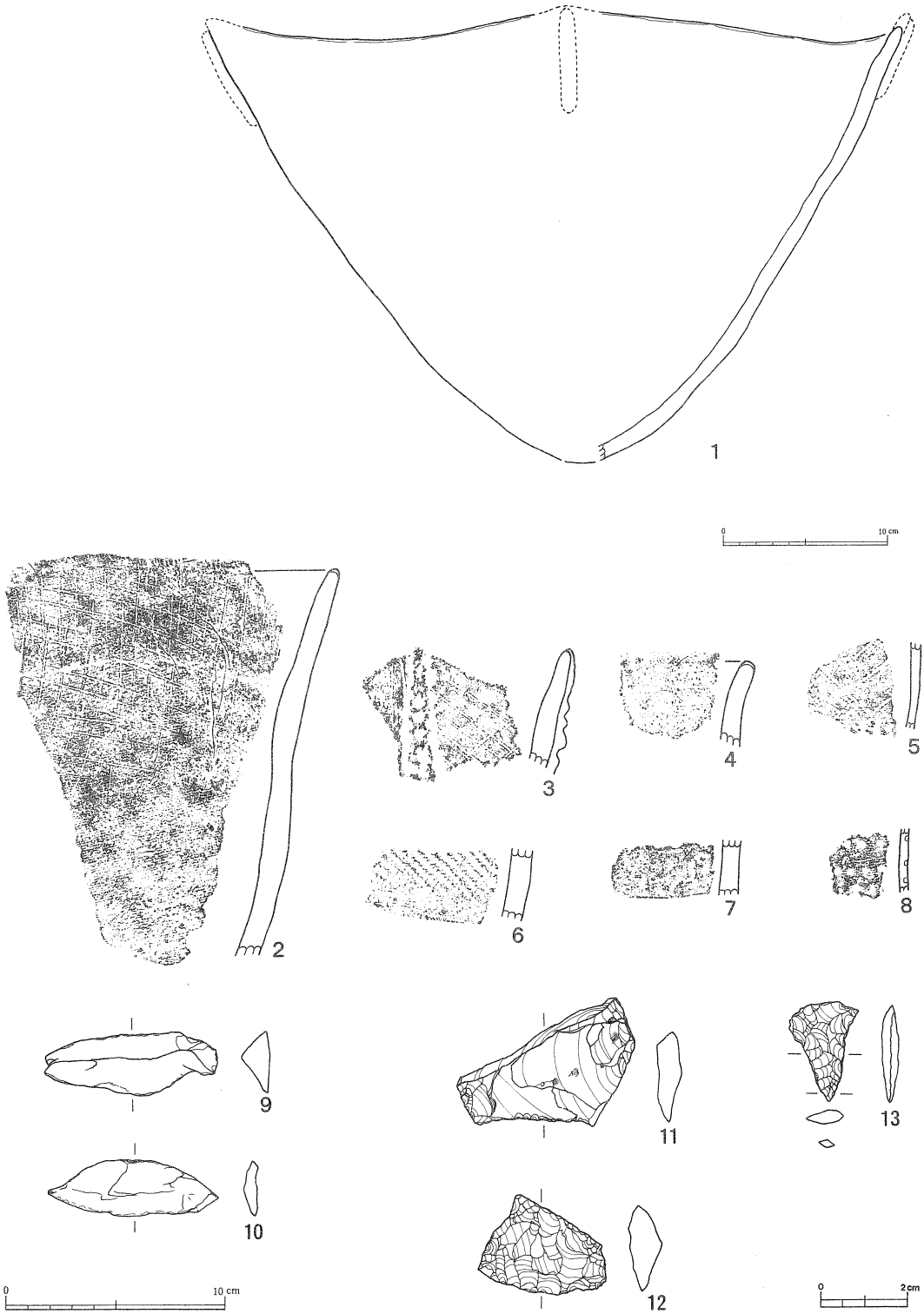


図44 19号住居址出土遺物1／3（1は1／4 11～13は2／3）

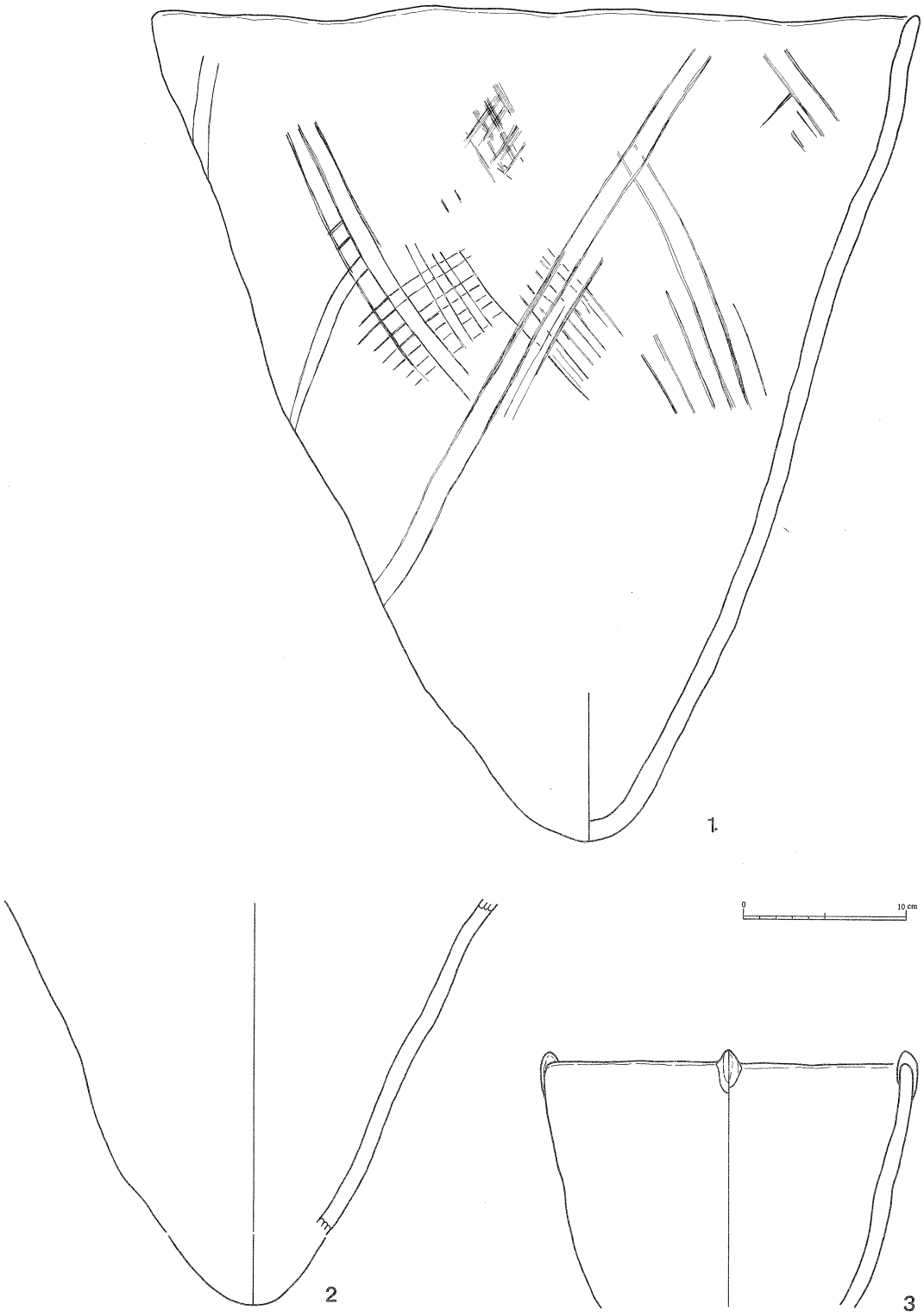


図45 20号住居址出土遺物①1／4

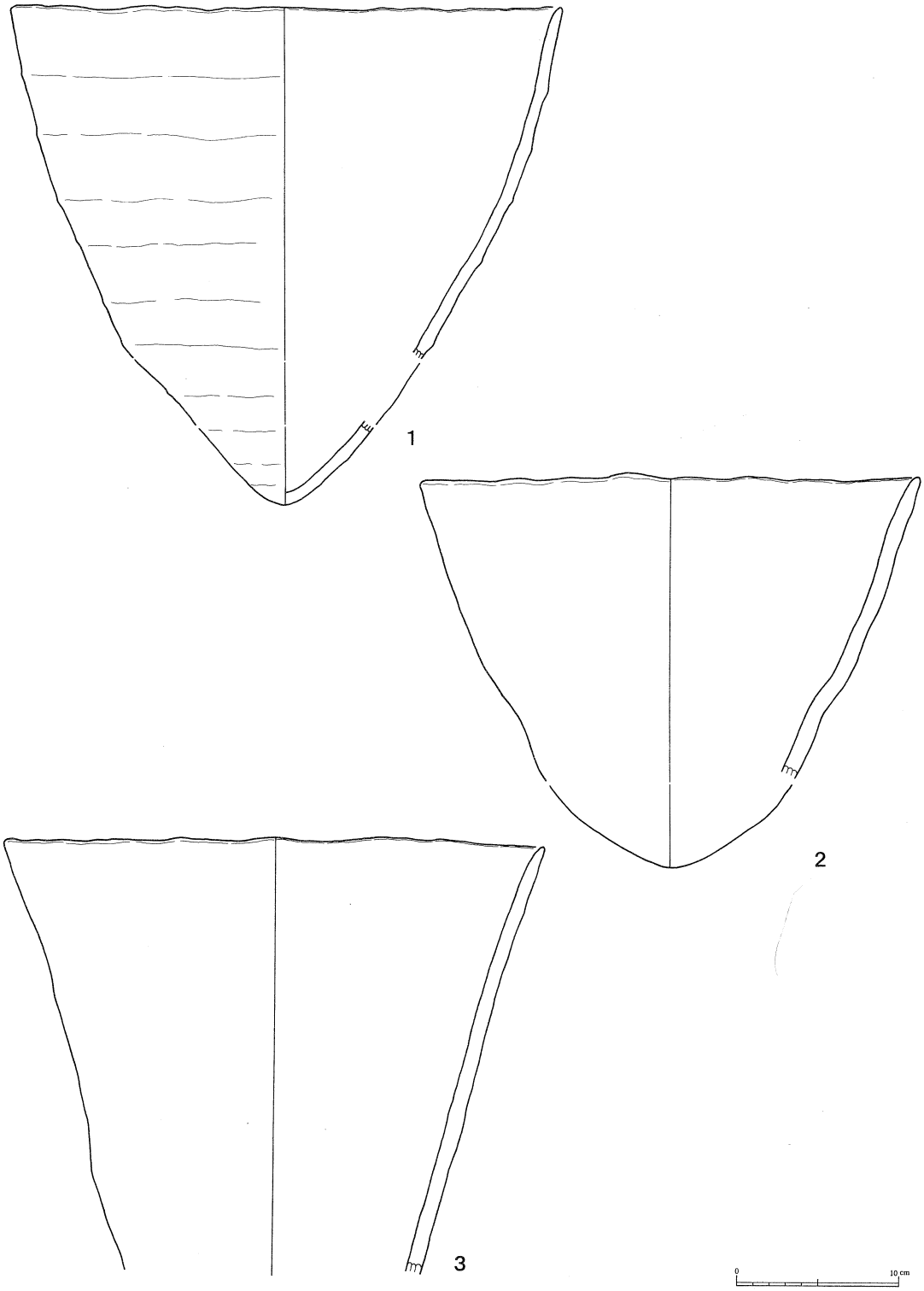


図46 20号住居址出土遺物②1／4

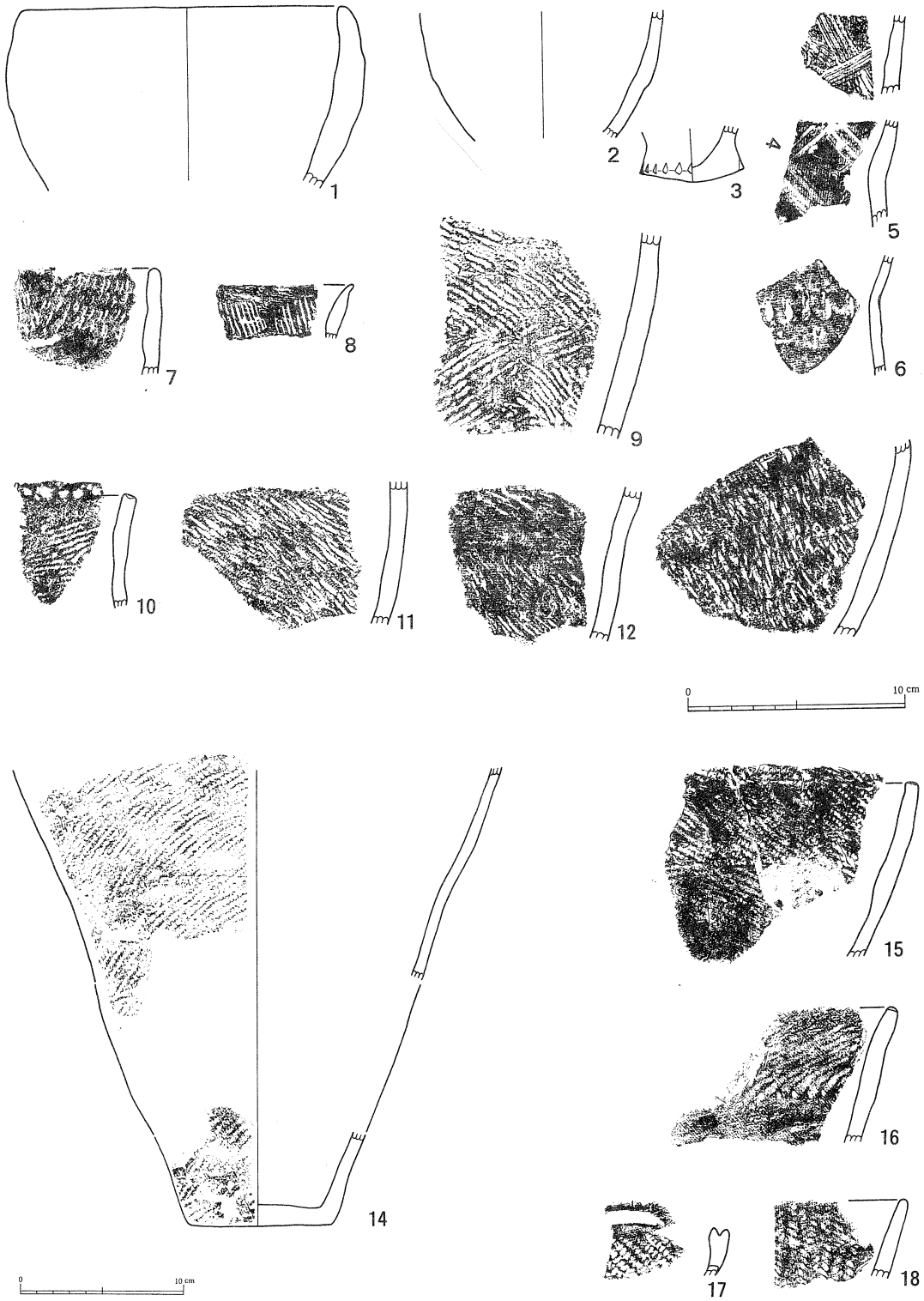


図47 20号住居址出土遺物③1／3（14は1／4）

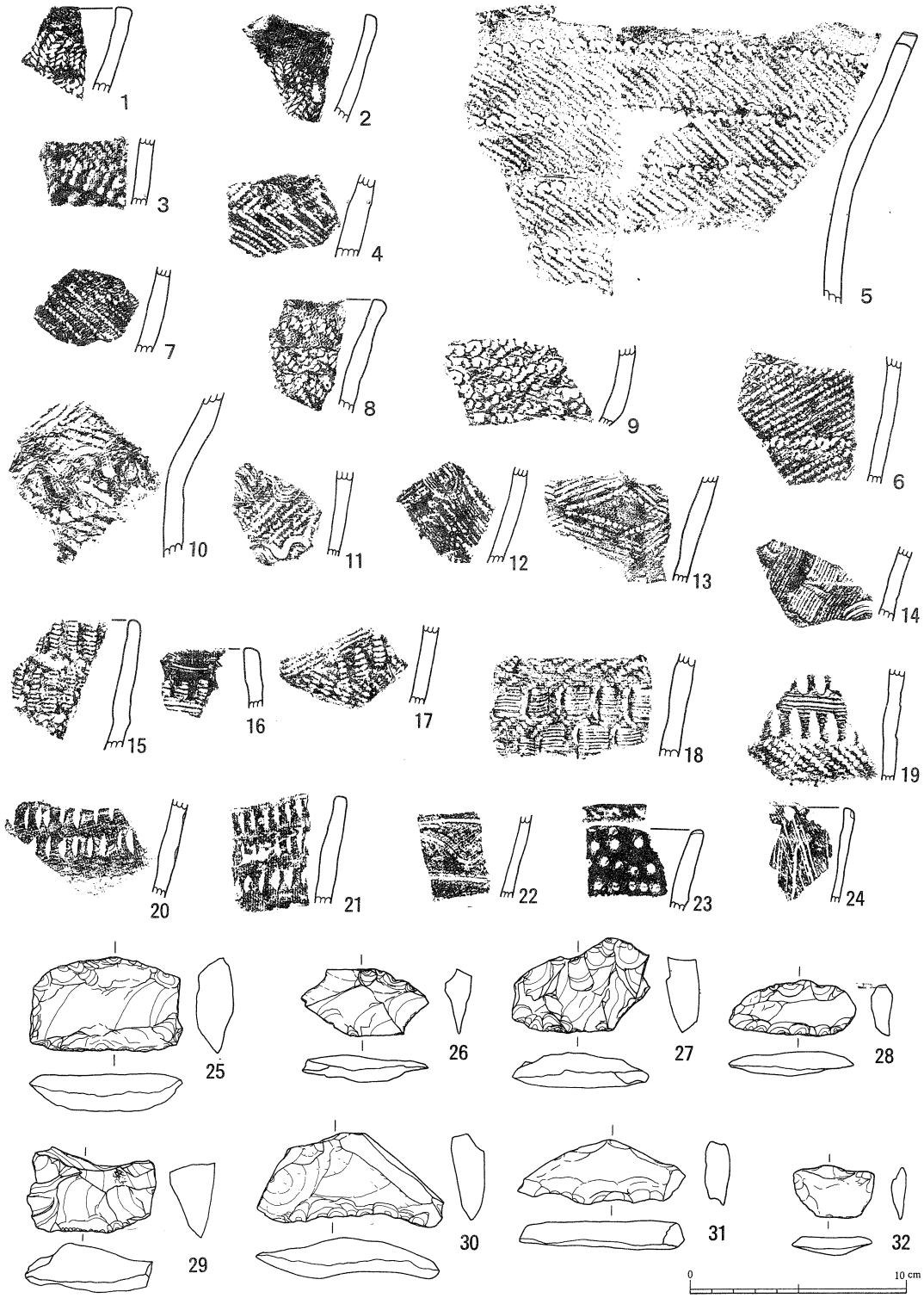


図48 20号住居址出土遺物④1／3

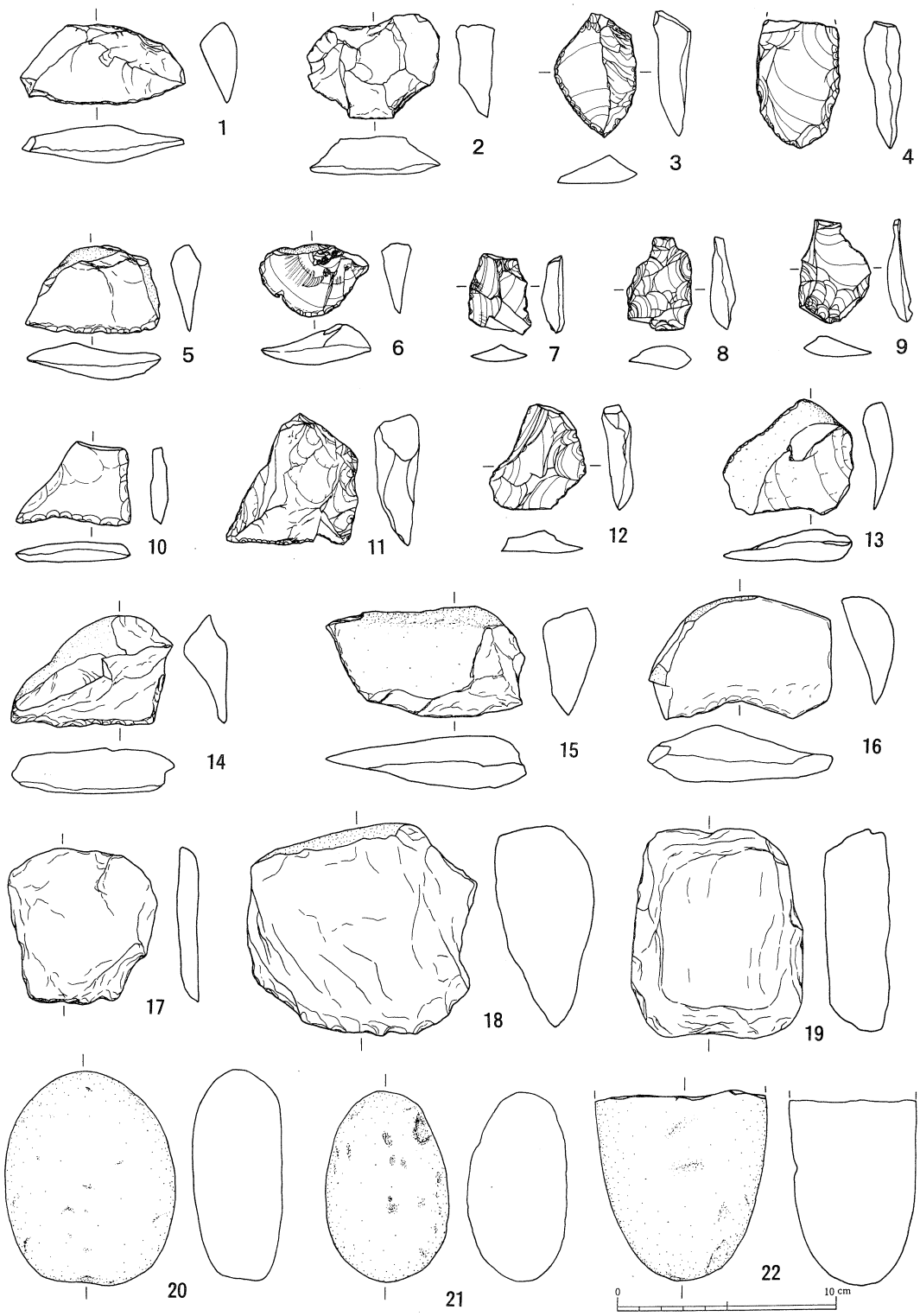


図49 20号住居址出土遺物⑤1／3

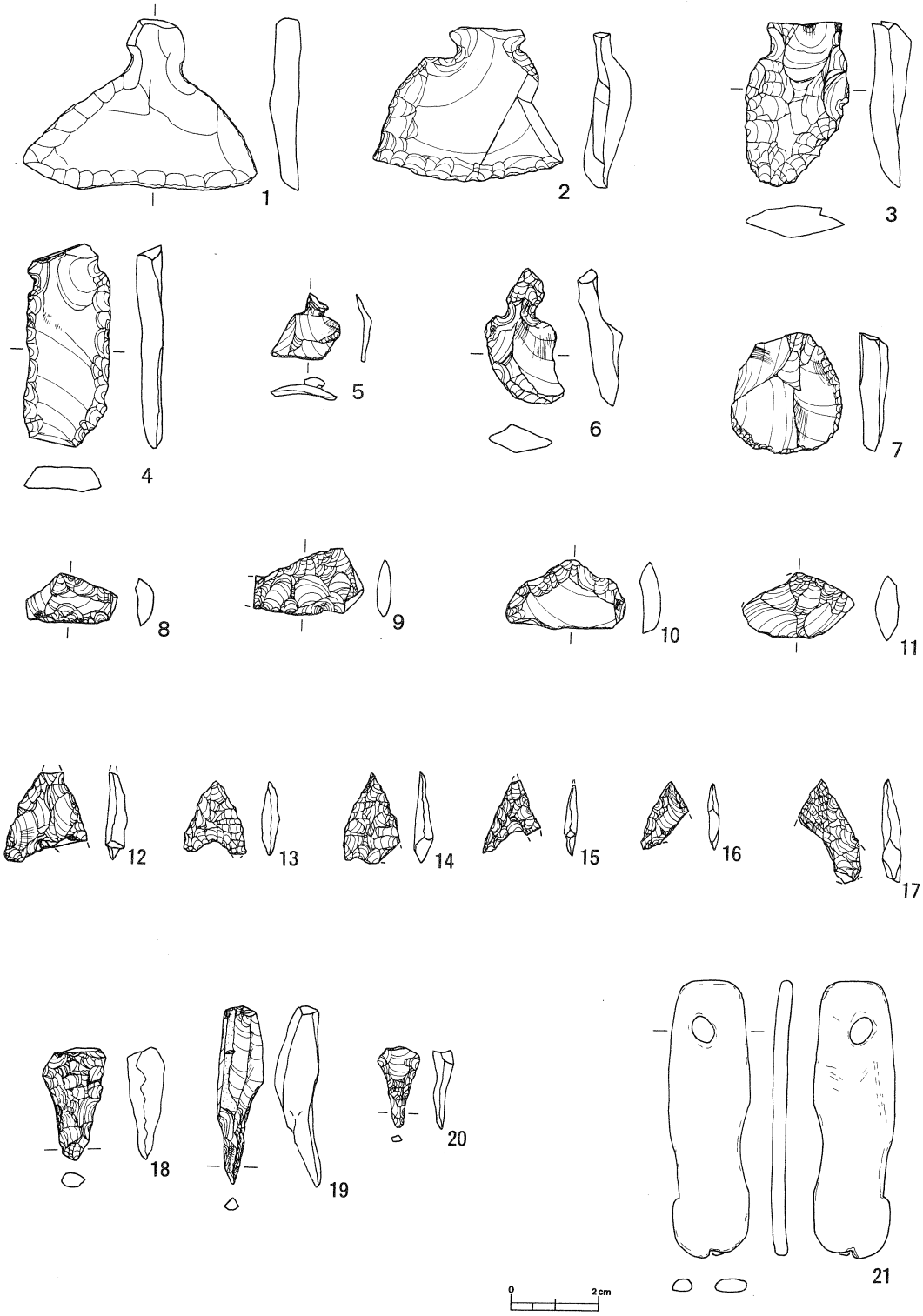


図50 20住居址出土遺物⑥2／3

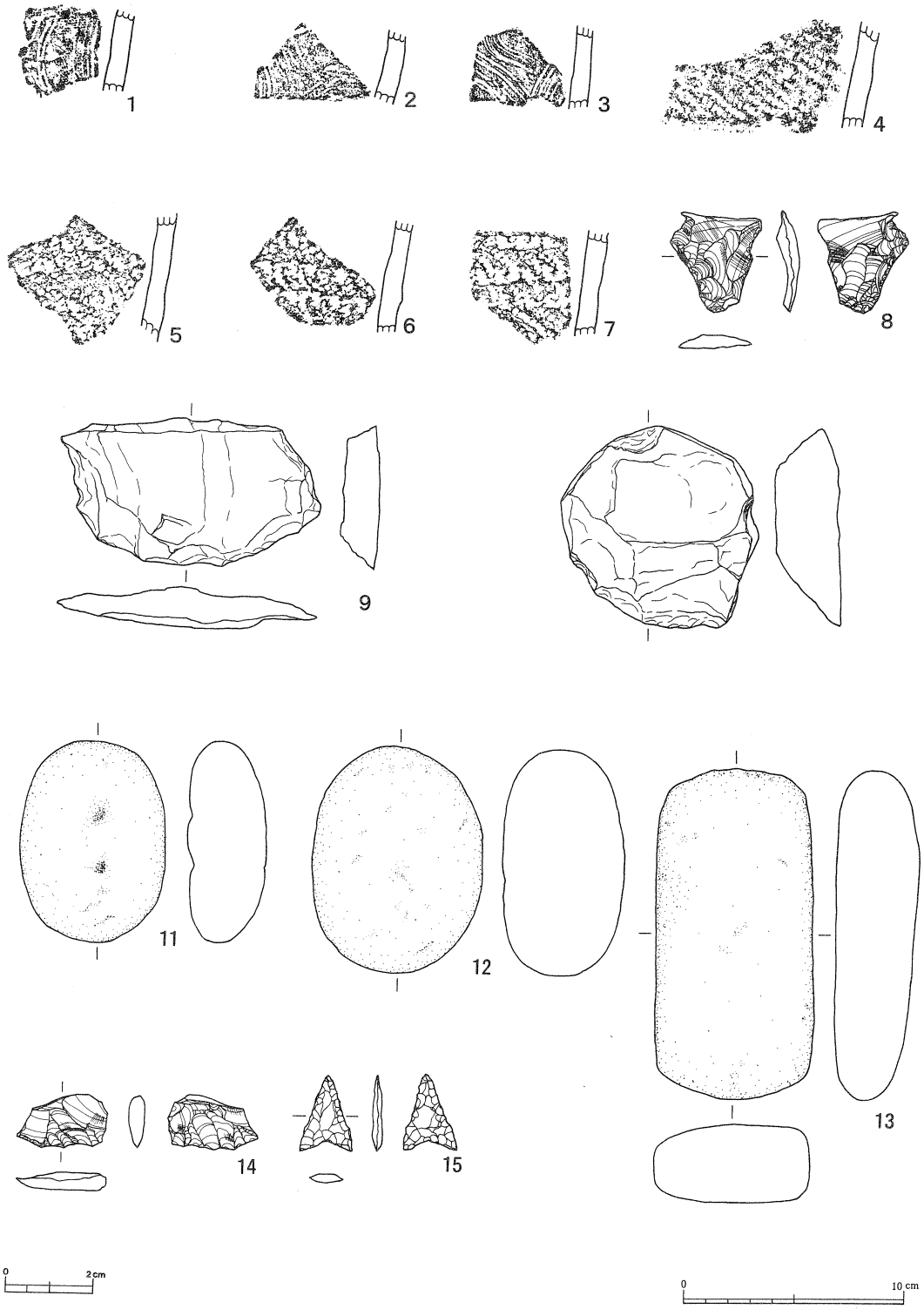


図51　21号住居址出土遺物 1／3（14、15は 2／3）

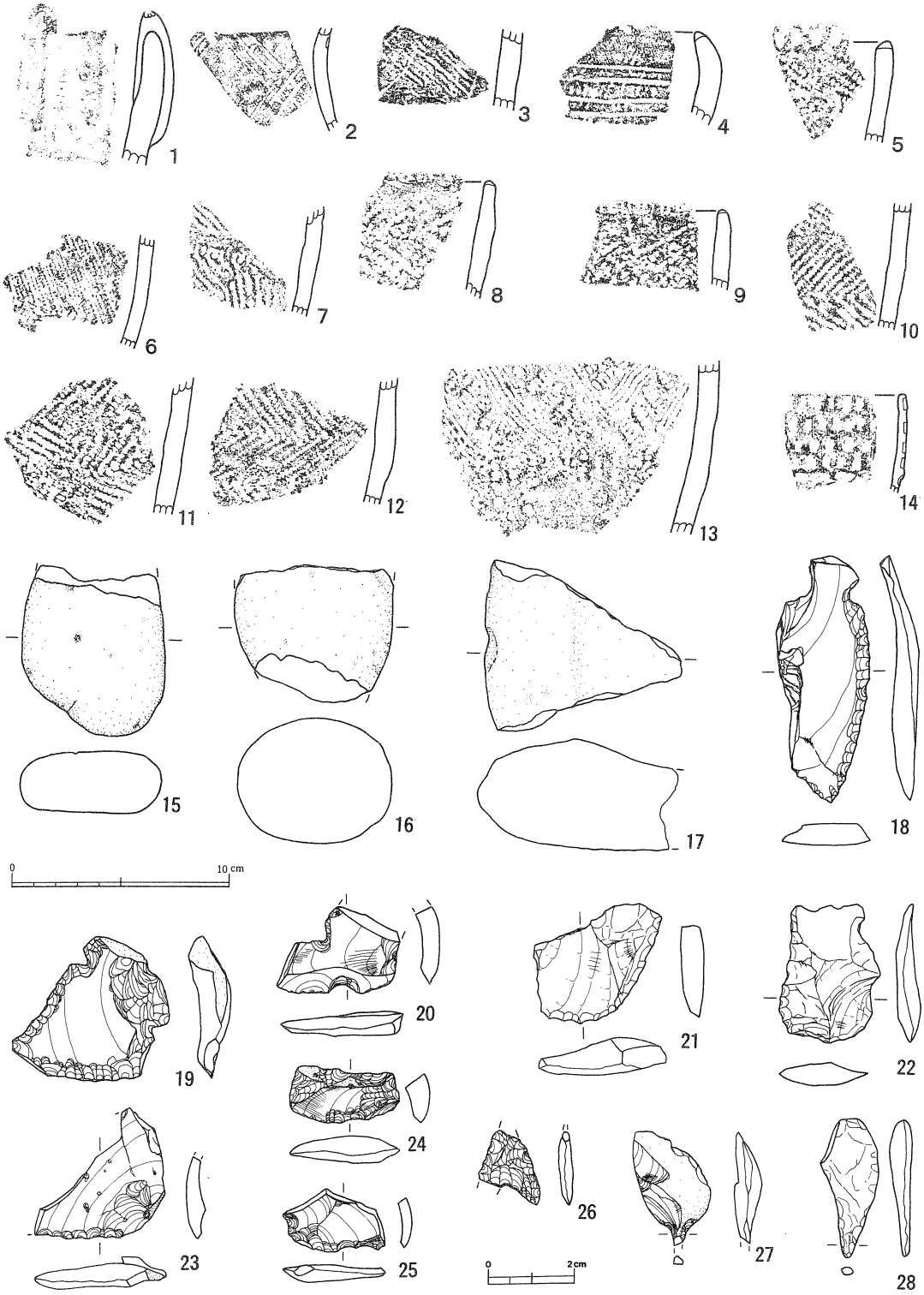


図52 22号住居址出土遺物 1／3（18～28は2／3）

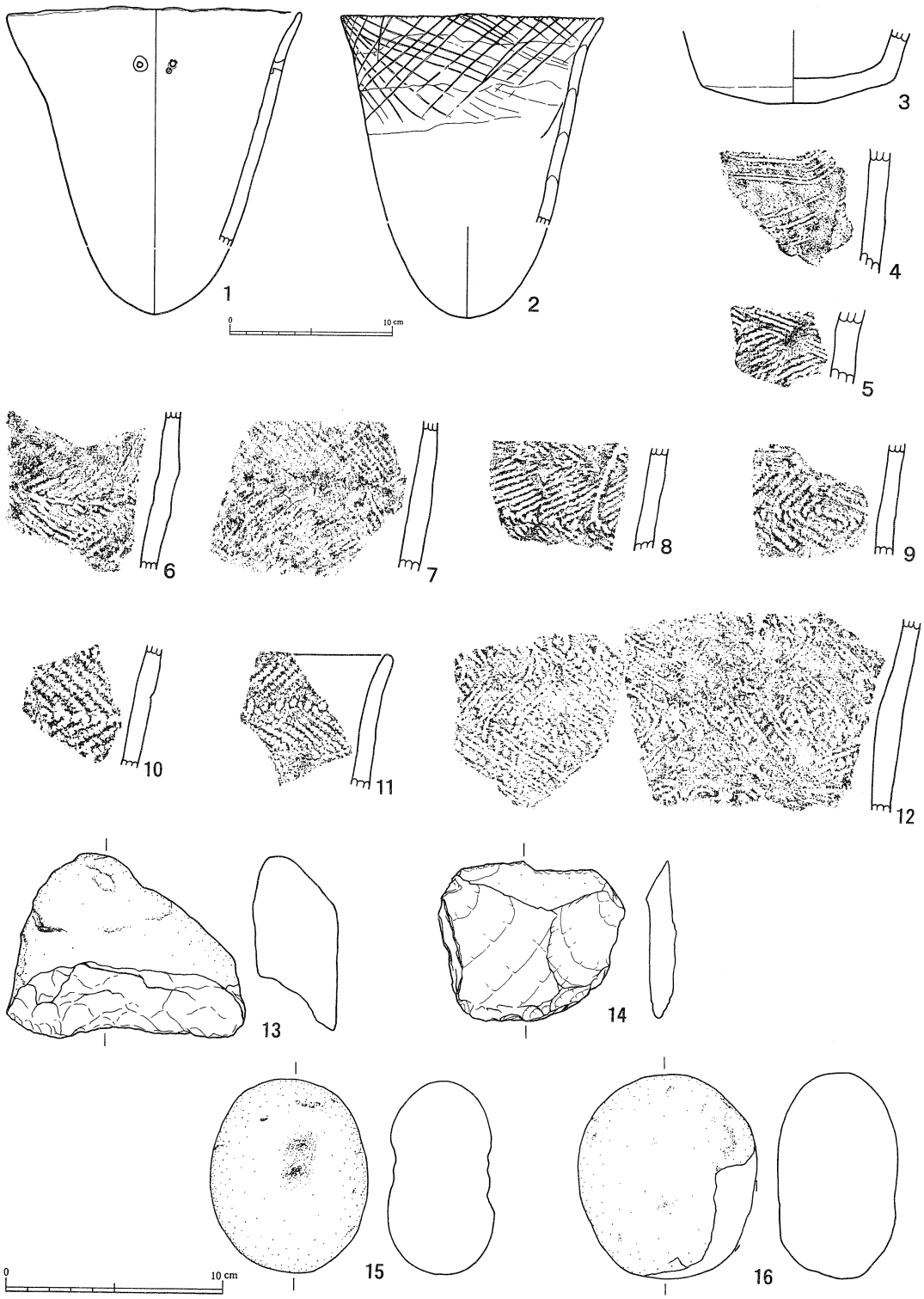


図53 23号住居址出土遺物1／3（1、2は1／4）

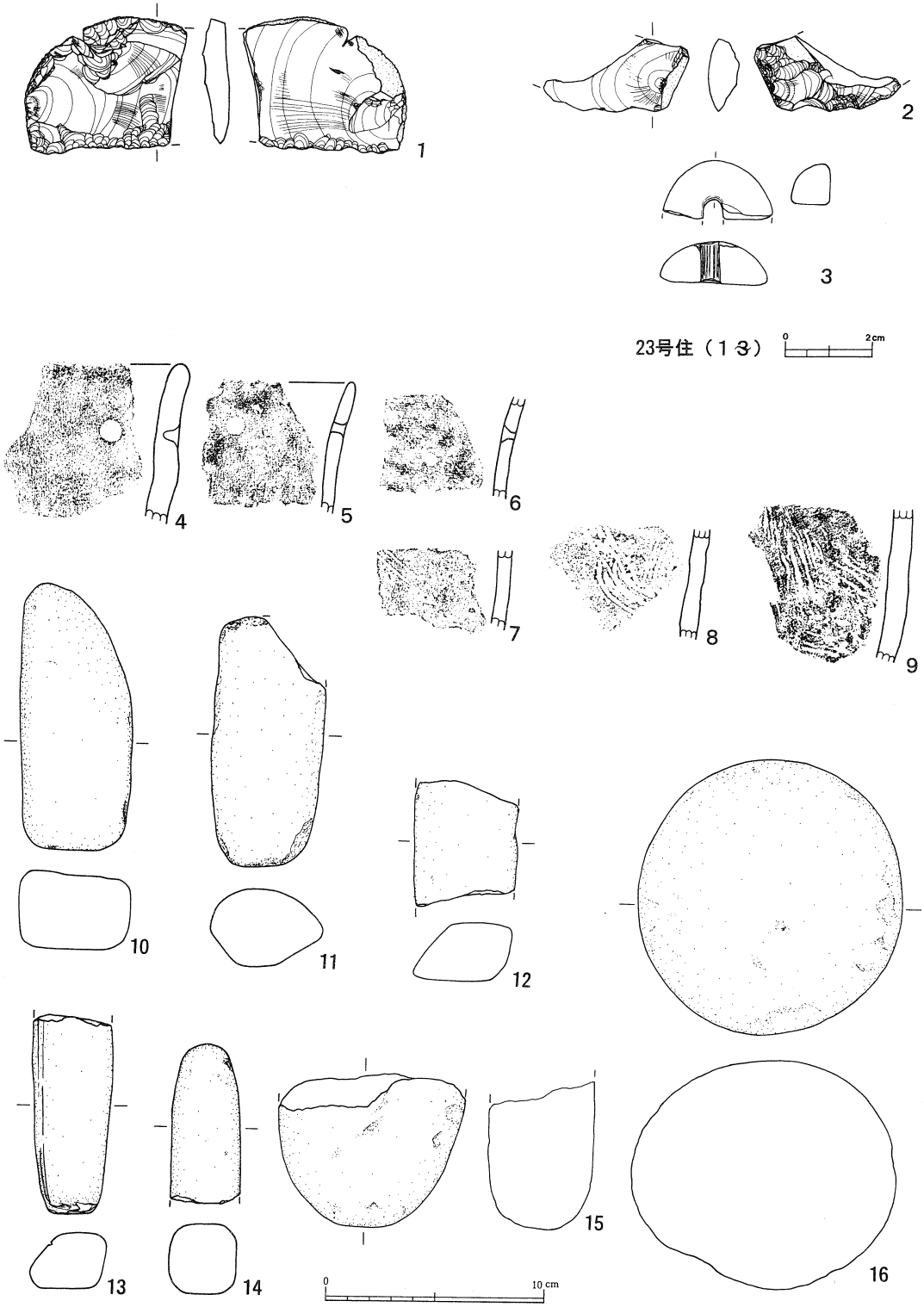


図54 23、24号住居址出土遺物1／3（1～3は2／3）

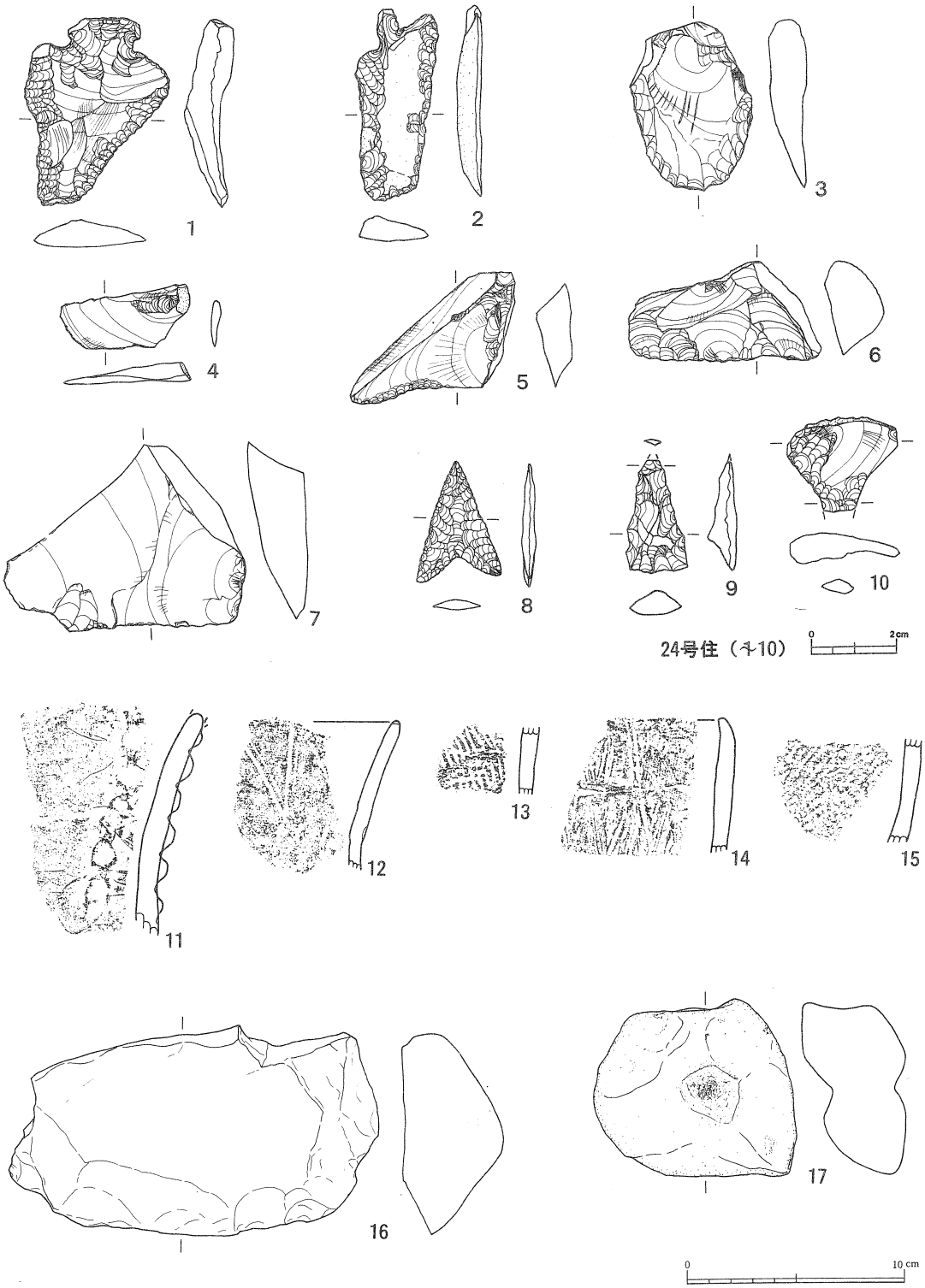


図55 24、25号住居址出土遺物1／3（1～10は2／3）

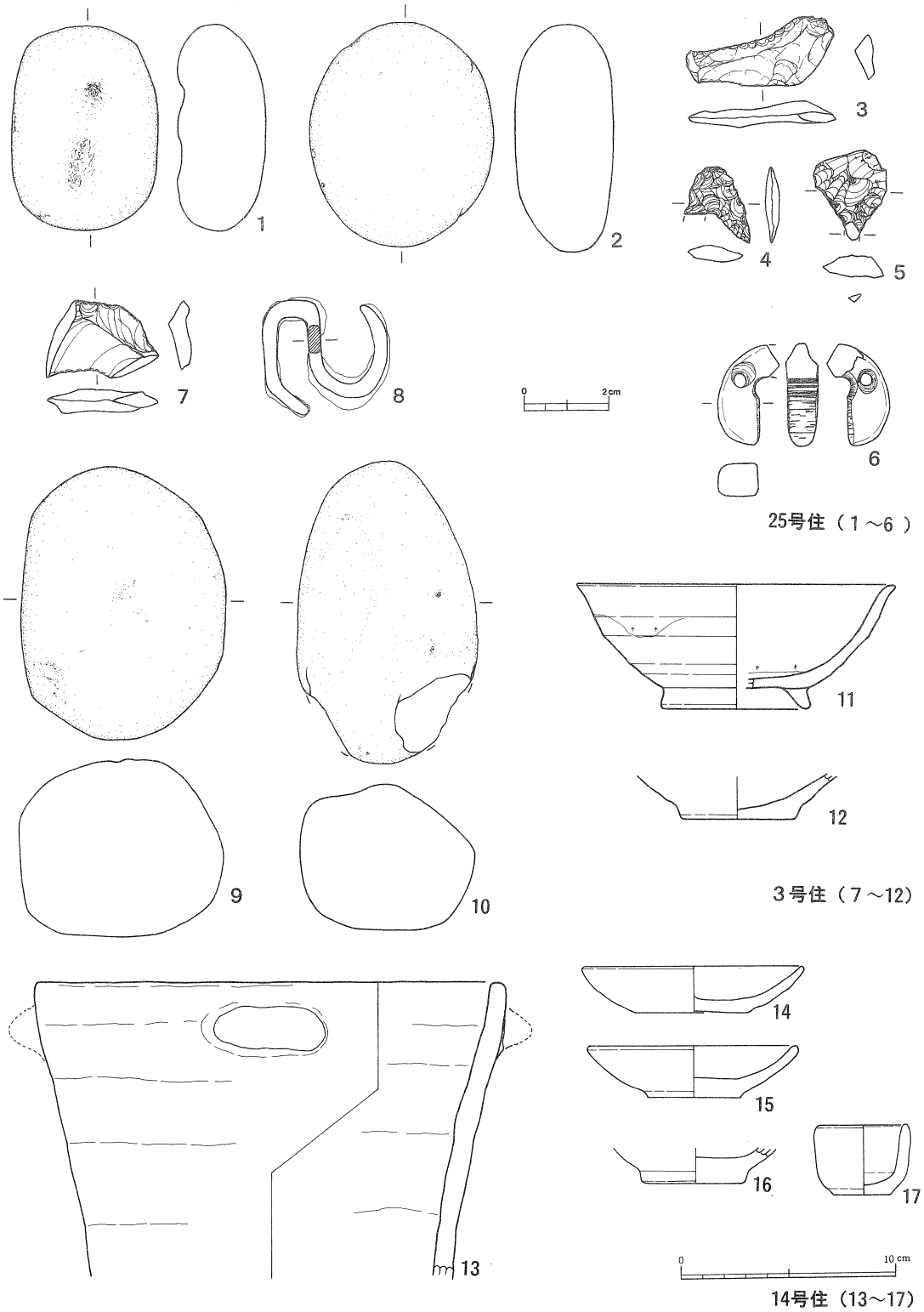


図56 25、3、14号住居址出土遺物1/3（3～8は2/3）

付編

白州町教育委員会

上北田遺跡 炭化材・炭化種子同定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

貴、白州町教育委員会殿より御依頼のありました「上北田遺跡 炭化材・炭化種子同定」が終了致しましたので、その結果を下記の通り御報告申し上げます。

記

はじめに	p．1
1．材同定	p．1～3
2．種子同定	p．3～4
3．まとめ	p．4
文献	p．5

上北田遺跡から出土した炭化材および炭化種子の同定

はじめに

上北田遺跡は、白州町横手字上北田に位置し、釜無川の支流である尾白川と大武川にはさまれた河岸段丘の高位面に立地する。

発掘調査の結果、本遺跡からは縄文時代前期初頭の住居址22軒，平安時代以降の住居址３軒，中世と考えられる掘立柱建物址２軒，土坑220基と溝状遺構などが検出されている。

今回の調査では、４軒の住居址（２号，17号，18号，20号）から出土した炭化材について材同定を行いその樹種を明らかにする。また、17号，18号住居址については、炭化種子の同定も行い当時の可食植物について検討を行う。

１．材同定

（１）試料

試料は、上北田遺跡の４軒の住居址（２号，17号，18号，20号）から検出された炭化材６点である。試料が採取された住居址の時代は、いずれも縄文時代前期初頭でNo.1～5は建築材，No.6は燃料材と考えられている。

（２）方法

試料を乾燥させたのち横断面・放射断面・接線断面の３断面を作製、走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同定した。

（３）結果

同定結果を表１に示す。６点の試料のうち、No.1は節であり道管要素が認められることから広葉樹であることはわかるがそれ以上の同定はできなかった。その他の５点の試料は、確実な同定ができず類似種としたものもあるが３種類が同定された。同定根拠となった主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。なお、現生種の一般的性質などについては、「木の事典第２巻」（平井，1979）を参考にした。

表１　炭化材の樹種

番号	検出遺構など	用　途	樹　種　名
No.1	２号住居址	建築材	広葉樹（節）
No.2	17号住居址	建築材	クサギ
No.3	17号住居址	建築材	クリ
No.4	18号住居址	建築材	クリ類似種
No.5	18号住居址	建築材	タケ亜科の一種
No.6	20号住居址　地床炉中	燃料材	クリ類似種

・クリ（*Castanea crenata*）　　ブナ科

環孔材で孔圏部は１～４列、孔圏外で急激に管径を減じのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～楕円形、小道管は単独および２～３個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形、ともに管壁は薄い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、樹木や海苔粗朶などの用途が知られている。樹皮からはタンニンが採られ、果実は食用となる。各地の遺跡からの出土例の多い樹種の一つである。

・クサギ（*Clerodendrum trichotomum*）　　クマツヅラ科

環孔材で孔圏部は３～４列、孔圏外でやや急に管径を減じのち年輪界に向かって漸減する。大道管は管壁厚は中庸、横断面では楕円形、ほとんど単独、小道管は管壁はやや厚く、横断面では楕円形～多角形、単独および２～４個が複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ型、１～６細胞幅、50細胞高を越えることもある。柔組織は周囲状、翼状～連合翼状およびターミナル状。年輪界はやや不明瞭。

クサギは北海道南西部以南の全土に自生する落葉低木で、庭木としても植栽される。その名の示すように葉に悪臭がある。材は軽軟で、用途は特に知られていない。

・イネ科タケ亜科の一種（Gramineae subfam. Bambusoideae sp.）

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱をもつ。

タケ亜科は、タケ・ササ類であるが解剖学的特徴では区別できない。

（４）考察

・建築材

５点の試料（No.1～5）は、クリ２点（類似種１点），クサギ１点，タケ亜科の一種１点，広葉樹（節）１点という結果であった。今回の試料は４つの住居址で５点であり、この結果から各住居址の建築材の傾向等について推定することは困難である。しかしながら、５点中２点出土しているクリは、時代を問わず建築材として一般的な樹種である。柱材等強度を必要とする部位にも使用されてたことが知られており、本遺跡でもクリの強度等を意識した用材選択があったことが考えられる。また、タケ亜科は柱等の部位よりも屋根材，壁材，敷物等に用いられたものと考えられる。

・燃料材

No.6のクリ１点のみである。したがって、今回の結果から当時の燃料材の傾向等について推定することは困難であるが、建築材に用いられていたクリが燃料材としても有用材として認められ

使用されていたことが考えられる。

2．種子同定

（1）試料

試料は、縄文時代前半の住居址（17号，18号）から出土した炭化種子20点である。これらの試料については、同定結果とあわせて表に示す。なお、ここでいう「種子」とは、形態学的な「種子」の意味ではなく、果実や偽果を含めた広義の意味での「種子」である。

（2）方法

肉眼あるいは双眼実体顕微鏡を用いて形態の特徴から同定を行った。

（3）結果

同定結果を表2に示す。同定された種類は、コナラ属A，コナラ属B，クリの3種類である。以下に形態的特徴を記す。

表2　炭化種子同定結果

番号	検出遺構	種　　類	番号	検出遺構	種　　類
No. 1	18号住居址	コナラ属　A（子葉）	No. 11	18号住居址	クリ（子葉）
No. 2	18号住居址	コナラ属　A（子葉）	No. 12	18号住居址	芽（花芽？）
No 3	18号住居址	コナラ属　A（子葉）	No. 13	18号住居址	芽（花芽？）
No. 4	17号住居址	コナラ属　A（子葉）	No. 14	18号住居址	果実？
No. 5	17号住居址	コナラ属　A（子葉）	No. 15	18号住居址	芽（花芽？）
No. 6	17号住居址	コナラ属　B（子葉）	No. 16	18号住居址	同定不能
No. 7	17号住居址	コナラ属　B（子葉）	No. 17	18号住居址	同定不能
No. 8	17号住居址	コナラ属　B（子葉）	No. 18	18号住居址	同定不能
No. 9	18号住居址	コナラ属　B（子葉）	No. 19	18号住居址	同定不能
No. 10	18号住居址	コナラ属　B（子葉）	No. 20	18号住居址	同定不能

・コナラ属　A　（*Quercus* sp. type A）　ブナ科

子葉が検出された。炭化が著しく黒色。大きさは最も大きい試料番号1の個体で縦軸15mm、横軸15mm程度。ほぼ球形で先端部は少し突出し、基部はややへこんでいる。維管束の跡が深い溝となって縦方向に何本も見られる。表面には脈状の維管束の跡がみられる。外形から判断すると、コナラ属の中でも比較的球形に近い果実を作る種類（クヌギ・アベマキなど）のどれかにあたると思われるが、いずれにあたるかを判断することはできない。全面に乾燥によって萎縮したときに生じたと思われるしわ模様が存在する。

・コナラ属　B　（*Quercus* sp. type B）　ブナ科

子葉が検出された。炭化が著しく黒色。大きさは最も大きい試料番号8の個体で縦軸18mm、横軸11mm程度。楕円形で先端部は少し突出し、基部はややへこんでいる。維管束の跡が深い溝となって縦方向に何本も見られる。表面には脈状の維管束の跡がみられる。外形から判断すると、コ

ナラ属の中でも楕円形の果実を作る種類（コナラ・ミズナラなど）のどれかにあたると思われるが、いずれにあたるかを判断することはできない。全面に、乾燥によって萎縮したときに生じたと思われるしわ模様が存在する。

・クリ　（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科

子葉が検出された。炭化が著しく黒色。大きさは縦軸12mm，横軸14mm，厚さ7mm程度。上面観は偏平な楕円形、側面観は縦方向につぶれた楕円形。維管束の跡が縦方向に向かって深い溝となってみられる。表面には、乾燥によって萎縮したときに生じたと思われるしわ模様が存在する。

（4）考察

今回検出された種子はいずれも古くから食用として利用されていた種類である。今回検出された個体は、いずれも果皮が取り去られており、また萎縮して堅くなっている。この点から考えると、これらの種子は食用として利用されていた可能性が高く、保存のための処理（水さらし・乾燥）を施して蓄えておいたものが何らかの原因によって炭化したものなのかもしれない。

コナラ属の子葉を食用とする場合には「あくぬき」が必要となるが、このような技術を当時の人が持っていたということは興味深い結果である。たとえば、高度な「あくぬき」の技術を要する「トチの実」の場合でも、遺跡の出土状況などから縄文中期にはすでに行われていたと考えられている（渡辺，1975）。コナラ属Ａが仮にクヌギやアベマキだとした場合、これらの「ドングリ」は特に「あくぬき」が難しいことから、当時食用として利用されていたとすれば、当時の調理技術を語る上で興味深い結果であろう。

クリは、「あくぬき」をする必要がない可食植物である。縄文時代から出土するクリは２cm以内の小型のものが多いが（粉川，1983）、今回出土したものも同様に小さい。

３．まとめ

材同定では、建築材としてクリ，クサギ，タケ亜科が使用されていたことが明らかとなり、このうちタケ亜科については屋根材，壁材，敷物等に使用されていたことが推定された。また、燃料材ではクリが使用されており、クリが建築材の他に燃料材にも使用されていたことがわかった。

種子同定では、同定できない試料もあったが、コナラ属Ａ，Ｂとクリの３種類が確認された。これらの種子はいずれも果皮が取り去られていることや萎縮して堅くなっていることから食用として利用されていた可能性が高く、保存のための処理を施して蓄えておいたものである可能性が指摘された。

食料として利用された可能性があるクリが建築材や燃料材にも利用されており、一見すると矛盾を感じる。このような問題に対し、千野（1983）は10年生前後までのクリが収量が多く、それ以降は収量が減少することに注目し、若木は食料源，老木は建築材として用いたことを推定している。今回の結果は、本遺跡でも同様のことが行われていたことを示しているのかもしれない。

文献

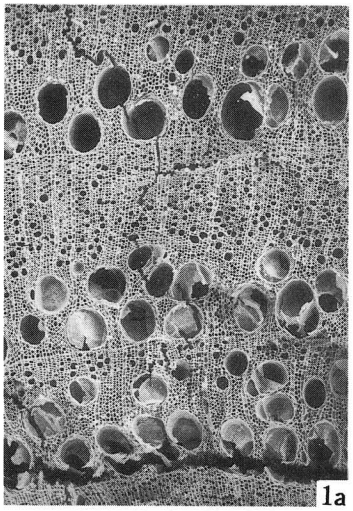
平井信二（1980）木の事典　第２巻．かなえ書房．

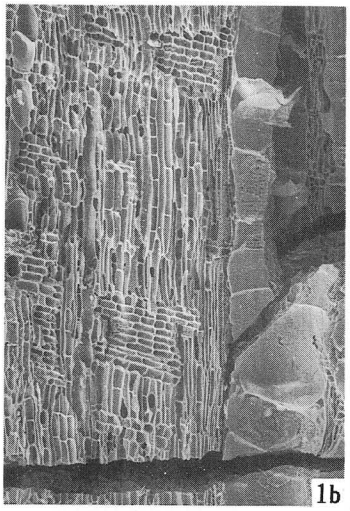
粉川昭平（1983）縄文時代の主な植物食糧．「縄文時代の研究　２　生業」，p.42-49,雄山閣．

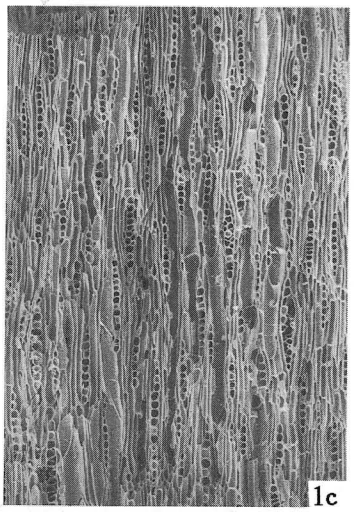
千野裕道（1983）縄文時代のクリと集落周辺植生　－南関東地方を中心に－．東京都埋蔵文化財センター研究論集Ⅱ，p.27-42，財団法人東京都埋蔵文化財センター．

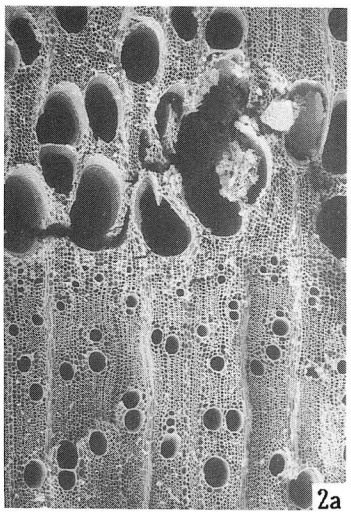
渡辺　誠（1975）縄文時代の植物食．雄山閣，247p.

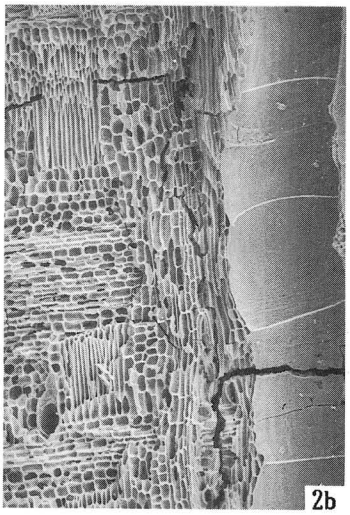
図版1　炭化材

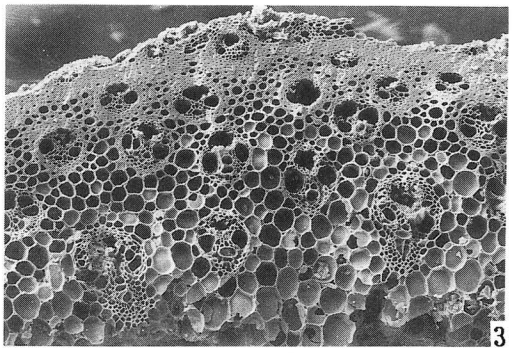










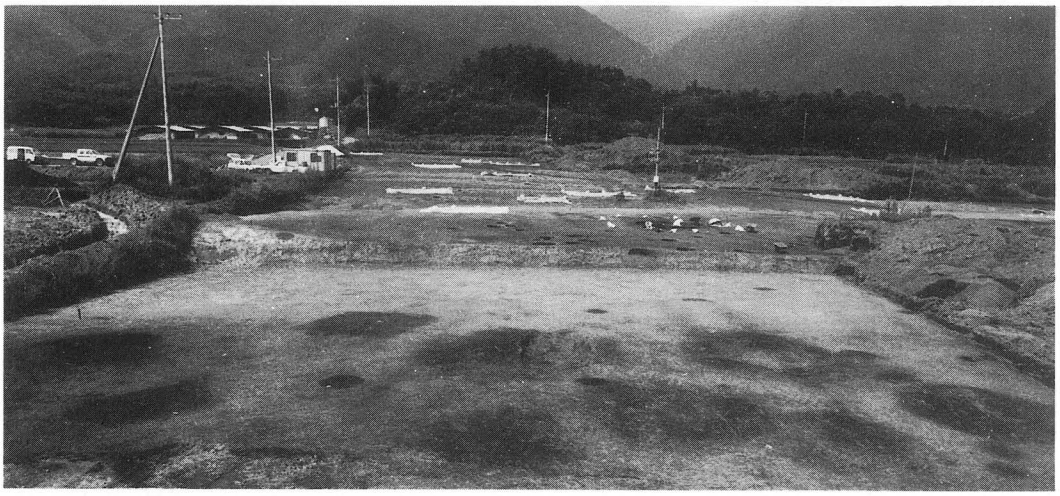


1. クリ（No. 3），2. クサギ（No. 2），3. タケ亜科の一種（No. 5）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μ：a
100μ：b, c, 3

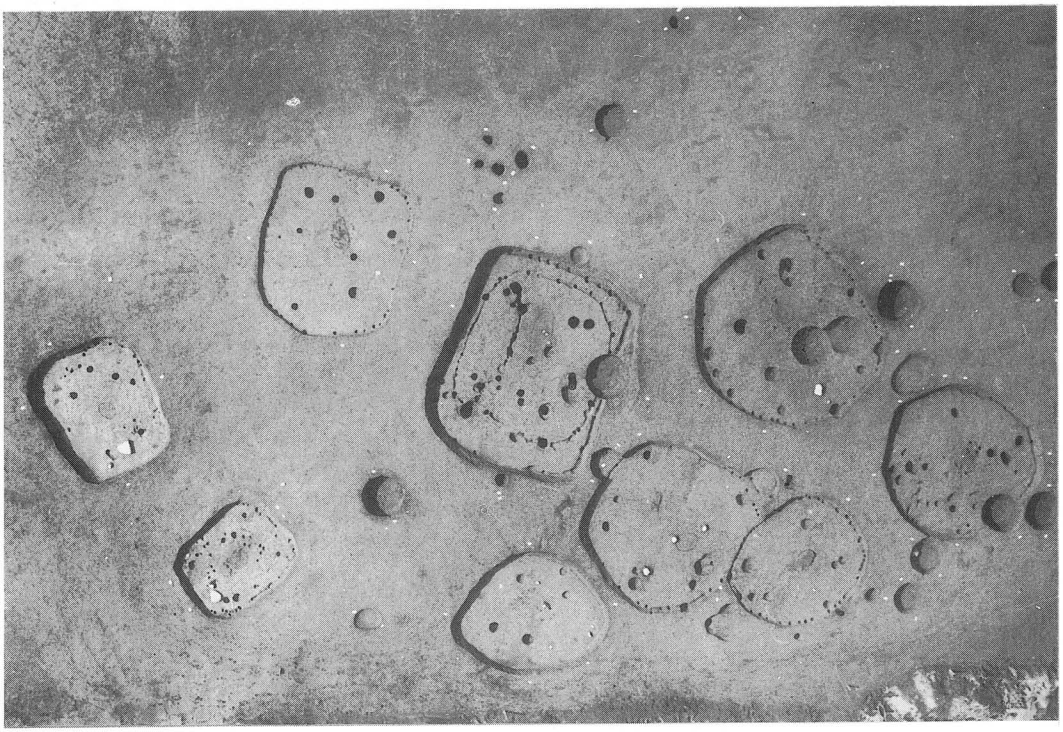
図版２　炭化種子

１．コナラ属Ａ・子葉（試料番号；１）　　２．コナラ属Ｂ・子葉（試料番号；８　）
３．クリ属・子葉（試料番号；11）



全景（東から西へ）上、調査前 中、調査中 下、調査後

図版４



近景　上、23号住から南へ　下、調査区東（空撮）

空撮　上、調査区中央　下、調査区北

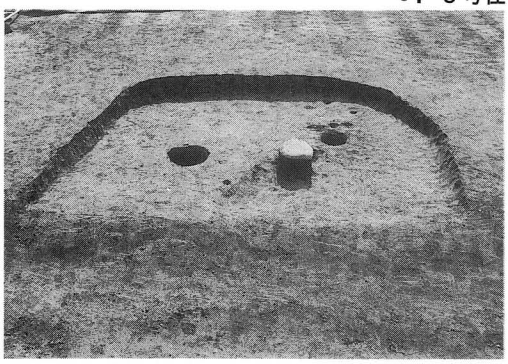
図版６

a、２号住

b．４号住

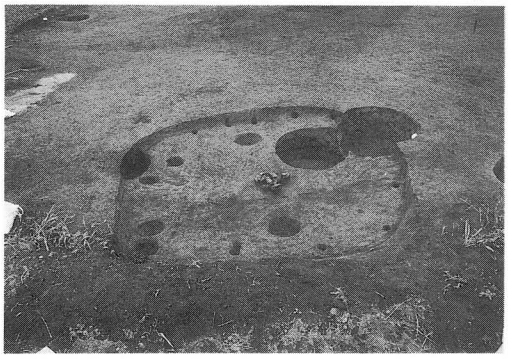
c．５号住

d．６号住

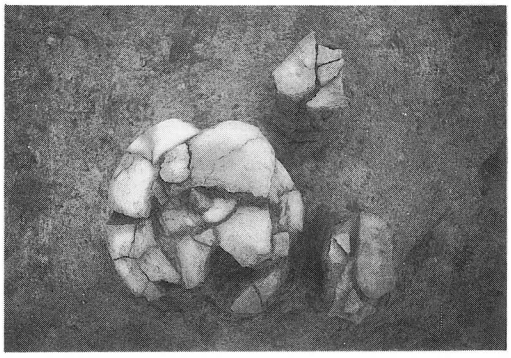


e．７号住

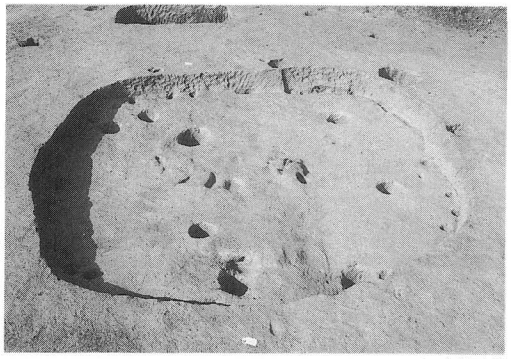
f．８号住



g．９号住

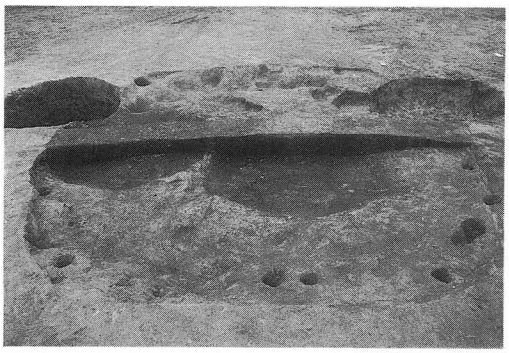


h．９号住土器



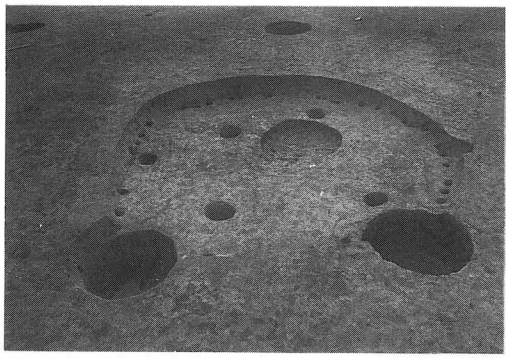
a．10号住

b．11号住

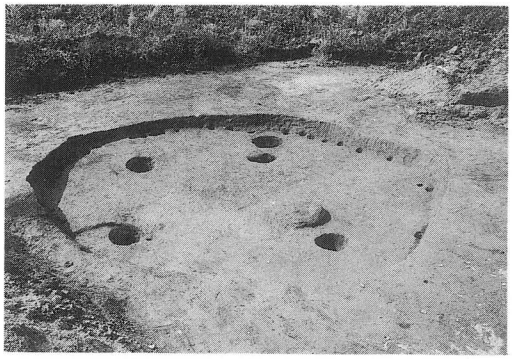


c．12号住

d．13号住



e．15号住



f．16号住

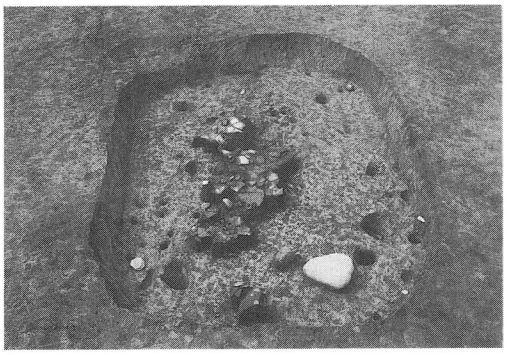
g．16号住 土器

h．16号住 土器

図版８

a．17号住

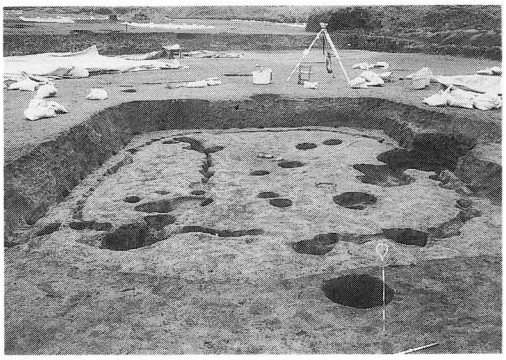
b．17号住 炭化材



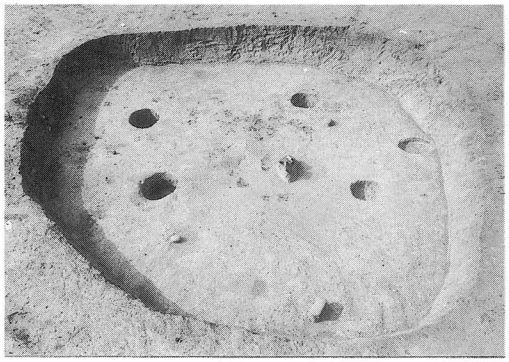
c．18号住

d．19号住

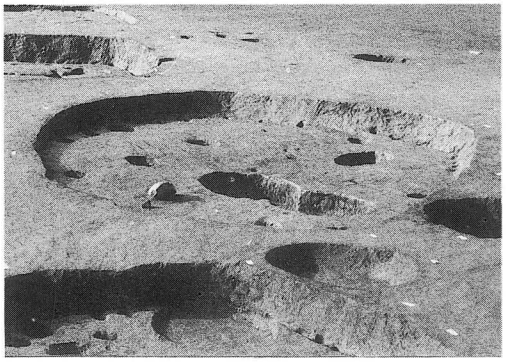
e．20号住 土器



f．20号住

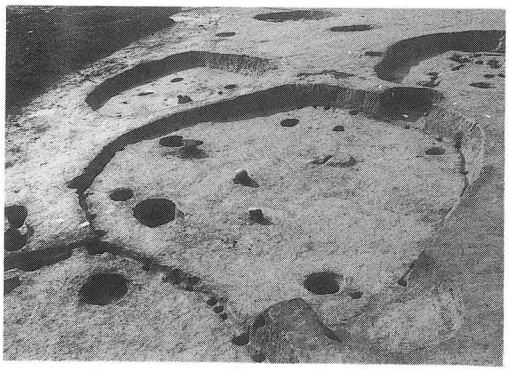


g．21号住

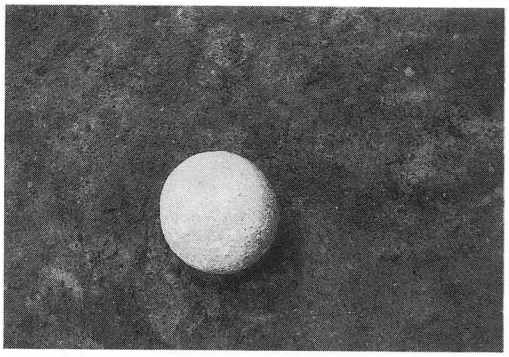


h．22号住

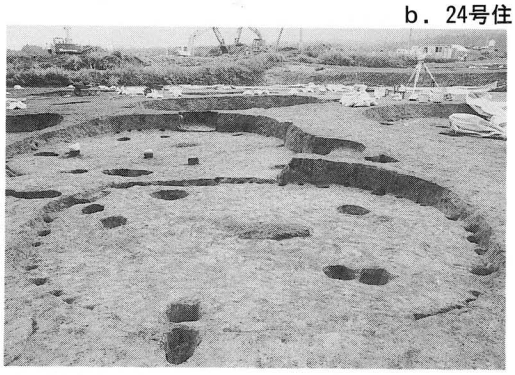
ａ．23号住



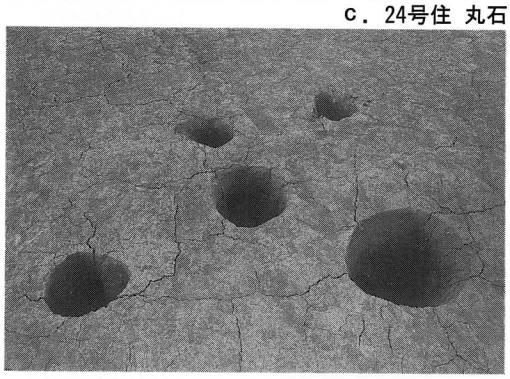
ｂ．24号住



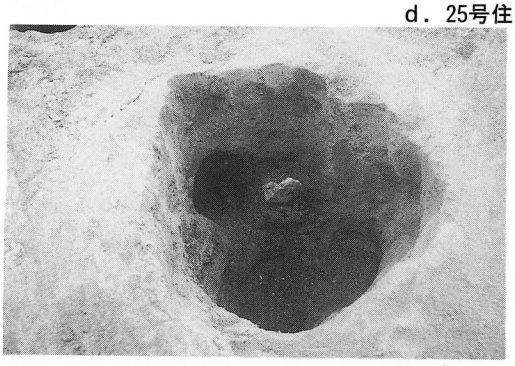
ｃ．24号住 丸石



ｄ．25号住

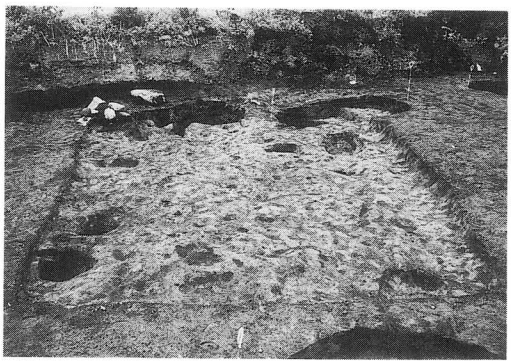


ｅ．粘土貯蔵穴



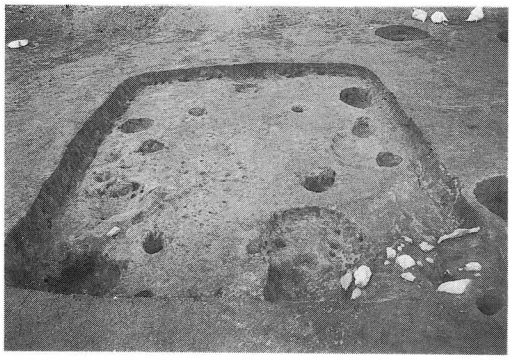
ｆ．粘土貯蔵穴

ｇ．18号住 作業風景



ｈ．１号住

図版10

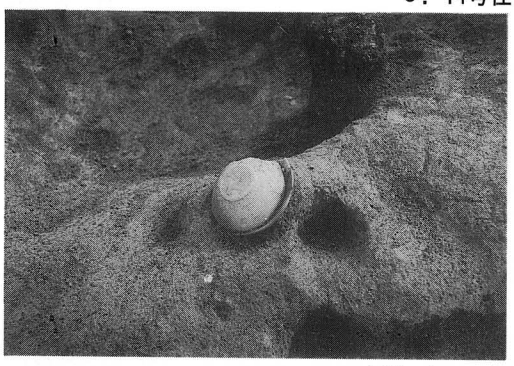


a．３号住

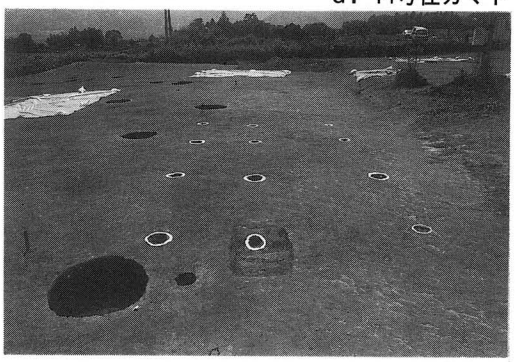
b．３号住 カマド

c．14号住

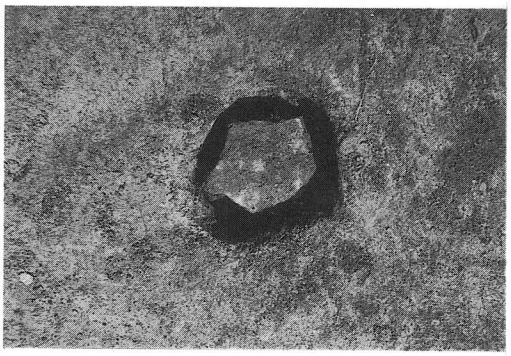
d．14号住カマド



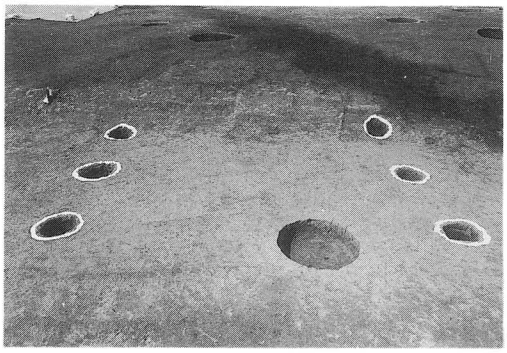
e．14住 カワラケ



f．１号建物

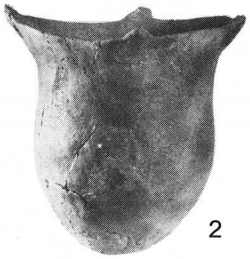


g．１号建物礎石



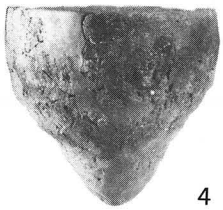
h．２号建物

1

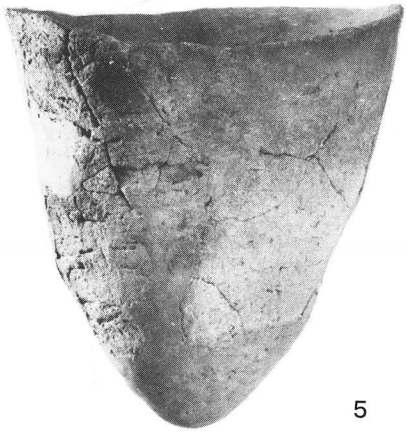


2

3



4



5

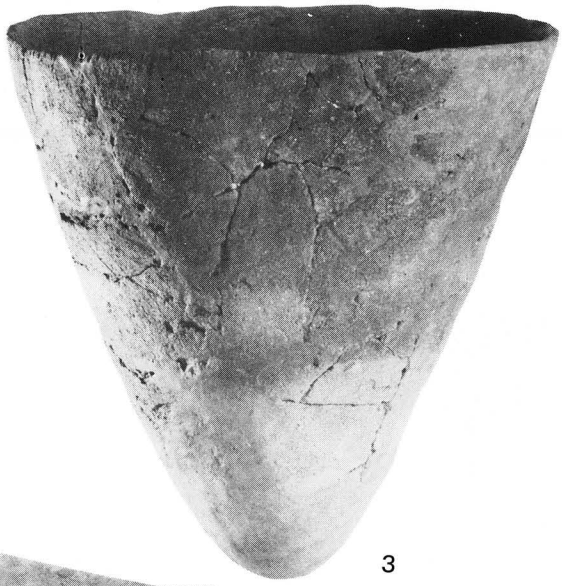
6

1／4

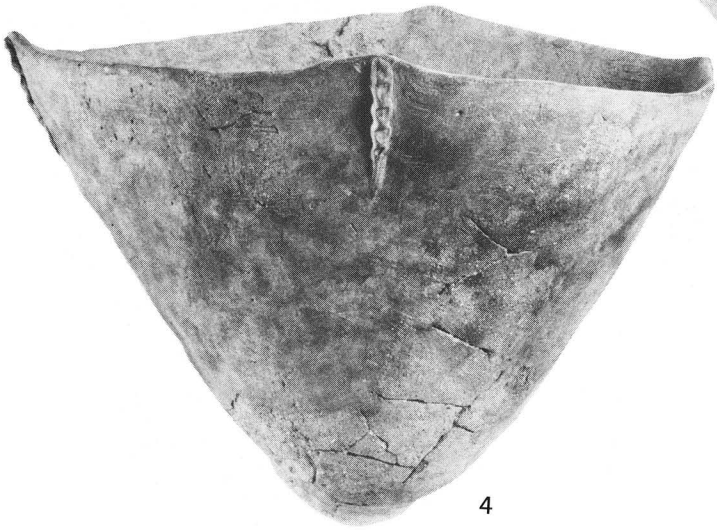
図版12

1

2



3



4

1/4

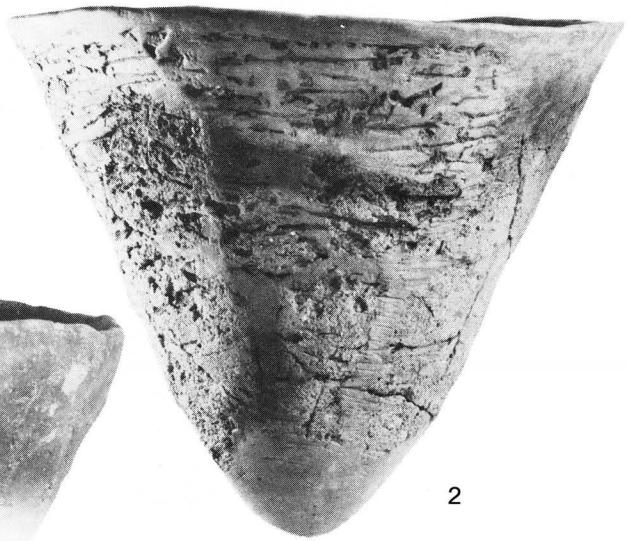
1

2

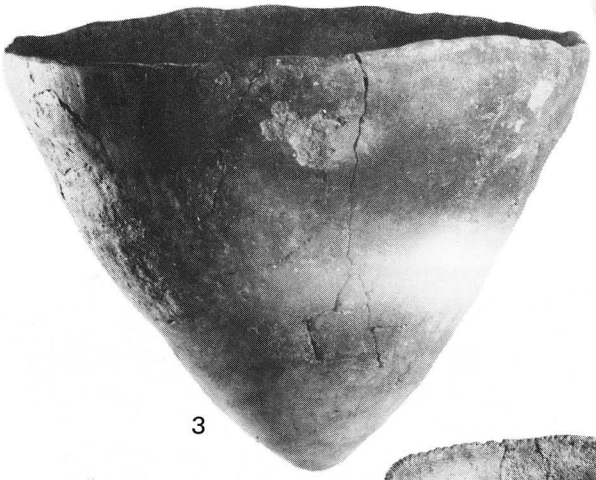
1／4

図版14

1

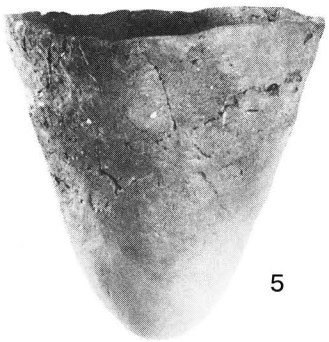


2



3

4



5

1/4

a

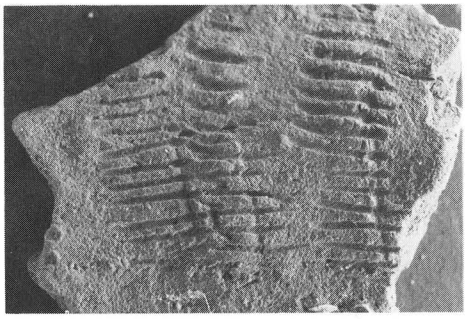
b

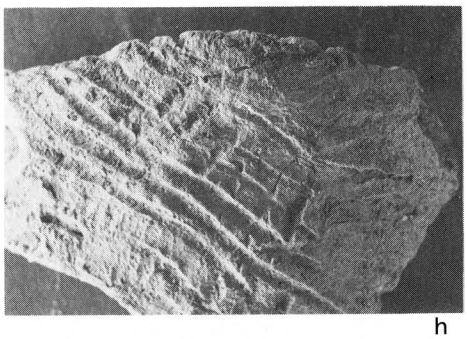
c

d

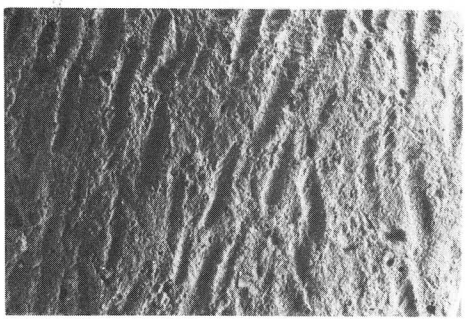
e

f


g


h

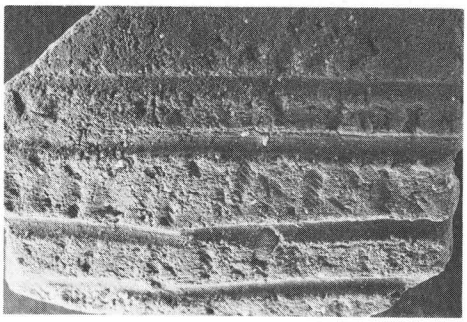
図版16

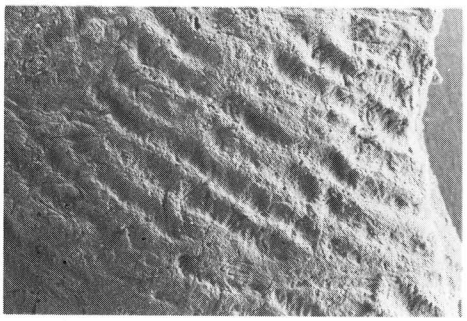

a

b

c

d

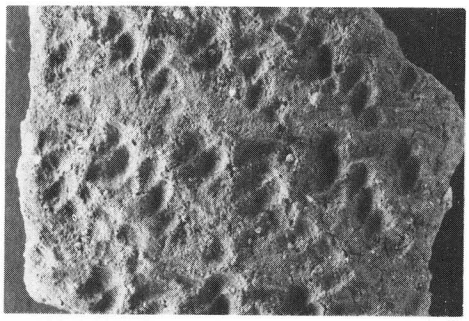

e

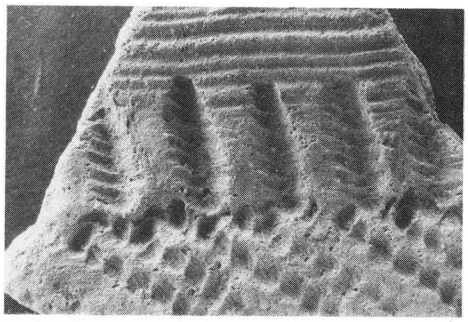

f

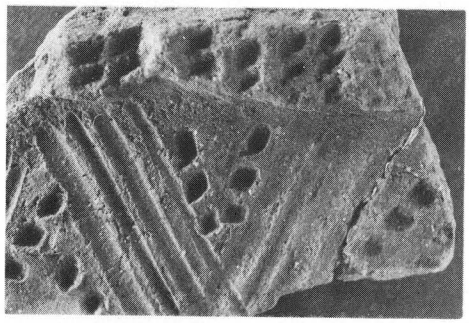
g

h

土器文様②5／4


a

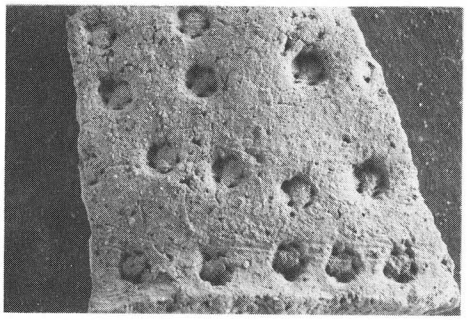

b

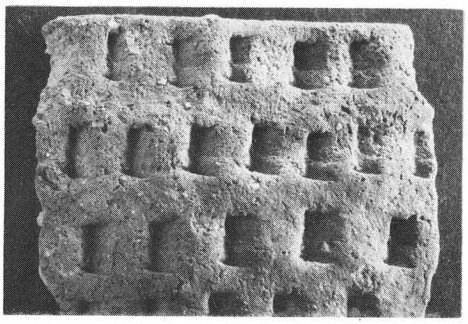

c

d

e

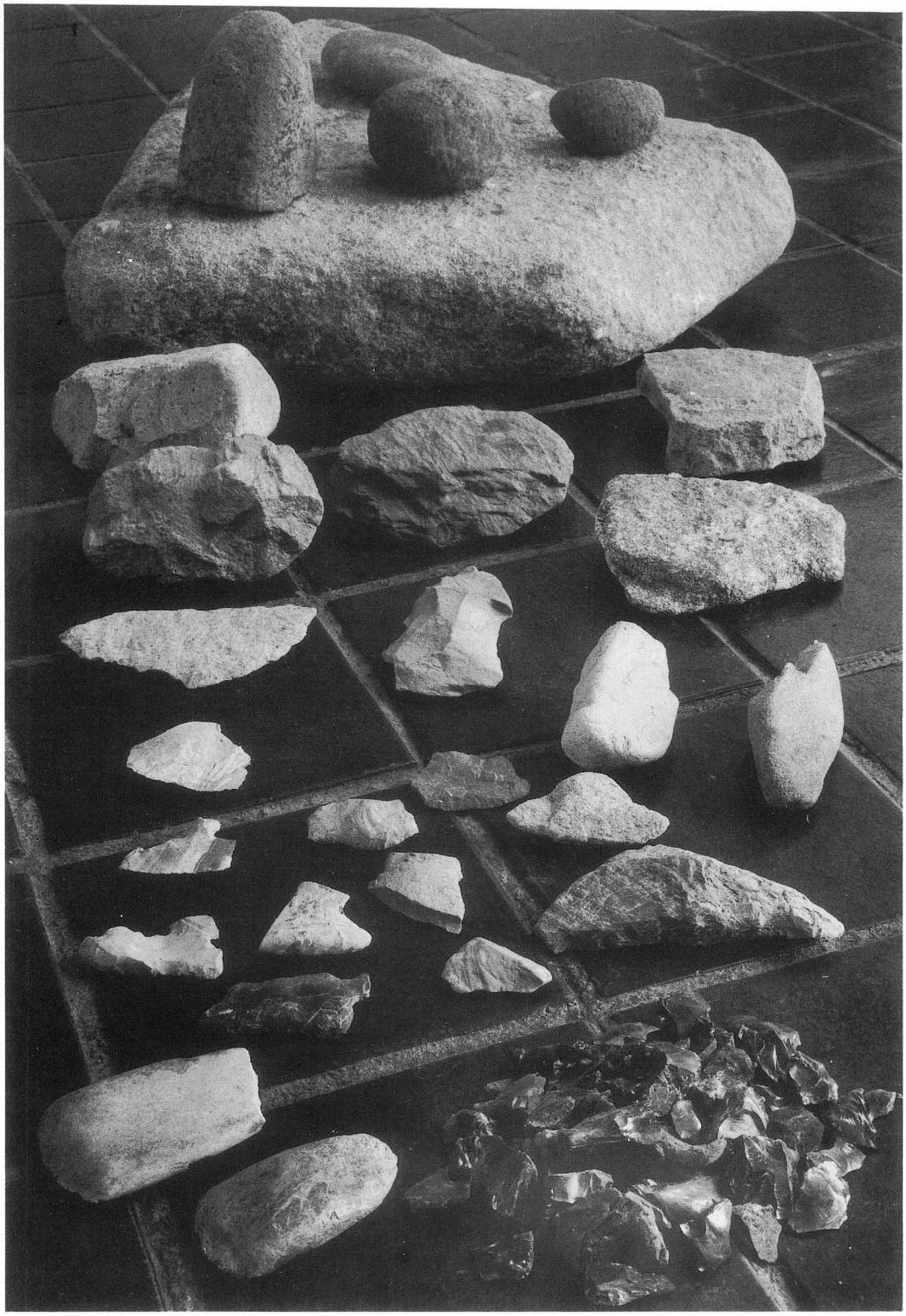
f


g

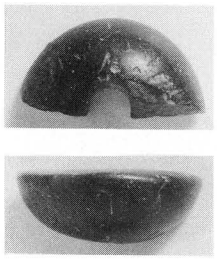

h

土器文様①5／4

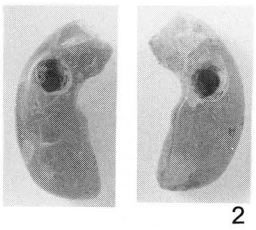
図版18



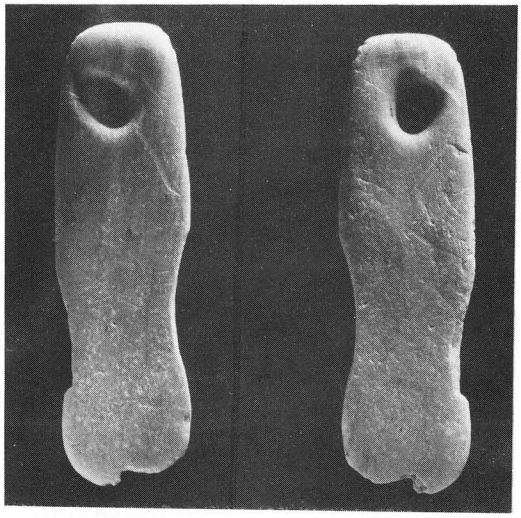
18号住居址出土石器



1

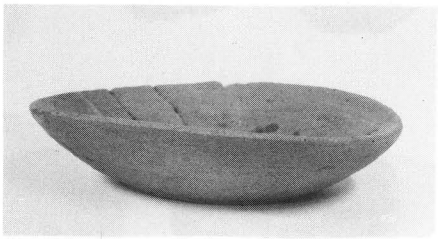


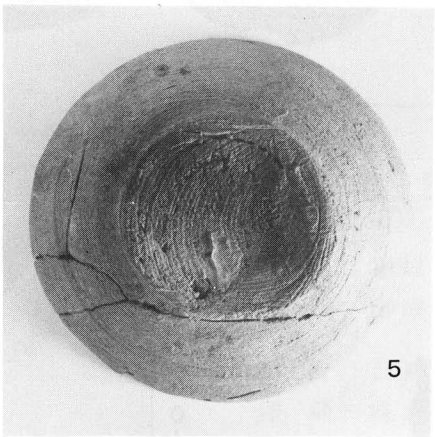
2



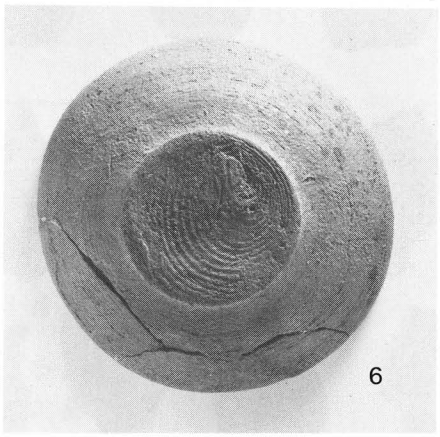
3

4





5



6

1～3（1/1）4～6（1/2）

図版20

3/2

上　北　田　遺　跡

印　刷　平成５年３月１日
発　行　平成５年３月10日

発　行　白州町教育委員会
印　刷　峡北印刷株式会社